Chaos of Hell

karura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｈａｏｓ　ｏｆ　Ｈｅｌｌ

【Ｎコード】
Ｎ８４５２Ｗ

【作者名】
ｋａｒｕｒａ

【あらすじ】
ある日突然ゲームの世界に連れてこられた少年。
自分の名前を無くし、カルラと言う新しい名前を与えられる。
いろいろな苦難に会いながらも、自分を磨き、ひたすらに強さを求めるカルラ。
多くの仲間たちと協力し、本当の強さ、未来を掴むために生きる。

第二章突入しました！！

カオスワールド

「眠いー」

そう言うと同時に、ベッドに頭からダイブした。

俺は携帯を手に取り、メールが来ていないか確かめる。携帯の画面は真っ暗で、電源が入っていない状態になっていた。

あれ、電池切れかな？と思いながら電源を入れてみると、画面がぱっと光り一応は起動した。しかし画面には、「スタートしますか」の文字と「ＹＥＳ」と「ＮＯ」の選択肢があった。

こんな画面起動するときにあったけか？と思ったが、この携帯は昨日買ったばかりの新品で、まだ知らないことがあるんだろうと思い、とりあえず「ＹＥＳ」の方の選択した。

携帯の画面は、一個前の携帯の時から使っている待ち受けに代わり、「新着メール十三件」という表示に代わった。

俺は安心しつつ、十三件もメール来てやがると毒づいたが、全て急ぎの内容でなかったので、起きたら速攻で返そうと思い、携帯を枕元に置いて目をつむった。

目が覚めて、思考が徐々に覚醒されていく。目の前にあったのは真っ白な世界だった。

「・・・うーん。ここはどこだ？」

俺は上半身を起こし、辺りを見渡す。

いまいちというかさっぱり状況が呑み込めず、ただ茫然とするしかなかった。

ここ俺の部屋？などと寝ぼけたことも考えたが、流石に五分もすれば、ちょっとは冷静になれた。

夢・・・にしては映像が鮮明で、思考がはっきりしている、と考えてから自分のプロフィールを思い出す。

名前は藤原（ふじわら）　蓮夜（れんや）。高校二年生の十七歳だ。昨日は家に帰ってき

てから、風呂に入って、晩飯を食べて、宿題などの勉強をしてからあまりに眠かったので十時ごろには眠ったはずだ。もちろん自分の部屋で。

自分の記憶や思考に問題がないとすると、目が見えなくなったのかとも疑ったが、手を持ち上げてみれば、自分の腕がグーパーと動いている。

ふむ、何の異常もない。

「おーい、だれか居ませんかー！」

ただ一人、部屋の中央にいた俺は立ち上がり呼びかけた。返事はなく、虚無感だけが心に広がる。

とりあえず俺は部屋の端まで歩いてみることにした。目的は出口があるとしたらやっぱり壁にあるだろうというのと、この部屋の大きさなども知りたかったからだ。

部屋には一切のものがなく、自分以外の影もない。本当にまっさらな空間なので、距離感がまったくつかめず、壁がどのくらい先にあるのかもよくわからない。ひたすらに歩いてみたが、一向に壁には当たらず、自分が進んでいるのかさえ分からない妙な恐怖感が出てきた。

「ほんとにここはどこだよ・・・・」

正直に言えば、最初からどこか嫌な予感はしていたが、それでも今現在自分がどういう状況にあるのか知りたいという好奇心も少しはあった。

軽く三十分は歩いたが、もといた場所と何ら変化はない。途中で走ってみたりもしてみたが結果は同じだった。

歩くことをやめ、腰を下ろす。床を触ってみるとゴムに近いがどこか違和感のある質感だった。

そういえば全然気にしていなかったが、服装は寝る前に着ていたスウェットだ。冬も近づきだんだんと寒くなっていたので、一瞬間ほど前に買って来た。上は黒、下は白のほとんど新品のスウェット。下着も完全に寝た時のままだった。

こんなわけのわからない状況で、ここまで自分が冷静でいられるのが少しおかしくなって、軽く口元が緩む。
今更ながら自分の状況を客観的にみてみる。
「えーっと・・・なんの目的かわからないけど、俺が寝た時を狙って、部屋に侵入し、俺が起きないようにこの部屋まで運んできたと。つまりは、誘拐・・・・・、かな」
我ながらずばり的中してるんじゃないかという名推理。
しかし、俺の家はごく一般的な家庭で、誘拐なんかをするにはもっと金持ちの家のお坊ちゃんとかを誘拐したほうがいいんじゃないのか・・・・と思う。
なんにせよ、俺はなんらかの方法でこの部屋に閉じ込められたことになる。この後の事はわからないが、出口すらわからないこの部屋で、無暗に歩き回るも逆に危ない気がする。
俺は寝転がって天井を見上げた。天井も真っ白で、照明器具なんかも見当たらない。本当に何もない部屋だ。目をつむり、俺は今自分が何をすべきなのかを深く考えてみる。
どれだけの時間が過ぎたのか分からないが、俺は元の姿勢で寝転がっていた。
たまに、起き上がってはそこらへんを歩き回ってみたり、大声で叫んでみたりしたが、これと言って反応はなく、結局なんの案も浮かばず、途方に暮れるばかりであった。
すでに自力での脱出に諦めかけていた、ここに連れてきた犯人達――理由は分からないので犯罪者とは言えないかもしれないが――に任せるしかないというのが、すでに自力での脱出に諦めかけていた今の俺の考えだった。
まだ、殺されたり、拷問されたりすると決まったわけじゃない。だいいち、万引きすらしたことがない俺には、そんなことされる筋合いもない訳だが、誰かの恨みを買っていたりすることはあるかもしれない。どっちにせよ自分の力ではどうしようもないと考えた俺は、ただただ時間が過ぎるのを待った。

本当に何もない空間では、時間が過ぎているのかさえ分からなくなる。自分の心臓が動いているのを感じなければ、本当に止まっているように感じているだろう。

たぶんこんな状況がずっと続けば、考え方とかがおかしくなって、自我が崩壊したりするかもしれないなー、と自分でも苦笑するほど楽観的に考えていた。それが犯人の目的かもしれないが、最終的には分からないという答えにたどり着く。

途中からは考えることすらやめて、ぼーっとしているだけになった。

体感的には、五時間は軽く経っていると思う。空腹感などは全くなかったが、危機感は徐々に高まってきていた。

正直に言うと、そろそろ耐えられなさそうになってきていた。いつまでたっても出られない。それは純粋な恐怖である。

これはある意味一種の拷問だなと純粋に思った。

九九七・・・九九八・・・九九九・・・二万七千・・・一・・・・二・・・三・・・・。

心臓が動く音を無意識に数えていた。約一秒に一回のペースでドクンと力強く血を全身に送り出している。単純計算で、脈打つ数を数えはじめてから七時間が経っていた。

未だに状況の変化はなく、始めに持っていた好奇心は全くない。危機感も薄れてきていた。単純に思考が鈍ってきているからかもしれない。

既に手遅れかもしれないが、思考を正常に戻すためにとりあえず立ち上がってみた。普段より体が軽く感じる。これも思考が鈍っているせいかと思ったが、それは少し違うと思った。

軽く歩いてみる。羽が生えたみたいだという形容がよく合うぐらいに自分の体が軽く感じる。

ためしに全力で走ってみたりもした。この特殊な空間のせいで視

覚的には分からないが、体感的には速く走れているような気がする。
もう訳が分からなかった。ふと俺は実はもう死んでいるんじゃないか・・・という考えが思い浮かぶ。ある意味一番現実味があるかもしれないと思ったが、そんなことを考えても始まらないと思い、そのことを考えるのをやめることにする。
体が軽く感じるようになったのは、なぜだかよく分からないが、状況にもなんらかの変化があったはずだと思った。
歩きながら、体のあちこちを探ってみる。これと言って変わったことはなかった。この真っ白な部屋も変わらず虚無だけが広がっていた。
ズボンのポケットの中に手を入れたところで、歩みを止めた。
ポケットの中に何かが入っていた。出してみると、それはタッチ式の携帯端末のようであった。縦に十センチ、横七センチほどの大きさで、携帯電話にしては大き目のサイズだった。黒光りしたそれは、異様な雰囲気を放っている。
もともとそれはポケットには入っていなかったはずだ。自分の服装に気付いた時にポケットには何度も手を入れてみたり、裏返してみたりもした。しかし、こんな携帯端末は入っていなかった。元からなかったというのなら、いつどうやって入れたんだという疑問が浮かんぶ。
どんなに思考が鈍っていても、この部屋で気づかれずにポケットにこれを入れるのは難しいはず。俺は一度も意識を落とした覚えはないし、そもそもこの携帯端末はおかしい。重さは普通の携帯電話と同じだが、さっき走ったりしたときには、なにも感じなかった。普通ポケットにこのぐらいの重さの物が入っていたら、気が付くはずだ。
ためしにポケットに携帯を入れてジャンプしてみた。ポケットに違和感はなく、物なんてなにも入っていないように感じる。ポケットを触ると、携帯端末の感触はなかった。やばい落としたか！！と、慌てて地面を見るが、なにも落ちておらず、ポケットの中に手を突

っ込むと携帯端末は当然のようにそこにあった。
不思議に思って、ポケットから手を出して、ポケットの外から携帯端末に触れようとする。しかし、あるはずの場所なのに携帯端末の感触は感じられなかった。ポケットに手を入れれば触れられるのに、外からは触れられない。左のポケットでもやってみたが、同じことだった。
「どういうことだ？」
俺は首をかしげた。
つまりこの携帯端末は、ある時いきなりポケットに出現して、ポケットに手を入れないと触れられないという代物であるということだ。そんなものこの世にあるか！！とツッコミを入れそうになったが、とりあえず落ち着けと自分で自分を落ち着かせた。
非現実的な事は、なにも今に始まったことではない。冷静になって改めてこの端末を見ると、一個のスイッチもなかった。ためしに画面をタッチしてみるがなんの反応もない。念入りに調べるが、反応なし。無茶苦茶に画面をタッチしてみたり、真上に投げてみたり、声をかけてみたりしたが、結局ピクリともしなかった。
それでも諦めずにいろんなことを試していたら、偶然か必然か画面を覗き込んだ時にちかっと画面が光った気がした。
顔をより一層近づけて、画面を食い入るように見つめる。今まで気付かなかったがウィーンという起動音のような音がしていた。音が消えると同時に、パッと端末の画面が青白い光を放った。俺はあまりの光の強さに思わず目を閉じる。
画面には、「ゲーム参加おめでとうございます」というきらきらと装飾された文字が並んでいた。
読み終わって三秒も経たないうちに画面が切り替わって、キャラクターネームを選択してください、という表示に代わった。
選択肢は三つあって。俺は『カルラ』という自分の名前に一番近かった名前を選んだ。
咄嗟に案内に従ってしまったが、これってどうなんだろうと思っ

たが、この携帯みたいな不思議端末に頼るほかに選択肢がなく、今はただ「現在ダウンロード中」と表示された端末をじっと見つめていた。

十数分ほど待つと「ダウンロード終了」という文字と共にポーンという効果音がした。

続いて表示されたのは、アニメーションのキャラクターのような妖精の女の子だった。画面の中を自由に飛び回った後、妖精はこちらに向いて自己紹介を始めた。

「こんにちは。私の名前はレナです。よろしくお願いします」

レナと名乗った妖精の女の子は、丁寧なお辞儀をした。

「よろしく」

なんとなく挨拶を返してしまった俺は、何をしているんだと馬鹿馬鹿しくなる。正直この妖精が生きているように見えたのだ。

レナは俺の返事を聞いてかそれともただのプログラムなのか、軽く微笑んだ。

レナという少女を他のだれかが演じているという場合もあったが、この時には完全に俺はレナという少女が独立した存在であると認識してしまった。

こんなことをしている場合じゃないと言おうとしたが、俺が口を開く前にレナは言葉を発した。

「最初にあなたがいるその空間は、現実のものとは異なります。現実のあなたは寝ていて、この世界は一種の夢のようなものです。ただし、あなたが感じるとおりこの世界にも感覚はあります。見えるものや触れるものも現実のものとほとんど同じです」

・・・ここが夢の世界？

なんというか驚きというよりも、疑いの方が大きかった。顔にも出てしまったのか、レナは説明を中断し俺の顔をじっとみている。疑いは説明を聞いた後でもいいかと思い「続けて」とレナにお願いした。

正直に言えば、この子が嘘を言っているようには見えないというのもあった。
「はい。ただ、この世界と現実の世界で共有しているものが二つだけあります。それは時間と命です。時間の方は想像がつくかと思いますが、命とは即ち、こちらの世界で死んだ場合、現実世界でも死ぬこととなります」
出来るだけどんなことを言われても冷静でいようと思っていたが、流石にそんなことを言っている場合ではなった。
「待った！！いろいろと聞きたいことが出てきた」
「今は質問に答えることが出来ません。全ての説明が終わった後、質問に答える時間を作ります」
今までいろいろと疑問を飲み込んできた俺も、流石にキレて、携帯端末を床に叩きつけそうになったが、この端末以外にここから出られるヒントが無いと思い必死に怒りを抑えた。
そんな俺の心境を知ってか知らずか、レナと言う妖精のプログラムは至って冷静だった。
「説明を続けます。この世界は夢です。そしてゲームの世界です。今は何もないこの空間も数時間後にはファンタジーな世界になっていると思います。そしてそのゲームをクリアすることによって、この夢は終わり、あなたは現実の世界へ戻ることが出来ます。それまで現実の世界のあなたたちの体の安全は保障されています。大まかな流れはこんな感じです。ゲームの内容はよくあるＲＰＧです。質問があったら言ってください」
俺はある程度、冷静さを取り戻し、焦っても無駄だと自分に言い聞かせた。
「ここが仮に夢の中だとしよう。しかし俺の体はどこにある？それにどうやって俺の夢に干渉できる？どうして俺を選んだ？」
他にもいろいろと聞きたいことがあったが、今すぐ聞きたいことを三つだけ選んだ。
「順番に行きましょう。あなたの体は現在、とある機関に隔離され

ています。安全対策は完璧なので心配ないです」
とある機関ってどこだと問いただそうとした。しかし、あくまで画面の中の存在であるはずのレナの瞳には「黙って聞いていなさい」と言わんばかりの光が満ちていた。俺はもう黙るほかなく、レナは一度頷いてから、また説明を続けた。
「次に夢への干渉についてです。これはとても難しいんですが、あえていうならば、この世界はあなたの夢というよりも、人工の世界にあなたの意思を持ってきて、あなたにこの世界での夢をみせているような感じです。あなたが夢を見て体験し、どのような行動をとるのかを脳の神経から読み取り、高速で処理し、この世界に反映させているのです。ただしあなた方の本体が夢を見ていると言っても、今のあなたは起きている状態です。あなたの思考は普段と変わらず、この世界のですが、体は動かせます。
つまりあなたは、人工的に作られた世界に意識だけ、思考だけが存在しているということです。あなたがこの世界でどれだけ動こうと、現実の世界では一切の動きはありません。逆に現実の世界であなたたちがどれだけ動こうとこちらの世界には一斉関係ありません。今あなたにとって重要なのは、現実の脳とその思考、それにこの世界だけです。
最後にどうしてあなたを選んだかですが、別にあなただけが選ばれたわけではありません。ほかにも選ばれた者はたくさんいます。ほかに質問はありませんか？」
表情を変えずに淡々と説明したレナは、ここぞとばかりに優しい笑みを浮かべた。
ここまで来ると全て信じられるような気がしてきた。
「なぜこんな事をするんだ？」
「目的は、データがほしいからです」
「なんのデータだ？」
「言えません」
レナはきっぱりと、今までで一番意思のこもった声で言った。

俺はそれ以上聞くことが出来ず黙るしかなかった。
「お前は生きているのか？それともただのプログラムなのか？」
俺が聞くと少女は苦々しげな表情で「私はただのプログラムです」と答えた。
「そろそろ時間です。私の役目はここで終わり、ゲームを楽しんでください」
レナがそういうとブーンという効果音と共に画面は暗くなっていった。
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
俺は半ばすがるように端末に話しかけたが、レナの体は徐々に薄くなり、結局見えなくなった。
画面の全体から光が完全に消えると同時に突然、俺の体を青い光が包んだ。

嫌な浮遊感の後、青い光が消えて視界が晴れる。俺は整備されたてのような石の床の上に立っていた。
視界には大勢の人間が映っていた。
多すぎて人数はよく分からないが、三百六十度、見渡せる限り人しかいない。相当な人数だろう。
自分も含め全員の服装は、中世ヨーロッパの庶民の服装ってな感じだった。
男女比は見た限り六対四程度で男の方が多いように見えた。
全員が声も上げずにひたすらに上を見上げていた。何があるのかと見上げてみれば、そこには白と黒の縞々ピエロがいた。他の色は全くない。肌は真っ白、唇や鼻は真っ黒、見た目が不気味で見ていると何故だか吐き気がしてきた。しかし、そのピエロには目が離せない何かがあった。
ピエロは大きく息を吸い込み、声を上げた。
「全員そろったね。やぁ、ようこそこのゲームの世界へ！！この世

界の名前はアナザーワールドだ！！
　その名の通り、君たちが住んでいた世界とは異なる世界と思ってもらえばいい。
　今から始まる命がけのゲームをクリアしないと、元の世界には戻れない。そしてこの世界での死は現実世界での死を意味している。ここまでは聞いているね！！」
　陽気という形容がよくあうその声はなぜだか、限りなく耳障りであった。
「じゃあゲームの内容を説明するね。今君たちがいるのは、始まりの街。名を≪グランゼル≫そしてこの島の名前は≪ウーノ≫イタリア語で一という意味だね！！すなわちこの島は一の島ってことだ。
　君たちにはこの島を攻略してもらう。攻略というのは、島の解放されている部分を順番に回っていって、その先にあるダンジョンの奥にいるボスたちを倒してもらう。ボスを倒すとまた島の一部が解放されて、またその先にあるダンジョンを目指す。そうやって島のすべてを開放して、次の島へ行ける船着き場の町を目指すんだ！！
　攻略すべき島は何個もあって、すべての島を攻略したら、晴れて君たちはこの世界から出れる。分かったかい？」
　異議を唱える者はいなかった。このピエロの言っていることが脳に直接書き込まれるような感覚がした。今から何をすべきか分かる。いや、分からせられた気分だった。
「街などのセーフティーゾーンにはモンスターは現れないし、入れない、ダメージも発生しない。だから安全地帯にいて、だれかがクリアしてくれるの待つのもありだ。そのほうが賢いかもしれない、だけどそれじゃあ元の世界に帰るのは遅くなる一方だよ。まぁ強制はしないけどさー。
　セーフティーゾーンの外、フィールドではプレイヤーはダメージを受ける。モンスターから攻撃を受けたり、一定以上の痛みを受けたりしたらダメージが発生する。ＨＰがゼロになればその瞬間、こっちの世界でも現実世界でも死ぬ。それを肝に銘じといてね」

なんとも軽い口調だ。命の重さなんてみじんも感じられない。
人々は声をあげずにただ立ち尽くしていた。いや、声を上げようとしても声が出ず、動こうとしても動けない。ここに居る全てのプレイヤーと思われる人々は、ピエロの説明を強制的に聞かされていた。
「この世界はファンタジーの世界だ！！近距離攻撃は結構何でもアリ。遠距離の攻撃は、弓矢とナイフ系の武器だけにしたよ。
ファンシーな魔法なんかも付けたほうがいいかと思ったんだけど、難しそうだったから今はやめといたよ」
今、というところを強調したように聞こえたが、そんなの気にしていられなかった。
「まぁ、後は取説読んでおいてね。君たちが持っている『ポル』っていう携帯電話みたいなのでいろいろ出来るから」
うんうんと言う風に頷くピエロはとても楽しそうであった。じゃあと言って手を広げた。
「君たちはもうこの世界の住人だ。名前も今から新しいものに変わる。がんばって元の名前を取り戻してくれ！！」
ピエロがそういった途端、心の端から何かがぽっかりと空いた気がした、いや気のせいではない、元の名前が思い出せいのだ。
自分の名前は「カルラ」そう認識させられた。
「今から練習がてら、モンスターと戦ってみようか！！」
ピエロがパチンと指を鳴らすと同時に青白い光が再び俺の体を包んだ。

初めての戦闘

目を開いたそこは一言で言うならば闘技場と呼ばれるような場所だった。
約百メートル四方の硬い土の床、その周りには客席と思われる木材で作ったベンチがずらーとならんいる。真上には闘技場の四つ角から伸びた柱が交差して、盛大なオブジェクトが作られていた。
もうここが元の世界ではないのは認めざる負えない。
この場所の作りなんかもそうだが、瞬間移動なんてことは出来るわけがない。
流石にすべてを受け入れることは出来ないかもしれないが、俺が出来ることはやろうと思った。
ここから出るためには、あのピエロ男の言うようにゲームをクリアするしかないと思う。最近はバーチャルテクノロジーを利用した、フルダイブ型のゲームも出来たとニュースでやっていたが、ここまで精密な作りではなったはずだ。映像の粗さで、ゲーマーからは批判が出てたくらいだったらしいから。
この世界はというと、全く現実の世界と同じつくりであるように見える。
だいぶ落ち着いてきて、これまであったことを整理する。
もう逃げられないことは明らかだ。
ゲームのクリアを目指すには強くならなければならない。
そして強くなるにはまず、この世界での戦闘に慣れる必要がある。
あっちから戦闘の練習をさせてくれるというのだから、拒否する道理はない。
「さーってモンスターってのはどんなもんだ」
俺はその時ある意味、ワクワクしていたと思う。何故だか自分はこうなるのが運命だったとさえ感じられた。
「こんにちはカルラ」

いきなり真後ろから声をかけられ、警戒して素早く後ろに振り向いた。そこには女のピエロがいた。さっきの白黒のピエロとは違い、今回のピエロは赤と黒のピエロで、まがまがしい感じがした。
本当の名前を忘れた記憶もあるのだが、「カルラ」という名前が最初から自分の名前であったような感覚の矛盾について考えながら、相手を睨みつけた。
素手で戦うのか？と疑ったが、相手がすぐに否定した。
「私は敵ではないわ」
そういって女は微笑んだが、正直不気味なだけだった。身震いするような寒さを感じたが、いきなり襲ってくるようにも思えなかった。俺は気を張ったままだが、体の緊張は解いた。
「じゃあ練習を始めます。武器は何にしますか？」
唐突にそう聞かれ、少し焦ったが、最初のピエロの説明を聞いたおかげで、どんな武器が使えるのか自然と分かってた。
「じゃあ、剣で頼む」
「片手剣、長剣、大剣、太刀のどれにしますか？」
長剣と太刀で悩んだが女が「後で自由に変更できます」と言ったので、そんなに深く考える必要はないかと思い、俺は「長剣」と答えた。
女は指をパチンと鳴らすと三本の鉄の剣が、俺と女の間の空中に現れた。形は少しずつ違い、どれも切れ味はよさそうだった。
「振ってみてもいい？」
俺が聞くと女は軽く頷く。
右にあった剣を持つ、見た目よりもだいぶ軽く感じた。俺はその剣数回振ってから、地面に思いっきり刺した。思ったよりも深く刺さり、抜くのが大変だななどと思った。
真ん中の剣はさっきのよりも少し重く、割と長めの剣だった。その剣も数回振ってからさっきよりも力を抜いて地面に刺した。重いせいか、さっきとあまり変わらないくらい地面に刺さってしまった。
左にあった剣は他の二本と比べると割と細めだった。長さは真ん

中の剣と同じくらいで、重さも細い割に重く、真ん中の剣よりも少し重いくらいである。数回振ってみると、他のよりも振りやすく感じた。俺は女に「これにする」というと地面に刺さっていた二本の剣は青く光って次の瞬間には消えていた。剣が刺さったはずの穴も消えている。

「俺の心配は無用だったな」

俺が呟くと、女は訝しげな表情で首をかしげた。俺が「なんでもない」と言うと、女は頷いた。

「ではまず、動かない敵から行きましょう」

そういうと女はパチンと手のひらを合わせた。次の瞬間、世界が少し変化した。

現実世界より少しデフォルメされて、よりゲームの世界に近づいた感じだ。自分の手をじっくり見ると薄くても確かにあったはずの毛がなくなっており、毛穴も消えていた。

デフォルメされたと言っても、ドットなんかで構築されているのではなく、元の世界が丸みを帯びたような、とにかく言いにくいが、映像はゲームのようなトゥーンの世界、それでも歪な感じはなくて、ある意味こっちの方が見てくれはいいんじゃないかと思うほどだった。女もリアルではあるが、確実にゲームに出てきそうな雰囲気になっていた。

しかし感慨に耽れるのはそれまでであった。目の前に煙が現れ、それが晴れると、プルンプルンと動く緑色の奇妙なものがいた。

たぶん他のゲームならスライムと呼ばれるであろう緑色のモンスターだ。

そのリアルな質感はデフォルメしてあっても十分に嫌悪するに相応しかった。もしもデフォルメしていなかったらと考えると吐き気がするほどだ。

「これを斬ってください」

女はスライムを指差す。

渋々ながら俺は頷いて、その場で蠢いているスライムに剣で触れ

てみた。剣から伝わる感触はぞっとするものだったが、この程度のモンスターを斬れない程度では、到底生き残れないと自分に言い聞かせた。
俺は一歩下がってから深呼吸をしてから覚悟を決めた。
大きく左足を踏み込み、両手で持った剣を右肩の上から八割ほどの力で振り下ろす。
スライムは右上から左下に斬られ、真っ二つになり緑色のポリゴンとなって消滅した。
茹でた野菜の方が硬いんじゃないのかと思うほど手ごたえはなかった。全てのモンスターがこんなに柔らかい訳がないと思うが、少し拍子抜けした。
「練習は今の一回でよろしいですか？」
俺はこれ以上練習は必要ないと思い、軽く頷いく。
もうすこし試したい気もしたが、これから始まるのも練習なのだ。
「では、本番に行きますね。本番と言っても今回はＨＰがゼロになっても現実の死はありませんので、存分に戦ってください」
女はそういうとボンと煙を上げて消えた。
ＨＰがゼロになると死ぬという事については、あまり現実味がない話だったが、それでも今回は死なないと聞くと、心の底からほっとした。
「これから本番の練習があるわけだな」
俺はふっと笑みをこぼす。
皮製の長ズボンのポケットから軽快な音楽が流れてきて、ポルと呼ばれる端末が細かく振動している事に気付いた。
ポルをポケットから取り出すと「ＨＰを頭上に表示します」というメッセージが流れた。頭上を見ると青いカーソルと緑色のゲージ、それに４５０／４５０という文字が表示が出ている。
文字はどんな角度から見ても同じように見えて「これはすごいなー」と普通に驚いてしまった。結構ゲーム的な展開だなと思う。
下に向き直り、ポルの画面を見ると残り６０と表示された数字が

５９、５８と減り始めた、モンスターが出てくるまでの時間だろう。
じっと数字が減り続けているのを見ていたら、
「モンスターの討伐数によって、有益な情報やアイテム、スキルなどが手に入ります。ＨＰがゼロになる前にたくさんのモンスターを倒してください」
というメッセージが残り三十秒になったところで流れた。
「ボーナスがあるのか、こりゃがんばらなくちゃな」
俺は独り言を呟いてカウントダウンが残り十秒になったところでポルをポケットにしまった。左手で持っていた長剣をしっかりと両手で持ち、下段に構えてモンスターが出現するのを待つ。
ボンという爆発音とともに数十メートル先で白い煙が上がった。
煙が晴れると、そこには十体ものモンスターが現れていた。
「うはぁ・・・」
現れた瞬間にいきなりものすごい勢いで走ってくるモンスターに唖然としてしまう。
ビックリというよりコワイの方があっているだろう。
俺は恐怖心を抑え、より一層強く剣を握りしめた。動けるスライム程度の強さなら何匹いようと相手にできると思ったが、今こちらに向かってくる敵は、イノシシのような敵と二足歩行のゴブリンと呼ばれるようなモンスターがいた。
かなりの距離があった間が、二十メートルぐらいになったところで、モンスターの頭上にあった、真っ赤なカーソルの下にモンスターネームと思われる『コデベ』と『ゴブリン』という表示が出てきた。
俺はそれをモンスターの名前だと予想した。
すでにモンスターとの距離は十メートルを切っている。
今にもふるえそうな足に力を込めて、戦闘体勢をとる。
最初のコデベは人間のダッシュ位の速さで勢いに任せに突っ込んできた。俺は単調な突進攻撃を右に躱し、両手で剣を持って突きを繰り出した。

本気で繰り出した突きはコデベの横腹あたりに深く刺さり、引き抜くと同時に緑色のポリゴンとなって消滅した。
雑魚中の雑魚のはずだがやはりスライムよりも感触的には数段硬かった。それでも一撃でそいつを倒せた俺は十分な自信を得た。
「よし。戦える」
言いながら次の攻撃に備え、俺は剣を構え直す。

小学生になったころから家にある道場で父親から剣道を習った。剣道と言っても正直なんでもありの打ち合いだけなのだが、父親の強さは半端ではなくて結局は一度も勝てなかった。
稽古が厳しかったが、それでも剣術を習うのは楽しかったから止めようとは一度も思わなかった。部活には入ろうとは思わず、ひたすら修練を積んだ。
その努力が十分に役立った。
最初には十体もいたモンスターが残り二匹となっている。
コドラは動きが単調で、ゴブリンは動きが鈍く比較的戦いやすい敵だった。ダメージはほとんど受けることはなく未だに半分以上残っている。
疲れも出てきたが、残り二匹ぐらいなら軽く倒せるだろう。
残り二匹となったゴブリンは叫び声をあげながら同時に左右から襲いかかってきた。俺は焦ることなく右から襲ってきたゴブリンに向かって突進した。
ゴブリンが振り上げた右腕を俺は、両手で持った剣を振り上げ、肩口から切断する。
ゴブリンはうめき声をあげ後退するが、俺は容赦することなく剣を一閃する。ゴブリンの上半身がずれ、傾きかけたところでポリゴンとなって消滅した。
俺は勝ち誇ることなく真後ろを見る。仲間がやられたのがショックだったのかもう一匹のゴブリンは途中で走ることをやめていた。
俺と残されたゴブリンの視線が一瞬だけ合った。それが合図だっ

たかのように俺は駆け出した。
二十メートルぐらいあった距離が一気につまる。
緩慢な動きのゴブリンの引っ掻き攻撃を難なく避け、背後に回る。背中を向けたゴブリンは慌ててこちらに振り向こうとするが、俺はそれを待つことなく、右手で持った剣をゴブリンの背中に突き刺した。
最後のゴブリンがポリゴンとなって四散する。
俺は荒れた呼吸を整える。剣をだらりと右手に持ち、大きく息を吸い込む。
ほとんどのモンスターは一撃で倒せたがそれでも疲れるもんは疲れた。今すぐにでも腰を下ろして休憩したかったが、まだ敵が出てくる心配があるので経ったまま休憩することにする。
その判断は正しかったようで、三十秒もしないうちに次のモンスターは現れた。

先ほどと同じような爆発音と白い煙と共に出てきたのは、身長が軽く三メートルはある巨体の熊だった。ボリュームで言うと相撲取り三人分ぐらいはある大きさだ。
モンスターの頭上には真っ赤なカーソルとグリズリーという文字。熊のくせに二本の脚で器用に立っていた。口からは涎がだらだらとたれ、鼻息の音が二十メートルは離れたここまで聞こえる。
グリズリーはいきなり前足を地面に着いて突進攻撃を仕掛けてきた。不意を突かれたのとあまりにそのスピードが速かったので俺は、回避動作をするのも忘れてその場に固まってしまった。グリズリーの瞳からほとばしる殺気としか言いようのない、異様な圧力は一瞬で俺の体を包み込んだ。
それまでのモンスターは、見た目こそ不気味だったが、生理的な、生きるために必要な恐怖は抱かなかった。
しかし、今目の前に迫ってきているモンスターはの迫力は、十分

にそれを引き出した。
　両者の距離が残りが五メートルを切ったところで、俺は一歩後ずさる。自分の意思で起こした行動ではなかった。疲労が溜まっていたことと、恐怖で膝が震えていたことで、思わず転んでしまった。
　転びながら本気でやばいと思ったが、幸運にも転んだことによってグリズリーの突進攻撃の直撃を免れたようだった。
　俺は両頬を思いっきり叩き、剣を握りなおして立ち上がる。
　グリズリーは自分の突進の勢いを止めるのに時間がかかったようで、十メートル以上離れたところで止まってこちらに向き直った。その野性的な眼光を見た時にまたすくみ上りそうになったが、しっかりと気を保って剣を下段に構える。
　グリズリーは「ウォオオオオ」という雄たけびをあげなら猛スピードで突進を仕掛けてきた。その迫力はすさまじいものだったが、俺は敢えて前方に体重を傾けた。
　グリズリーの突進をギリギリのタイミングで右にジャンプでして躱すことが出来た。突進して隙が出来た無防備な背中を攻撃しようとしたが、グリズリーは急ストップして俺の突きをそのゴッツイ腕で弾き飛ばした。あまりの衝撃に俺の左腕はビリビリと痺れ、剣を振り落としそうになったがなんとかそれは耐え凌いだ。
　・・・なんであの勢いから急ストップできるんだよ。
　一回目の突進の時は急ストップ出来なかったのに、二回目の突進の時は驚くべき反応スピードで俺の剣を防いだ。俺は一定の距離を保ちながらぐるぐるとグリズリーの周りを歩いく。グリズリーは俺の体を正面に捉えつつ隙があらば、いつでも攻撃できるという視線をこちらに送っていた。
　こいつは今までのモンスターと比べ物にならないくらい強い。第一印象からそう思ったが、想像をはるかに超える強さだった。
　巨体に似つかわしくない、俊敏な動きにあのパワー、おまけに知能まであると見える。二度目の突進の時は、俺が意図的に躱したのを見て、すぐに防御動作に映った。

俺は一種の感動を覚えていた。
最初はモンスターの巨体と迫力に飲まれてしまった。それは今思えばどうしようもないことだと思った。
――というより割り切った。
しかし、しっかりと動きを見てみれば、乱暴に力を振り回すだけの木偶の坊ではなかった。
モンスターとは単純な動作とほんのちょっぴりの思考ぐらいしか持ち合わせていないと考えていたが、モンスターは俺の動きに合わせて、自分の考えで行動している。これが練習の相手というのならば、この先もっともっと強いモンスターたちが出てくる。そう考えるとゾクゾクと体が震えた。
恐怖からの震えではなく、純粋な武者震い。
根っからの負けず嫌いだった俺は、親父に一日に一回は決闘を申し込んでいたし、たまに道場に来る親父の知り合いなんかにも勝てるようになるまでその人が来るたびに試合を申し込んだ。
こっちが勝者となっても、向こうから来る挑戦は受けたし、負けないように努力もした。
親父という絶対強者は破れなかったが、それ以外の人には一度は勝利を収めたし、親父にもいつかは勝つつもりでいる。
この世界でも強者と戦うのは最も望むべきイベントに思えた。
俺は歩みを止めグリズリー真正面に立ち、突進攻撃に備えた。しかしグリズリーは突進を仕掛けずただただグルルルと唸り声をあげているだけだった。
その態度が次はそちらから来いとグリズリーが言っているように聞こえた。俺は、ニヤッと笑みを浮かべてからグリズリーに突っ込んだ。
グリズリーは後ろ脚だけで立ち上がって、前足を大きく広げて雄たけびを上げた。ビリビリと皮膚に感じる圧力を受けながらも、俺は正面から突進を仕掛ける。
グリズリーは前足を使って攻撃してきたが、俺はそれを反射的に

躱し、隙を見つけては長剣で斬りかかった。
グリズリーの動きは恐ろしく早く、避けきれない攻撃もあって徐々にＨＰは擦り減っていった。
ＨＰのゲージが半分以下になると黄色のゲージとなり、俺をより一層焦らせた。
俺はグリズリーの背後や懐に入ろうとしたが、グリズリーはそれを許さず、後ろにジャンプして後退したりして、正面にしか俺を立たせないようにした。
「そんな動き熊にはできねーよ」と思わず突っ込んでしまったが、それぐらいグリズリーの動きには感嘆すべきだった。

何分もの死闘が続き、精神力の限界も近づいてきた。
グリズリーの体にも数本の切り傷や大きな刺し傷が出来ていた。しかし俺のＨＰも残り百を切り、ゲージが赤く点滅していた。
グリズリーは未だに俊敏な動きで全く、倒れる気配がない。本当に倒せるのかと思うほどにタフだったが、負けを認めるのは癪なので、俺は全力でグリズリーと戦い続けた。
息は荒れ、剣を握る握力もだんだんと衰えてきた気がする。グリズリーの動きはだんだんと読めてきて、避ける分にはいいが、反撃するには体力が少なすぎた。
俺の集中力が一瞬途切れたところをグリズリーは見逃さず、大きな爪で左肩を大きく抉った。現実世界のような大げさな痛みはなかったが、確かな痛みと不快な痺れが左腕を襲った。
「・・・っく・・・・」
俺は数歩後退して右腕に剣を持ち直し、目を細めた。
ＨＰは残り十三という残り一撃でも受けたら、ゼロになってしまう頼りない数字だ。それでも俺はあの一撃で死なずに済んでよかったと心底思った。
グリズリーは勝利を確信したのか、大きな雄たけびをあげながら、

地面を前足でだんだんとついている。
そんな勝ち誇った様子が、昔道場で戦った、二、三歳の離れた、チャラい男に似ていて少しムカッとなった。
親父が見ていたら「なんだそのザマは」といいそうだなーと考えると自然と笑みがこぼれる。俺は最後の力を振り絞り右手一本で持った剣を上段に構えた。左手はだらりと下げたままでもジンジンと痛みが出てきている。
痛みだけではなく、ＨＰも数秒に一づつ減っていった。
だが、ここに来て俺は逆に冷静だった。
俺は目の前のグリズリーとの勝負の事だけに思考を持って行き、ふーと息を吐きながら気持ちを整えてる。未だかつてない集中力を発揮している事が自分でも分かった。
グリズリーはこれで止めだと言わんばかりの猛烈な突進を仕掛けてきていたが、俺にはその突進がこれまでの数分の一の速度に見え、軽々と躱せた。
グリズリーはそんな俺の行動に合わせ、急停止と右手のパンチを繰り出してきたが、俺はそのパンチを剣で受け流しその勢いのままグリズリーの脳天めがけて、右手一本の回し斬りを叩きこんだ。その一撃はグリズリーの頭を切り裂き、俺は勢い余って尻餅をついてしまった。
グリズリーは真っ赤なポリゴンとなって消滅し、切り裂かれて、宙に浮いていた頭にある深いブルーの瞳は、勝者を讃えるような光を含んでいるような気がした。

練習の終了を知らせるアラームがポケットから聞こえた。
今ならどんな硬い床の上でも寝れると確信出来るほどの疲労を感じながら、ポケットからポルを取り出した。ポルの画面には倒したモンスターの数や経験値、アイテムなどと一緒に、プレゼントボックスと名前の付いた、一つの可愛い箱が表示されていた。続いてレ

ベルアップを知らせるアラームが鳴り、スキルポイント振り分けという画面になった。
画面には何十種類ものスキルが映し出されていた。
一個一個丁寧に説明を見ていく。
戦闘用のスキルから、補助系のスキル、さらには趣味にしか使わないようなスキルまであった。
俺はその中から「両手長剣熟練度」「索敵」「体術」「隠蔽」「暗視」を選んだ。
ポルの説明によると、最初はスキルが五つしか選べない。レベルが十上がるたびに枠が一つ増える。スキルはスキルポイントが溜まることによって、よりその効果を発揮できる。スキルポイントを上げる方法は二つある。
一つ目は、レベルが上がったときに得られる、五つのスキルポイントを振り分ける方法。
二つ目は、そのスキルに関する行動を何度も繰り返して、徐々に上げていく方法。
武器熟練度は二百、その他のスキルは百がＭＡＸに設定してある。後者の方法でどのくらいのスピードで増えていくか分からないが、相当な時間がかかると予想できた。
どうやら初期数値があるようで、振れるスキルポイントは三十あった。両手長剣熟練度に十、その他に五振った。
武器の総合熟練度は初期数値の六十にスキルポイント×〇、二を足した計算。
武器熟練度スキルが百二十だった場合、六十にスキルポイント×〇、二の八十四となる。この数値は武器の八十四％の攻撃力しか引き出していない事を示している。
練習の時は武器総合熟練度を百の状態、つまりスキルがＭＡＸの状態でやっていたとの事だ。
今両手長剣熟練度にスキルポイントを十振ったから、総合熟練度六十二。練習の時の六割しか攻撃力がない。このスキルは初めのう

ちに上げといたほうがいいと思った。
　そのほかにもいろいろと今後に必要な情報を得ようとしたところで体を青い光と慣れつつある浮遊感が襲った。

初めての戦闘（後書き）

二話目です！！

更新は一週間に二回ぐらいを目指します！！

フイク

今俺は、この街、グランゼルにある宿屋の一部屋にいた。
窓の外には星空が輝いている。時間は夜の十一時過ぎ。
この世界は現実の世界と比例しているらしい。あちらの世界よりこっちの世界の方が時間が進む速さが速い、ただそれだけは伝えられた。
こっちの世界の方が、アナザーワールドの方が、時間が進むスピードが速いからと言ってのんびりもしていられないが、今はベットに転がりのんびりとしている。
理由はこの街から出られないからだ。管理者権限を使われ、セーフティーゾーンより外へは出れないようになっている。まぁ、出れたとしても数時間前の戦闘で疲れて外に出る気もなかったが。
俺は無意識のうちに実践戦闘練習後の光景を思い出していた。

地に足がついたと思ったら、体を覆っていた光が消えた。現在地は最初にいた広場、周りには青い顔をしたプレイヤー達の顔があった。
さっきの練習でひどい目にあったのだろうと容易に想像がつく。
俺は真上を見上げる。そんなに時間は経ってないはずだともっていたが、空は茜色の夕焼けになっていた。本当に現実の世界のような空と一緒だと思ったが、こっちの世界の方が空が澄んでいて、綺麗な夕焼けだった。
空に浮かんでいた、ピエロぐるりと首を回して広場を見渡した。俺のところで視線が止まったような気がしたが、特に考えないことにした。
「お帰り諸君、練習はどうだった？
実に楽しかっただろう」

俺は少しは楽しかったかもしれないと思ったが、周りではそんな雰囲気は全くしなかった。動けないのは前回と同じだったが、この広場には暴動前の殺伐とした雰囲気のようなものが漂っていた。
「まぁ感想はどうでもいいとして、今日はここから出れないようにしておくよ。興奮したまま全員が死んでもらっても困るからね。
詳しいことはポルに転送しておくから、それじゃあぜひこのゲームをクリアしてくれたまえ。
がんばってねー」
そう言ってピエロは消えた。
同時に体の金縛りも解ける。
ほとんどのプレイヤーは暴徒と化した。当然と言えば当然だ、逆にうるさいなーと思っている俺は特殊なのだろう。
俺はこの場を離れるために人の間を縫ってとにかく真っ直ぐに進んだ。
案外、すぐに人のいない場所まで来ることが出来た。俺はすぐそこにあったベンチに座って、ポルを取り出す。
長剣は広場に来た時には消えていた。
とにかく情報がないことには何もできないと思って、ポルの情報観覧というところをタッチした。長々とした文が表示される。
俺はそれをスクロールしながら見ていく、読んでいくではなくて、見ていく。理由は分からないが文を見るだけで情報が頭に入ってくる。
奇妙な感覚だなと思いつつも作業を続けた。

数分で全ての情報を見て、得た、俺は立ち上がった。
まず向かうのは武器屋。
ポルの機能のマップを見ながら、大通りを進んでいく。どうやらマップまでは見ただけで場所を覚えたりしないようだ。
数分歩くと、それと思しき店にたどり着いた。

中に入ると、外から見たよりも広い店の壁一面にいろいろな武器が並べられていた。
俺は剣の展示コーナーに向かう。途中で店員とすれ違って挨拶してみたら、笑顔で挨拶を返された。
ポルで得た情報だが、このゲームのＮＰＣは人に随分と近いらしい。行動は一定で、頭上にあるカーソルが灰色な事以外はほとんど変わらないとの事だ。
感情に近いものがあり、嫌われると話を聞いてくれなくなったりするらしい。極端なものだと、ＮＰＣがいる店を使えなくなったりするとか。
身震いしながら店をの中を進む。
気になったものがあれば俺はそれを振ってみた。
スキルに登録していない武器も使える。しかし、熟練度が四十％という低さで実用性ほとんどない。しかもスキルを入れ替えるとなると、入れ替えられたスキルのスキルポイントはゼロまで戻るとあって、簡単には入れ替えも出来ない。
そんなにスキルポイントをためていない今ならまだ間に合うと言う事で、いろいろと試してみようと思ったのだ。

両手剣は、別に両手で持たなくても使える。逆に片手剣でも両手で使える。
片手剣には盾を装備できるというメリットがあって、両手剣にもリーチが長く、威力が高いというメリットがある。
慣れているということもあり、両手剣を選んだが、片手剣も捨てがたい魅力があった。結局、盾は使い難そうだということでやめたが。
両手剣の中にもいろいろと種類があり、特に目を引いたのが、太刀だった。
練習では真っ直ぐで両方に刃のついた長剣を使ったが、慣れているという点では、太刀の方が上だろう。剣道は日本の剣術だから、

といっても真剣は使ったことはないのだが。
なぜ俺はあの時長剣を選んだかというと、それっぽいからという理由だ。
実際使ってみて使いやすかったが、それは狙ってやったことではない。ただ単にファンタジーの世界なら刀より剣の方が合っていると思ったのだ。
どっちも魅力的ではあるが長剣は、俺に合うようなので長剣を買うことにした。
たくさんある中から、どれにするか選ぶ。幸いお金は練習の時の報酬で結構あった。
俺は一番強そうな剣を手に取ってみた。練習の時に使った剣よりも随分と軽い。スキルだけじゃなくて剣も随分いいものを使わされたのかもしれない。
俺は数ある中から、一番重い長剣を探す事にした。

ポルに表示されている時間を見ると随分と時間が経っているようだった。このペースで防具屋と道具屋に寄ると宿屋に行くのは深夜になるかもしれない。
俺は急いで剣を選ぶことにした。
悩んでいるのは三振りの長剣。
重さはどれも一緒ぐらいだが、細く長いもの、太く短いもの、中間ぐらいのもの、値段もどれもほとんど一緒で、後はどれが一番振りやすいかだ。
太いものが短いと言っても、標準と一緒ぐらい――標準はどれくらいか分からないが、ここにある中で平均的なもの――なのだが、どちらかというと長いほうが振りやすい気がした。
ただ、長すぎるのもどうかと思って、太い一本を除いた二本で決めることにした。両方買ってもたぶんお金には余裕があると思うが、装備を持てる容量は決まっている。
持てるというのは、ストレージに入る量であって、実際に手に持

って運べる重さの事ではない。
装備や道具はポルの中にデータとして、保存することが出来る。
使うときには、実体化すればいい。
とても簡単で、とても便利な機能だと思った。他にもいろいろと便利な機能があったが、どれも試したことはない。

どちらの剣にするか全く決まらず、さらに十分が経っている。
「こんにちは」
俺が「うーん、うーん」と唸っていると、背後から声をかけられた。
突然の事にビクッと過剰に反応してしまって、後ろに振り向くのに少し時間がかかったてしまった。
目の前には、全身を茶色の帽子着きのポンチョで覆った、女性が立っていた。帽子はかぶっていないがもしもかぶっていたらもっと警戒しただろう。
年齢は二十代だろうか、とても美人だった。表情がどうにも読みにくい、もともと読心術なんかの心得はないが・・・。
女性はじっとこちらを見ている。
こっちの世界に来て、初めてまともに人と会った気がする。しかし、今俺の心にあるのはポジティブなイメージよりもネガティブなイメージ。
「何か御用ですか？」
俺は出来るだけ感じのいい愛想笑いを浮かべながら訊ねた。
「うん、お名前はなんというの？」
質問は簡単なものだった、しかし、俺はその質問に答えることが出来なかった。
カルラというのが俺の今の名前だ。
でも本当は、前は、違う名前だった気がする・・・。
「無理に思い出さなくてもいいわ、私も分からないから。今の名前は？」

「・・・カルラ」
俺は思い出せない、というよりすっぽりと忘れてしまった名前と違う名前をとても小さな声で言った。
男が無反応なのを見て、もしかしたら聞こえなかったかもしれないと思って、もう一度名前を言うために口を開きかけたが、俺が口を開く前に女が口を開いた。
「渡の名前はレイスよ。
ここで会ったのは何かの縁ね、ちなみに敬語はいらない」
「分かった。よろしくレイス」
俺は女の申し出を遠慮することなく受け、右手を出した。
警戒を解いたわけではない。しかし、不思議なことにこの女の事は信用していいかもしれないと思っていた。
俺は人見知りじゃないが、その逆でもない。ただなんとなくいきなり出会ったこの女性には好感を持てた。
表情は基本的に無くて、なにかしらの雰囲気を出している。しかもその雰囲気というのがまた異質であった。どんな風に異質なのかを説明するのは難しいが、敢えて言えば忍者のような感じ・・・。目の前にいるのに気配が全く感じられないあたりが。
「その二振りの剣で迷っているの？」
俺は頷く。
「振ってみて」
言われた通り、片方ずつ何度か振ってみた。
「ふーん、慣れてるね、どこかで鍛錬をしていたのかな？
ううん・・・勘繰りは止めておくよ、君にはその長い剣が合ってる」
言うなり女性は微笑んで「またどこかで会おう」と去って行った。
「なんだったんだ・・・・」
俺はモヤモヤとしたものを感じたが、長い剣を購入することにした。

防具屋と道具屋で必要なものを買ってから、宿屋に着いたのは十時半だった。
軽く四時間の買い物だった。
こんなに長い買い物をしたのは初めてだなと思う。
今日は特別だが、ＮＰＣショップは夜の八時までしか営業してないようだ。
九時あたりからプレイヤーもちらほらと見えるようになっていた。話しかけられたのは、武器屋での一人だけだったが・・・・。
そのあとはいろんなことを考えて、十二時には眠りに落ちた。

肩の傷は広場に転送されたときに消えたが、ものすごい疲労感は残っていた。
しかし目を覚ますと昨日の疲労感は嘘のようにすべて消えていた。
いくら毎日厳しい修行を積んでいた俺でも、あれだけ激しい運動をすれば、筋肉痛まで行かなくても脹脛（ふくらはぎ）が張っていたりすると思っていたのに全くの快調だった。
うれしいことではあるが、妙な違和感はある。
それにしてもお腹が減った。昨日から何も食べていない。
ポルの情報で生理的な欲求はアナザーワールドでもあるというのは知っていたが、実際に体感するとこれまた不思議な感じだった。
食欲の感覚が変なのではない、この世界の肉体は本物ではないのに食欲があるという点が変なのだ。
この際、そういう疑問をすべて放っておくとして、次の問題は、何か食べたところでこの欲求は収まるのかという問題だった。
ものは試しだと思って、宿屋にある十ベルのパン――宿屋のおばちゃんが売っている――を買って食べてみた。通貨はベルという現実世界の十円よりは一ベルの方が少し価値が高めだなと思う。
十ベルのパンは結構な大きさで、味こそ普通だったがお腹は十分

に満たされた。のども乾いたので、八ベルで牛乳を買って飲んでみた。喉は潤い、現実と何も変わらない。
しかし、排出に関してだけ別のようで、やりたければやってもいい。なんとなげやりな設定。もちろんやらなくてもいいというのだからやらない。
太ったり、痩せたりということもないらしい。実に興味深い。
時計を見るとまだ六時半、いつも早朝から素振りをしていたので、今日も目が覚めた。素振りの後で朝食を摂ってたから今日は少し早目の朝食だった。

部屋に戻って、寝間着から防具屋で買った装備品を身に着ける。
寝間着は部屋に置いてあるものを着かったが、洋服屋で自分の者も買えるらしい。
下着や普段着も買えるらしいが、そんなものまで買うほど所持金に余裕はない。もともと変えなくても汚れないらしいし、そこは気持ちの問題だろう。
防具に金属類はほとんどない。分厚い布の装備だ。
自分の剣は、パワーよりスピードと親父に言われたことがある。だからスピードには自信があった。避けきれない攻撃なんかもあると思うが、無駄に装備を付けて動きが鈍くなるよりはマシ。
防御力も布の中では一番高いものを選んだ。布と言っても現実世界では考えられないくらい丈夫だという、素材が違うとかなんとか。
丈夫な割に軽い素材で動きやすい装備である。
色は真っ黒だ。そういう趣味というより、派手な色の装備を着けた自分を見ると、とても滑稽で恥ずかしいという感じだった。
服の上下とグローブ、後はスニーカーのような靴。この靴はつま先と足の裏に鉄が入っているらしい。防具の中では唯一の金属である。
剣は鞘を腰に着けるタイプじゃなくて背中に着けるタイプにした。

これは腰に着ける方がよかったのだが、腰に着けるタイプだと、長剣が地面に擦れるという要因によって却下となった。身長は一七五と高校二年生の平均位だが、この長剣が長すぎた。
長剣を背中の鞘にしまって、ポルを取り出してこれからの旅に持っていく道具を確かめる。用心に越したことはないと思って、昨日回復ポーションを買いすぎたせいで、財布はほとんどカラだ。
後戻りはできない状況。モンスターに勝ち、生きる糧を得るか、モンスターに殺され、そのまま永遠に目覚めないか。
これからは実力の世界だ。そう思いながらポルをポケットにしまって、部屋を出た。
そこには眼鏡をかけた、ヒョロッとした少年が立っていた。たぶん同い年か一つか二つ下だろうと思う。
「こんにちは。僕も一緒に連れて行ってくれませんか？」
俺は少年をジロジロと観察する。
防具は簡単な皮装備で自分のよりいくつかグレードが下に見える。木の盾と短い片手剣を担いでいた。「使い物になるのか？」と思ったが、もちろん口にしない。
「構わないが、足手まといにならないでくれよ」
俺は少年に一瞥くれると、歩き出した。正直に言えば着いてきてほしくなかったが、まだフィールドに一度も出たことがないのだから、一人くらい連れがいてもいいだろうと思ったのだ。

宿屋を出て、グランゼルの南門に向っている。門は北にもあるがそこはまだ開いていないらしい。攻略の進行具合によって解放されるのだろう。
頭の中で、グランゼルの全体図を大まかに想像しながら考えていると、
「あ、あの僕の名前はフイクです」
後についてくる、少年はいきなり自己紹介をしてきた。

容姿と表情から、寡黙な性格だと思っていたからすこし驚いた。どうやら最初は緊張のあまりガチガチになっていたようだ。
「俺はカルラだ」
短く自己紹介を終わらせる。
少し早目のスピードで歩いているため、一六〇ぐらいの身長の小柄のフイクは小走りとなっている。
「カルラさんって高校生ですか？」
「ん？高校二年生だった」
俺はなんとなく過去形で答えてみる。
「そうですか、僕より一つ上ですね」
少し前の方を後ろ向きで歩きながら頷いている。
「ふーん、にしても何で俺についてきたんだ？」
俺は当然の疑問を今更ながら口にする。初めての旅の前の支度に時間がかかったが、部屋を出たのは七時過ぎぐらいだ。
それに宿屋から出てくる人を狙うんじゃなくて、ピンポイントで俺の部屋の前に立っていた。なにか用があるのだろうか？
「あなたが強そうだったからです」
帰ってきた答えは全く予想していないものだった。
「はぁ？俺は強くないし、仮に強かったとしてもなんで強いってわかるんだよ？」
「強いとは言っていません。強そうと言ったのです。あなたは昨日の混乱の中で、素早く行動を起こした人物の一人でした。それに、あなたは随分と楽しそうに見えたので・・・」
それが理由になるか分からないが、確かに混乱していた輩より落ち着いていた奴らの方が、まだ信用できたのだろう。
それにしてもと思う。
「お前も随分と落ち着いていたんだな。自分だけじゃなくて、周りまで気にできるなんて」
「騒いでも仕方なかったですしね。それにこれから先に自分一人では何もできないと思いましたから」

つまりこいつはあの時の模擬戦闘で、というか実戦で自分の力を見極めて、さらにどうすべきか考えたのだ。頭はいいんだなと思う、顔からしてそうだったが。
「お前モンスターは何匹倒せた？」
「残念ながらギリギリ三匹倒せただけです。もう腰が抜けてしまって・・・」
武術の心得がない人にとってはこれが普通なのだろうか？
「ってことはさ、これ見てない？」
俺は立ち止まってポケットからポルを取り出し、情報観覧ページに進む。
「いえ・・・そんなにいろいろ書いてなかったと思います。見せてもらってもいいですか？」
目を丸くして覗き込んでいるフイクに俺は苦笑してポルを渡した。
フイクは「フムフム」「なるほど」などと呟きながらポルを操作していた。数分で文章を読み終わり、なにやら納得したような表情で何度も頷いていた。
「どうだった？」
「あ、すいません！！ちょっと興味深かったものですから」
俺の存在を忘れてたのか派手に頭を下げて謝るフイク。
「どこらへんが？」
俺はポルを受け取りながら訊ねてみた。
「えーっと、そうですね。僕向こうでは、結構この手のゲームをやっていたんですよ。仮想型ゲームとでもいうんですかね？
そのゲームではここまでのクオリティはなかったというか、まったく次元が違います。でもこっちの世界にもゲームと同じようなシステムがいろいろと使われているようですね」
そういうゲームをやったことも、そういう知識もない俺は首を傾げることしかできなかった。
「つまり、この世界は現代の技術ではほとんど不可能なレベルなんですよ！！

なんらかの技術の確変があったとしても、ここまで一気にクオリティを上げることは出来ないと思います」
「・・・・・」
でも、実際出来てるしなーと内心で思った。それにこんな事を話しても、分からないものは分からないし、何も得られないと思う。
「なぁ、フイク。お前目が悪いのか？」
「あ、これは慣れですかね。
こっちの世界だと眼鏡なくても見えるんですけど、向こうで着けてたんで、ないと落ち着かないというか・・・・。
こっちに来た時から持ってて、一応タダなので着けててもいいかなーっと・・・」
質問をそのままの意味で受け取ったフイクはそう答えた。
「それは興味深いな。こっちの世界に来ると、潜在能力だけじゃなくて近視みたいな病気も治るのか」
普通に目が見えると思ったのは、自分の目も少し良くなってる気がしたからだ。もとから悪かったわけではないが、それでも今まで以上によく見えていた。
聞きたかったのはこの世界に来ると全員が同じステータスになるのかということだった。病気とかという点において。
「もしも普通に見えるんだったら、着けない方がいいぞ」
「なんでですか？」
「邪魔だから」
俺は簡潔に答えたが、その言葉の意味することを読み取ったのか、フイクは眼鏡を外してポルを使ってアイテム欄にしまった。
この世界では一瞬の隙が死につながる。眼鏡が邪魔で戦えなかったなんてことは許されないのだ。

その後も喋りながら、南門を目指した。
眼鏡を外したフイクは、爽やかな好青年という感じで、頻繁に見

せる笑顔はとてもまぶしいものだった。別に男性に気があるという訳じゃないぞ。

「見えましたね」

小道から大通りに出たところで右手に大きな門が見えた。グランゼルを囲む塀の高さが約三メートルぐらいで、その門はその倍はあった。

両脇には衛兵らしき人物が立っている。この衛兵は、ただ立っているだけじゃなく、犯罪行為を犯したプレイヤーを街に入れないようにしているのだ。ただ、ステータスは最強に設定してあるわけではなく、不死設定だが、ある程度の実力のあるプレイヤーには負けるということらしい。

よって犯罪プレイヤーは一応街に入れるのだが、犯罪行為をした時点でそのプレイヤーの頭上のカーソルは赤色となり、ＮＰＣショップは全て使用できなくなる。犯罪者がつかまった場合、グランゼルの牢屋に入れられる。

一応刑期なんかもあるらしいが、詳しいことはあまり分からない。犯罪者を捕まえて牢屋まで送ると報酬金がもらえる制度もある。懸賞金という奴だ。

と、まぁそんな事を考えている内に門の下まで来ていた。

今のところいないが、数時間もすればたくさんのプレイヤーが溢れるだろう。

「パーティー組んでくれませんか？」

俺は「ＯＫ」と答えて、ポルを操作しパーティーを組んだ。

パーティーは最大六人で、パーティーを組んだ人にはダメージを与えることが出来なくなり、経験値やアイテムが分配されるシステムだ。そのパーティーをさらに組み合わせた、レイドというシステムもあるが、それはボス戦以外で使われることは滅多にない。

俺はフィールドの一歩手前まで来て立ち止まった。

「三つだけ約束してほしい」
「はい」
俺の真剣な表情にフイクも真剣な表情になって答える。
「一つ、危ないと思ったら逃げろ」
フイクが頷いたのを見て一泊置いて進める。
「二つ、絶対に俺の指示に従え」
これにはフイクが目を丸くしたが、正直に頷いた。
「三つ、これから先、自分の事だけを考えろ」
最後のは極端すぎたと思ったが、フイクは「はい」と短く答えただけだった。
少し話して分かったが、こいつはお人好しすぎる。それは長所でもあり、短所でもある。これから先、自分の事しか考えない奴らはごまんと出てくるだろう。
ただ、それは正しい。命がけの世界で、他人の面倒を見られるほど、人間は強くない。いや、自分の事だけで精一杯なほど弱いと言った方がいいかもしれない。
自分の事もろくに守れない奴が、他人を守ろうなんて馬鹿馬鹿しすぎる。
「僕は自分の身だけを考えます」
フイクはそう言って眼前に広がる草原を見た。
整った顔にひょろひょろの体、優しい心に決意が溢れる瞳。王子様みたいだなとか思ったりしてしまった。
俺は頷いて最初の一歩を踏み出した。

フイク（後書き）

全然進まないｗｗ
ヒロインとかいつ出てくることになるやら・・・。

とにかく三話目です。
読んでくださってる方ありがとうございます

森の村へ

それにしても壮大な光景だ、天気は快晴で――悪天候の事はあまりなく、現実と同じ三六五日に四季があるらしい。ついでに今は春、四月中旬と言ったところだ――風が心地いい。

一面の草原にはモンスターの姿など全然見当たらなかい。

向かって右手には森、左手には山、正面には湖が見える。山の方はまだ進めない（不可侵領域だから）。湖は一応入れるらしいが、水中にもモンスターはいるらしいから危ないということで却下。

「森だな」

「はい」

頷きあって、俺とフイクの二人は歩き始めた。

現在地は第一の島（ウーノ）のほぼ中心辺り、少し北にあるグランゼルを境に北へはいけない状態になっている。不可侵領域であるからだ。境界線は見るからに越えるのが厳しそうな山。まぁグランゼル内の北門が開けばあっちに楽に行けるんだろうけど。

したがって今は南に進む必要があるのだが、マップの広さが異常だった。湖には水平線が見えている。もう海だな海。

森までも約一キロ以上はある。モンスターの姿は見当たらないが、まだまだ街から出たばっかりでそんなにうじゃうじゃいてもらっても困るが、少し拍子抜けした。

ただ、この広さの島を歩いて移動するには少し時間がかかるということで、今は走っている。

疲れは全くない、この世界では走るという行為はあまりスタミナを消費しないらしい。ただ、戦闘になると一瞬のダッシュや重い剣を振ったりするから、消費が激しい。集中力を保ちながら動くということが疲労の蓄積を加速させる。

と、そういうことで、今はかなりのスピードで走っている。ダッシュの八割まではスタミナの消費は抑えられるらしい、ステータスの関係でトップスピードはアスリート並だ。

ついでにステータスについて触れておこう。

この世界での強さを決めるのは、ＳＴＲ（筋力）、ＡＧＩ（俊敏力）、ＶＩＴ（生命力）、ＤＥＸ（器用さ）である。

ＳＴＲは筋力を増加させる。

ＡＧＩは素早さを増加させる。

ＶＩＴは体力（ＨＰ）と防御力を増加させる。

ＤＥＸは器用さ――おもに遠距離の攻撃に関係してくる。弓使いなどは必須――を増加させる。

といった感じだ。

この数値はＡＰと呼ばれるてレベルが上がった際に一〇〇自動的に振り分けられる。振り分けられる数値を決める点は三つ。

まず、体型。体のサイズが大きければＳＴＲとＶＩＴの増加量が大きい。体のサイズが小さければＡＧＩの増加量が大きいといった具合だ。

次に、戦い方。これは攻撃特化で戦う人なら、ＳＴＲが伸びたり、大きな武器や重装備で戦っていればＳＴＲとＶＩＴが上がり、スピーディーに戦う人ならＡＧＩが上がりやすいといった具合だ。

弓や遠距離攻撃を使う人はＤＥＸの上昇もあるらしい。他の職というか、武器が近距離の人は基本的にＤＥＸは増えない。

最後に、考え方だ。これは興味深く、戦い方にも影響してくるが、肉体と肉体でガチンコ勝負を望んでいる人ならＶＩＴが上がり、攻撃を受けるのが怖いと思っていたりすると、ＡＧＩが上がるらしい。

細かいことは分からないが、その人にあった数値に上がっていくということだ。

俺の数値は体型が少しやせ気味で、戦い方は防御と言うより、相手の攻撃を避けて隙が出来たところに大技を繰り出すような戦い方。思考、考え方については、自分ではよく分からない。まぁ、ガチン

コ勝負は嫌いじゃないと言っておこう。
数値はＳＴＲ、ＡＧＩ、ＶＩＴの順で、四対五対二位の振り分けだ。ちょっと体力、防御力に不安があるが、防具も回避優先で買ったので文句は言えない。ちなみにＤＥＸはほとんどない、初期値から三ぐらい増えただけ。
客観的に見るなら、スピード攻撃タイプかな？と思う。今はまだ二レベルだから、体型がほとんど決めている状態ではあるが。
初期値が一〇〇〇あったから、戦い方と考え方については、今のところ一割ほどの影響力だ。
フイクはと言うと、超バランス型、ひょろい体系の割にＶＩＴの数値も意外と多い、まだ一レベルだから体型がすべて決めている状態。まぁ体型については、だいたいらしいから深く考えないようにしよう。
ちなみにレベルが上がるとスタミナもあがるらしい。計算式の情報はなかったが。
「カルラさん二レベルって事は、やっぱりすごく強いんですね。モンスターたくさん倒したから、経験値がたくさん入ったはずですから」
「強いかどうかは置いといて、練習の奴らは一応全部倒したよ」
目を丸くしているフイクに俺は苦笑する。
既に草原を抜けて、森の少し入ったところに来ている。見通しが悪く、足場が悪いので、周りに警戒しながら歩いている。
目指しているのは、グランゼルの南西にある村、≪パレンド≫。森の中にあり、ここから一番近い。村にはクエストを受注できる酒場があるらしい。
グランゼルは大きさは全ての街の中で最大らしいが、その半分以上を宿屋で占めている。ここに囚われている人間、ポルによると総勢十万の人々が楽に入る事ができる容量（キャパシティ）がある。
そのほかにも、レストランや公共施設が多くあって、生活する分にはとても便利な街なのだが、武器屋や防具屋、道具屋以外の攻略

に関する施設がないのだ。
その三つの店は数店舗あるが、クエストを受注する酒場、ギルドを作るための教会などの施設がない。
ギルドはともかくクエストが受注できないのは厳しい。クエストは一般のＮＰＣからも受けられるが、グランゼルにはＮＰＣの数も少ない。というか、初期の街なのでほとんどクエストは発生しないとか。
クエストの重要性についてはフイクに教えてもらった。
俺はほとんどゲームというものをやったことがないが、フイクは結構やり込んでいたプレイヤーだったらしい。ここに来て冷静でいられたのもそのせいと言っている。
「まぁ、あれは操作するだけですしね。こっちだと自分の体で戦わないといけないし、どうしてもモンスターの迫力にビビっちゃうんですよね」
フイクはそう言って苦笑い。
「そんなことないって、お前の情報も役に立つよ」
「いえ、さっき見せてもらった資料に比べたら、全然ですよ」
俺も苦笑いする。
と、全く警戒心を失っていたところで、前方からモンスターの声が聞こえた。かなり遠い場所だがかなり興奮していることがわかる。よく耳を澄ますと、人間の悲鳴のようなものも聞こえた。
「行ってみよう」
フイクの事をお人好しとか言ってたけど、俺も十分お人好しだなと思った。

茂みから様子を覗う。
そこには三人の男たちが何匹ものモンスターに囲まれていた。
一人のＨＰバーはもう黄色になっている。アリのようなモンスターは徐々に男たちとの距離を詰めていた。

フイクの様子を見ると、今にも飛び出しそうだった。
モンスターの強さがわからない以上、飛び出すのも危険だ。数が数だし、倒せないことはないと思うがこいつ等のほかにもっと沸いてくる可能性もある。
なんたってアリのくせに鳴くんだから。
キリキリと歯ぎしりのような音を立てている。今になって思ったが、なんでこれをモンスターの声だと分かったんだろう、とそんなことを考えている内に男たちはアリの攻撃範囲に入ったようだ。
アリが男に飛びついてかみつき攻撃を繰り出す。スピードは言うほど速くないが、男の体は固まっていて、避けれるものも避けれない。
男はもろに攻撃を受ける。そいつのＨＰバーも黄色となり、自分のＨＰバーを涙目で見ていた。
「フイク、俺が突っ込むからお前はその隙に三人の所へ行け」
「で、でもそれじゃあカルラさんが・・・」
俺は鋭くフイクを睨む。
「俺の命令には従えって言っただろ」
「・・・・分かりました」
渋々といった感じで、フイクは頷く。目には不安の影が見られた。
「じゃあ行くぞ」
言うなり俺は駆け出した。すでに三人ともＨＰのゲージは三割を切り、赤色になっている。
アリたちはこちらに全く気付いていない。俺は一番手の前のアリに向かって背中から取り出した剣を振り抜いた。
剣はアリの硬い甲殻をぶち破り、そのまま地面に浅く刺さった。今更地面が土でよかったと思う、石の床とかだったら、余裕で手が痺れていただろう。
もっと考えて行動しろ！！心の中で自分で自分を叱咤する。
すぐに剣を抜いて、次の敵に向かう。すでに最初のアリはポリゴンとなって弾けていた。

二匹目のアリを倒し終わる頃には、全てのアリがこちらを向いている。数は残り六匹。防御力は硬いが、体力は少ないようだ。
攻撃力はダメージを受けていないので、分からない。男たちの消耗具合を見ると、言うほど高くないだろう。さっきもクリーンヒットを受けていたのにもかかわらず二割程度しか減っていなかったし。
俺は長剣を横薙ぎに払う。
こちらに寄っていた三匹のアリがふっとばされて、他のアリにぶつかる。たいしたダメージは受けていないようだが、相手の体制は崩れた。そこへいいタイミングでフイクが走ってくる。どうやらフイクにはだれも気付いていないらしい、男たちを含めて。
フイクはアリの真後ろから、思いっきり片手剣を振り下ろす。一発では仕留めきれなかったようだが、背中の甲殻は大きくへこんでいた。
この世界の攻撃力は、武器の攻撃力（熟練度などを計算した）、攻撃のスピード、攻撃の重さ、攻撃が当たったポイント、タイミングの掛け算で決まる。
武器の攻撃力はそのままなので特に触れない。
攻撃のスピードに関してはＳＴＲとＡＧＩが関係してくる。どちらかというと攻撃だけの、武器を振るだけの速さならＳＴＲの方が重要と言える。いくらＡＧＩの数値が大きくても武器を満足に振れないようでは元も子もない。
攻撃の重さは、武器の重さとプレイヤーの技量による。
ポイントは、モンスターによって攻撃の効きにくい場所と効きやすい場所があるとだけ言っておこう。
最後にタイミングだが、これは不意打ちや相手の体勢が悪い時に大きなダメージを与えられると言う事だ。
これらが、一瞬のうちで演算されモンスターにダメージとして与えられる。
さらに部位によって、ダメージが蓄積されると部位破壊という現象が発生する。これは、足を重点的に攻撃したりすると、足が切れ

たり、その足が使いものにならなくなったりするバッドステータスのようなものだ。
今でいうと、甲殻が砕けたり、凹んだりすることだ。部位破壊が起こると相手の動きが制限されたり、追加ダメージが与えられる。
と、ポル引用。

フイクの不意打ちは結構いい感じに決まったのだが、少し振りが遅かった。
やはり剣術初心者だ。「危なっかしー」とひやひやしたが、どうやら一人でも十分戦えるようだ。
飛びついてくるアリを盾を使って弾いている。衝撃でほんの少しずつＨＰバーが短くなっているようだが、気にするほどではない。
飛びかかってくるアリに突きや斬撃をお見舞いする。俺は自分の相手する分の敵を片づけたところで、フイクの援護に行く。
フイクは必死に攻撃を防御しながら、カウンターを決めている。額からは汗をダラダラと掻いていた。戦闘の激しい運動で掻いた汗だけではないだろう。
フイクは飛んでくるアリに向かって突きを繰り出した。
思わず「ほぅ」と呟いてしまった。その突きはきれいにアリの弱点である腹に刺さった。アリの鋭い牙はフイクの眼前数センチというところで止まっている。
アリがポリゴンとなって消えると、フイクはその場にへたり込んでしまった。
「よくやった」
フイクの頭をわしわしと撫でてやる。フイクは「疲れましたよー」とか「怖かったですよー」とか言いながら微笑んでいる。
大ダメージこそ受けなかったが、フイクのＨＰは七割を切っていた。相当安心しているんだろう。
俺はフイクに微笑み返してから、男の方たちに目を向けた。
男たちは、未だに少し震えている。本当にだらしない。

「大丈夫か？」
俺が声をかけると、我が返ったようにいきなり偉そうな態度をとる。
「ああ、俺の名前はレグロだ」
一番の大きな男が言った。身長は一八五はありそうな大男だ。
「助かった」
そういって他の二人は軽く頭を下げた、本当にほんの少し、もしかしたら首を振っただけかもしれない。
俺はフイクに手を貸して立ち上がらせながら男たちに訊ねた。
「こんな早くから、旅に出たにしてはちょっと頼りないな。おいしいクエストでも狙ってたか？」
クエストには回数制限のあるものや一日に一回しか出来ないクエストなんかがある。より速いプレイヤーが優先されるというありがちな設定・・・・らしい。
フイクも実はこれを狙っていたらしく、いち早く他の町や村に行くためにカルラに付いて来たそうだ。
ずる賢いとは思うが、別に嫌悪したりはしない。
「・・・あぁ、そういうことだ。しかし運の悪いことにモンスターに見つかってしまった。
それよりお前たちもクエストを狙っているんだろう？
ならばこれからは敵だ。今回は礼を言っておくが、次会ったときは容赦はしない」
そう言って、大男は腰から曲刀を出した。ただ攻撃の意思はないらしく、見せつけただけで、腰にしまった。
何の冗談を言っているんだこいつは？
俺の言ったことが皮肉に聞こえたのだろうか・・・。
「行くぞ！！」
リーダー格なのだろう、大男、レグロはそう言って二人の男を引っ張って行く。脇の男二人は、申し訳なさそうな目でこっちを見ていた。

「なんだあれ？」
「ほんとですね！！せっかく助けてあげたのに、モンスターがいなくなったら随分偉そうになってさー！！」
フイクはえらく憤慨しているようだった。
「まぁ、気にスンナって、別に見返りを求めて助けたわけじゃないだしさ」
「ほらこれ」
俺はフイクに回復ポーションを渡した。
「あ、ありがとうございます」
そう言ってポーションを飲むが、どうやら相当まずいようだ、顔が歪んでいる。
その顔に思わず笑ってしまう。
「笑わないでくださいよ、すっごい苦いんですから」
「わ、わるい・・・」
フイクのＨＰバーが徐々に伸びていく。
一気に回復するのではないらしい。
「それにしてもカルラさんは全然ダメージ受けてないですね」
「まぁ、思ったよりも敵が弱かったしな」
そう言って頭上を見る。ＨＰは５９２／６００とほとんど減っていない。
「それよりもポル見てみろ」
「え、はい」
戸惑いながらもフイクはポルをポケットから取り出す。
ポルの画面には今回の戦闘で得た経験値とアイテムが載っていた。
景気のいいファンファーレが鳴ってレベルアップを知らせる。
「わぁ、レベルアップしました」
嬉しそうにはしゃいでいる。
戦闘の途中ではなくて戦闘の後にレベルアップをするのは自分のレベルが上がったときに気付いた。この情報はポルに載っていない。
基本的なことでもポルに載っていないこともあるらしい。

「そういえばフイクはスキル何選んでいるんだ？」
自分がレベルアップしていないことは回復ポーションを取り出したときに気付いている。
「えーっと、片手剣熟練度と索敵と投擲と盾熟練度と空間把握です」
よほどレベルアップがうれしいのか満面の笑みで答えるフイク。
「えーっと空間把握って何？」
俺は全然知らないスキルに首をかしげる。
「え！！カルラさん空間把握、取ってないんですか！？
空間把握っていうのは、相手との間合いとか剣のリーチがなんとなく分かるっていう、武術の心得がない人にはとても便利なスキルですよ」
うーん間合いか・・・そう思いながらポルのスキル画面に進む。
しかしそこに空間把握というスキルはなかった。
「そんなのないんだけど・・・まぁ、剣の戦いは慣れてるから別にいらないかな。間合いが分かるっていうのは魅力的だけど」
「カルラさんは元からそういう能力があったから必要ないんじゃないんですかね！！」
うれしそうに答えるフイク。なにがそんなにうれしいのか・・・。
「それにしてもカルラさんソロ用のスキルばっかり上げてますね。わざとですか？」
「いや、少し知識が足りなくて、とにかく必要そうなのを取っただけだ」
俺は正直に答える。別にソロで活動しようと決めたわけではない、少人数の方がいいとは思っていたが・・・。
「そうですか。
それにしても人によって違うスキルがあるのは、新しい発見ですね。出現条件があるスキルもあるらしいですし・・・」
フイクは考え込むようなポーズを取った。
「とにかく、パレンドに急ごう、こんなところで油を売っていても仕方ないし」

俺はそう言って、歩き出した。「待ってくださいよー」というフイクの声を背中に受けながら。

前方に村が見えてきた。直線距離は二百メールほどだ。
あの後数回モンスターの群れと遭遇した。気付かれないように通り過ぎようとしたのだが、フイクは隠蔽スキルを取ってなかったから、二回に一度は戦う羽目になった。
ほとんどはカルラが相手をしたが、フイクもなかなかの活躍を見せた。徐々に慣れているようだ。
十近くあのアリ型のモンスター『ジャイヤントアント』と戦ったがあの後はどちらもレベルアップしなかった。「どれだけ厳しい設定なんですかー！！」とフイクがぼやいていたが、スルーしておいた。
その時内心では、このゲームをクリアするまでの計算をしていた。
このペースだと一日一レベルとしても百レベルまでには百日かかる。そしてラスボスは百日後ぐらいに出会えるだろうと。
だがその考ええお話すとフイクに呆れられたことは言うまでもない。
フイクの話だとクリアまでは数年かかるかもしれないとか・・・・。

酒場の村　パレンド

「やっと着いたー」
言うなりダラッと緊張感を抜くフイク。
俺も安心してほっと一息ついた。
『酒場の村　パレンド』と大きな文字で書いてある看板が最初に目に留まる。
村の規模は言うほど大きくないが、中心に大きな酒場があることはポルの地図で分かった。それ以外には目立った建物はない。強いて言うなら宿屋と道具屋ぐらい。他はＮＰＣの家のようだ。
ＮＰＣもこの世界で暮らしている設定になっていて、宿がないときには泊めてもらえることもあるとかないとか。
数分も歩けば、酒場の入り口が見えてきた。大きさは、野球ドームより一回り小さいくらい。
・・・・村の何割を占めてるんだ。
フイクも口をあんぐり開けて酒場を見ている。
「入ってみるか」
「・・・は、はい」
酒場のあまりの大きさに呑まれ、フイクはすでに緊張していたようだ。俺が歩き出すと、隣ではなく後ろにフイクはついてくる。

中に入ると細い通路が続いていた。
通路を抜けると広いフロアに出る。何百と机と椅子が置いてあるが、座っている人間はさっきの奴等とは違う三人組の男達と端っこでフードをかぶった一人しかいなかった。
外から見たよりも狭い感じがしたが厨房とかがあるんだろう、と納得しておく。
天井は無駄に高い、どうやら二階はないらしい。

通路を抜けたところにいるＮＰＣは「ご自由な席に」と言っていたが、混んでいたらしっかりと仕事を果たすのだろう。
「どうします？」
「クエストはどこで受けれるんだ？」
「他のゲームだと、マスターに聞くか掲示板みたいなのがあるんですよね」
辺りを見回すと、右と左にあるカウンターにそれぞれ二人の男性ＮＰＣ。壁には掲示板らしきものが隙間なく張り付けてある。
二人は顔を見合わせて苦笑する。
「プレイヤーに聞いてみますか」
俺は頷いて、近くにいたプレイヤーに寄っていく。三人組の男性プレイヤーたちだ。こんなに早くここまで来たのだから結構な手練れたちのはず。
「すいません、クエストってどこで受けれるんですか？」
フイクが訊ねる。強面の男たちに気軽に話しかけられるとはなかなか度胸がある。
「ああ、そこらへんにある掲示板に貼ってある、クエストカードをマスターの所に持っていけば受注できる」
顔と違って性格はいいらしい。気さくに答えてくれる。
「さんきゅー」
「ありがとうございます」
俺は片手をあげて、フイクは頭を下げて感謝の意を表した。
他に会話することもないので掲示板の方に向いたところで、
「さっきの奴ら相当きついクエスト受けてたが大丈夫か」
そんな話し声が聞こえた。
「さっきの奴らって、三人組で一人がめちゃくちゃガタイのいい奴らか？」
俺は少し気になって聞いてみることにした。
「そうだ」「受けたクエストは確かあっちの方にある討伐クエストだったと思うぞ」

男たちは気前よく教えてくれる。
「おっさんたちはクエスト受けないのか？」
「おっさんか」
男たちは苦笑する。
「今はまだ休憩中。もう少しすれば人が増えてくるだろうから、そのあとでパティーを組んで出るつもりだ」
なかなかの手練れだと思ったが、ここら辺のモンスターで精一杯らしい。
「効率よりも安全性か」
「まぁな、無理して命落とすなんてのはバカのやることだ、さっきの奴らも痛い目見て帰ってくるだけならいいがね」
「ですねー。安全第一ですよ」
フイクは「うんうん」と頷いている。何か思うところがあったのだろうか。
「じゃあ、俺らはもう行くよ」
「ああ、気をつけろ坊主」
そう言って男はフイクの頭を乱暴に撫でる。この人には息子でもいるのかなと思った。三人組の男達はフイクを相当気に入った様子だった。
「おい、フイク行くぞ？」
「あ、今いきます」
俺は掲示板に歩き出す。少し遅れてフイクも横についてくる。
「残りたいなら残ってもいいぞ」
「い、いえ僕はカルラさんについていきますよ」
俺のどこがいいんだか、思わず苦笑してしまう。
「にしてもさっきの奴ら、全然懲りてなかったみたいだな」
どこにそんな自信があるのやら。数匹の低レベルモンスターにビビりまくっていたのに討伐系のクエストを受けるとは・・・。
「ここら辺のどれかですね」
そう言ってフイクは掲示板に目を凝らす。そんなに近づかなくて

も見えるだろうに、目が見えていない時と同じ感覚でやっているのだろう。
「分からないですね」
うーん、別に助けてやる義理もないが、放っておくのもな・・・。
そう思っていると背後から声をかけられた。
「こんにちは」
「うわっ！！」
そんなに大きな声じゃなかったが、あまりにも近いところから声をかけられたからか、フイクはオーバーアクションで驚いている。
「えーっとたしかレイスさんだっけ？」
「あら、名前を憶えててくれたの？うれしいわー、それにまた会えるなんて運命感じちゃう」
そう言ってフードを外すと美人な顔と長い黒髪が露わになる。昨日よりもどこか上機嫌だ。服装は昨日と全く同じで飾りっ気のないポンチョ一枚である。
「声と雰囲気が似てたのでそうじゃないかと」
運命というワードは触れないことにする。いちいち冗談に付き合っていられない。
「私ってすぐに忘れられちゃうんだけどなー」
「クスッ」と笑うレイス。うれしそうだ。
だって昨日と同じ格好だしな・・・。
「カルラさんこの人と知り合いなんですか？」
なぜかフイクは訝しげな表情だ。
「あぁ、昨日少しな」
「よろしくフイク君」
右手を差し出すレイス。
「な、なんで僕の名前知ってるんですか！！？？」
フイクはまたオーバーアクションで驚く。
「だってあっちで名前呼ばれてたじゃない」
「・・・・なっ」

言葉に詰まったフイクは一歩後ずさる。
俺もどんな聴力してるんだよ、とツッコみたい気持ちを抑えた。
結構離れた場所だったし、そんなに大きな声を出したつもりはなかったのだが。
「私、耳はいいの」
そう言って俺の方にウィンクしてくる。
心を読まれたのか！？
一応ポーカーフェイスを装ってみたが、どこまで通じたかはわからない。
「ところでさっきの話だけど、これが例のクエストよ」
レイスはそう言ってポケットから一枚のカードを取り出す。
「誰にも取られないようにしておいたのー」
ニコニコと笑うレイスはとても楽しそうだ。
「なんのためにだよ」
「あなたたちのためよー」
そう言ってカードをひらひらと振る。
「おばさん寄越せ」
俺はカードを奪い取ろうとするが、寸前の所で躱された。なかなに素早い・・・、と思っていたらガツンと頭を殴られた。
「おねぇさんでしょ、ちゃんと礼儀ってものをわきまえなさい」
全然動きが見えなかったんですけど・・・。
「レイスさんそのカード下さい」
フイクが上目使いで頼む、小動物のような仕草だ。狙ってやっているとしたら相当腹黒い。まっ、それはないと思うが。
「・・・っう・・・そ、そんな目をされたってやらないわよ」
この女は大人げない。
「どうしたらくれるんだ？」
俺は頭を摩りながら言う。
一息置いてレイスは答える。
「私も連れて行って」

「分かった」
俺は即答する。
「あら、意外と素直ね」
「ああ、あんたの実力はたぶん俺より上だから、願ってもない話だ」
「ふーん、見る目もあるようね」
俺とレイスの視線が交差する。
フイクはそんな二人を交互に見ることしかできなかった。
「じゃあ早速行きましょうか」
レイスはそう言ってカウンターのほうにスキップしていった。なんて気楽な女なんだ・・・。

俺とフイクがカウンターに着くころにはほとんど受け付けは終わっていたようだ。
クエストにはソロクエストとグループクエストがあり、ソロクエストは主に酒場以外で受けるクエストらしい。グループクエストは全て酒場で受注する。グループと言うが、別にパーティーを組んでいなくてもいい、ただ報酬に関してはリーダーが分配する。リーダーはクエストを受注した人だ。
酒場にあるクエストカードをカウンターに持っていき、リーダーが契約金を支払う。その後にクエストを受ける人を確認して終わりだ。実に簡単である。
制限時間の設定は基本的に自由、クエストによっては月単位の制限時間にすることが出来るらしい。ただその場合契約金が増える。実力とクエストの難易度をしっかりと見極めなければならない。
クエストの内容はさまざまな種類がある。
採取、護衛、討伐、運搬が主だ。
難易度はどれが高いとは一概に言えない。それぞれの内容によるとしか言えない。
ただ、クエストはメイン攻略とは基本的に外れる。別にやらなく

てもいいのだ、報酬がいいっていうメリットがあるからやる、それだけ。
少し前に触れたが、クエストは何度も受けられるものもあれば違うものもある。
そういうクエストは特に報酬が大きい、ただし難易度も高い。
と、頭の中で思い出していたところで、
「早く、カルラも登録済ませて」
レイスの声が聞こえた。
「ああ、すまん」
俺はポルを取り出し、登録をすませる。
本当にこの端末はなんでも出来る。逆に言うとこれがなくなると何もできない。
無くした場合どうなるのだろう？嫌な想像を描きながら、しっかりとポルをポケットにしまう。
ポケットの中の物には他人は触れられないらしい。何度も思うが不思議なポケットである。
ちなみにクエストカードは受注したら、マスターに預けられる。クリアしたらカードを返してもらえるらしいが、別にそのあとに用途はない。まぁ、自分の実力はこれくらいですと、示すには楽かもしれないが。
レイスがクエストカードをマスターに渡してこちらに歩いてくる。
「クエストの内容は、ここより少し南に行ったところに祠があって、その中にクエストを受注した人だけが入れる祭壇があるらしいわ。そこにボスモンスターがいて、そいつを倒す。
言うのは簡単だけど契約金と報酬から計算すると相当ボスは強いわよ」
俺は頷く。
フイクも不安げに頷いている。二人の反応を見てレイスはさらに補足する。
「制限時間は一応明日の日が昇るまで、そんなに時間はかからない

と思うけど、念のためね。成功すれば全然問題なし」
意外と慎重なんだなと思った。
キャラ的に数時間に設定して、パパッと終わらせて飲むわよー、とか言うと思ったのだが――
「パパッと終わらせて祝勝会をしましょう！！」
いや、ほとんど当たっていた。
「ヘイヘイ」
呆れ口調で返しておく。
「祝勝会ですか！！」
フイクは既に少しワクワクと言った感じである。まぁ、少なからず楽しそうではある。
この時俺は当初の目的であった三人組の事なんかすっかり忘れていた。
「じゃ、レッツゴー！！」
レイスの掛け声とともに意気揚々と出発したのだった。

レイスの実力と最初のボス戦

レイスの実力は想像以上だった。
出てくるモンスターを見るなり駆けて行き、小型のダガーでたちまち一掃してしまう。
一応パーティーに入ってもらっておいたから、メンバーである俺とフイクの二人にも経験値が少しずつ分けられる。
申し訳なくなって来て「手伝おうか」と言ったが「邪魔邪魔」と却下された。実際邪魔なのだろう。
ありえないスピードで敵に突っ込んでいく。俊敏値全振りでもあんなスピードは出るものなのか？ありえない気がする。
それを聞いてみたところ、
「なんか、もともとの身体能力にその他がプラスされるらしいから」
と言っていた。これは初耳だった。しかしそれは本当のようだ、俊敏値は俺より少し高いだけらしいから。
「つまんなーい」
そう言って大ネズミという名前のモンスターを蹴散らしていく。
モンスターの方が可哀そうだ・・・。
順調に祠への道を進んでいく。完全に見ているだけの俺とフイクは全く疲れていない。レイスも全然疲れた様子を見せないが。
「レイスさんってあっちでは何をしていたんですか？」
唐突にフイクが訊ねた。
「あっちって現実世界で？」
「はい」
「・・・・言いにくいなー」
特殊部隊とかだろうか？真っ先に浮かんだ想像はそれ、全然違和感がない。サバイバルナイフ一本で敵兵を葬っていく・・・。ぶるっと悪寒がした。

「カルラ・・・・私、人殺しとかしてないから」
また心を読まれた・・・。こいつ絶対に読心術を使えるだろう。
「えーっとね、一般的に言うと忍びかな」
忍びっすか・・・・。最初に会ったときに感じた印象は当たっていたようだ。
「忍者ですか！！ジャパニーズスパイですね」
とてもうれしそうなフイク。ジャパニーズスパイという表現はあっているのだろうか・・・。とそれは置いておくとして、
「忍びってなんだ、俺たちが思っているようなものか？」
「遠からず近からずといった感じね、私たちは普通に社会に紛れ込んでるし、別にスパイ活動をしているわけでもないのよ。
ただ、身体能力が優れた集団・・・というより、そういう訓練を受けた人たちかしら」
「何のためにそんな訓練を受けているんだ？」
今の時代、寝首を掻かれるなんて物騒なことはない、というか社会に紛れてる時点で別に不必要な能力だろ。
「うーん、何のためというより、風習・・・家の問題ね」
「そんな家も残っているもんなんだなー」
まぁ、剣道を習っていた自分も変わらないと言えばそうなのだが。
実際ちょっとそういうのが過激になっただけだろう、と納得しておく。
「カルラが思っていることとは少し違うわよ」
「人の心を読むな！！」
流石にキレた。
「アハハ」と後ろから笑い声が聞こえる。キニシナイキニシナイ。
「ごめんごめん、忍びっていうのは敏感だからね。ただ武術を習ってるだけじゃなくて、体を少しいじってあったりするのよ」
「体をいじるですか？」
笑い終わったフイクはチンプンカンプンと言った感じで頭の上に？マークを浮かべている。

「そう、人体実験て言うほどのものでは無いけど、常人より少し筋力があったりとかそんだけよ。あまり気にしないで」
レイスはそう言って自嘲気味に笑った。
本人が気にするなと言ったのだから、深くは追及しないがなんとも訳の分からない風習だと思った。たぶん何年も何十年も、もしかしたら何百年も前から続いているのではないだろうか・・・。
「こら、カルラ。あならが考えたって、無駄なことなのよ」
「ヘイヘイ」
わざと呆れ口調で応えたが、やっぱり内心考えずにはいられなかった。なんのためにそんなことをしているのかと・・・。

それから数時間は歩いたころ。いきなり、フイクが走り出す。
「あれでしょうか？」
フイクが指差す先にはボロボロの遺跡があった。柱が何本も朽ちて折れている。苔が全体を覆っていて、何年も前から使っていない雰囲気を出している。
細かい設定な事だ。
「下に続く階段があるわね」
遺跡は規模が小さかったので、ここが祠なら階段がある筈だと思ったがどうやら当たったようだ。
「ちょっと休憩してから中に入ろう」
俺はそう言って近くの倒れた柱の上に座った。二人も習って座る。
大量の苔で意外とやわらかかった。
「レイス、あんたそろそろレベルアップしてるんじゃないか？」
ここに来るまでレイスは数十、数百のモンスターを倒したのだ。カルラも偶に手を出していたが三分の一にも満たない、あれだけの数を倒したのだレベルが上がっていても不思議はない。
「私はたぶん上がっていないわ。それよりカルラ、あなたが上がっていると思う」
レイスが上がっていないのなら俺も上がっていないはずだろう、

と思ったがポルを取り出すと軽快なファンファーレが鳴った。レベルが上がったのである。
「本当だな」
普通に驚いて見せる。
スキルポイントは全て両手長剣熟練度に振ろうと思ったのだが、
「武器のスキルには振らない方がいいわよ」
という声に止められた。
俺が訝しげな表情をすると、レイスは微笑んで続けた。
「武器は使っていれば、勝手にスキルポイント上がってくれるらしいから」
確かに両手長剣熟練度はスキルポイントを振った十ではなく、十三となってる。思ったより上がるのが早いと思ったがこのスキルは結構大事なスキルである。疎かにするのはためらわれる。
「何に振ったほうがいいと思う？」
「普段上げるのがめんどくさそうなので、必要なスキル。索敵なんかがいいんじゃない？」
俺は素直に従っておく。
索敵スキルを選んでいるのを当てられたのはこの際放置だ。
「あんたは本当にレベル上がってないのか？」
「ええ」
そう言ってポルを取り出す。きれいなシルバーだ。
いろいろと操作してるらしいが、ファンファーレはならない。
「ほらね、わたしもう四レベルだから」
「「っ！？」」
俺とフイクは同時に驚く。どれだけのモンスターを倒したのだろう。
「門が開いたのが、三時でそれからずっと狩っていたからね」
暗いところで、目が効くのかよ。
「忍びだからね」
心の中に思い浮かべた疑問を軽くあしらわれる。

「最強じゃねーか」
俺は思わず毒ずつ、レイスは苦笑するだけだ。
「スキルは何を上げてるんですか？」
まだ信じられないという目でフイクが訊ねる。
「あんまりそういう質問はしない方がいいわよ」
「どうしてです？」
今度は目を丸くするフイク。実に感情豊かだ。
「この世界だと、人殺しもありえるかもしれない。そういうときにステータスだけで、相手の強さが分かっちゃうからね。
私のような特例は別だけど」
「フフ」と笑うレイス。
今まで考えていなかったが、本当にそうだと思う。あんまり他人に個人の情報をさらけ出すのは危ないかもしれない。
「まぁ、全ての人間が悪い人ではないけどね」
そう言ってバッチリウィンクを決めるレイス。
「はい。気を付けます」
シュンとなっているフイク。
「本当にフイク君可愛いわね」
レイスがフイクに抱き着く。いつの間に移動したんだ。
「わ、わ！！やめてください！！」
「いいじゃない、こんな美人なお姉さんほかにいないわよー」
フイクは顔を真っ赤にして抵抗している。
俺はやれやれと首を振るしかなかった。

いざ祠に入ると、フイクは緊張した面持ちで、レイスに関してはいつも通りという表情である。
俺はワクワクしていた。
ゲームをやっていないってこともあると思うが、未知の世界へ冒険をするということは男子にとって非常に熱くなれる展開である。

チャンバラごっこをしながら、行ったことのないところに行くのである。
ん？バカかって？いや、真剣だ、と心の中で一人で熱く語っていたところ、
「なに訳の分からないこと考えてるのカルラは」
レイスにツッコまれる。ヒジョーに恥ずかしい展開である。
階段は結構な深さのようで、十分ぐらいは下りているのにまだ着かない。壁の石が淡く青白い光を出しているので、足元はしっかり見える。
明るいとは言えないので、警戒は怠らない。
さらに数分下りるとようやく階段が途切れた。上りがキツそうだが今は考えないことにする。
「ちょっと暗いから、足元気を付けてね」
そう言ってレイスは進んでいく。
確かにさっきよりさらに暗い。レイスは足元なんか気にしない風に進んでいく、夜にも目が効くというのは本当のようだ。
俺とフイクは慎重に進んでいく。
道は一本道で、モンスターの気配は今のところない。
カツカツという石の床を歩く音だけが響いている。レイスの足音は全く聞こえないが。
フイクはしきりに後ろの方を気にしている。すぐにビビっていると分かった。
俺は曲がり道のところで、待ち伏せして「わっー！！」と驚かす。フイクは「うわあああああああああああああ！！！」と派手に尻餅をついて驚く。
予想以上に驚いたので、こっちまで驚いてしまった。
「遊んでないで」
レイスは後ろからいきなり叫び声が聞こえたという状況なのに全然冷静である。いつかこいつを驚かすという密かな企みが出来た。
「もう、驚かさないでくださいよー！！」

涙目で、フイクは憤慨している。「ごめんごめん」と言ってフイクを起こしてやる。
そのあとは俺が一番後ろになった。
ずっとお尻を摩っているフイクを見ると、笑いがこみあげてくる。相当痛かったのだろう。笑うとさらにフイクにキレられそうなので、じっと我慢しながら歩いていた。
そんな必死な葛藤をしつつ歩いていると、「ウォオオオオオオ！！」という雄叫びが聞こえた。
俺は三人の男の事について思い出す。
やばいと思った時には、レイスは駆け出していた。俺はフイクと頷きあって後を追った。

細道を抜けると広間に出る。
そこでは棍棒を持った巨人が男達を襲っていた。
ズシン、ズシンと足音が響いている。広間と言っても十メートル四方ぐらいで、巨人にとっては随分暴れやすい大きさである。棍棒の長さにに腕の長さを足せばリーチは三メートル近く。
男たちは逃げているだけである、どうやら動きは言うほど早くないらしい。
しかも向こうは行き止まりである。男達が奥まで行ったところで、こいつは現れたんだろう。
モンスター「トロール」は徐々に男達を追い詰めていく。
ハッ！！と思い、レイスはどこだと探す。まさかやられたか！？という危惧は手前の右隅を見て打ち切られた。ピンピンしている。ただしどこか怯えた様子である。
俺はレイスの方に駆けていく。
「どうした？」
「ごめん、怖いの」
よく見ると体が震えている。どうやらこいつも女のようだ。

「大丈夫、俺がついてるから」
するりと口からセリフが漏れる。意識してやったことではない・・・と思う。
レイスはおずおずと俺の手を握ってくる。グローブ越しであるが、体温が伝わってくる。暖かくて小さな手だ。
「カルラって優しいのね」
恥ずかしそうに言うが、別に顔が赤かったりとはしない。冗談だろうか？
「冗談じゃないよ」
ムッ、心を読まれた。
「表情を隠すのには慣れてるからね」
そう言って手を放す。もうちょっと繋いでいたかったというのが本心だ。別に惚れたとかそういうのではないと思う。昔からそういう感情はあまりない。
「それじゃあ、鬼退治に行こうかしら」
そう言って剣を二本出す。少し短い曲刀だ。
俺は首をかしげている。
レイスは剣を外側に持つ。曲がった剣が肘の外側を通って肩に当たりそうになっている。
双剣というやつだろうか。親父の道場にそういえばそんなことをやっていた奴がいたなと思い出す。しかし、そいつの二振りの剣は全く噛み合ってなくて、正直弱かった・・・・の、だが、この女、レイスが構える双剣はすごく様になっている。
随分と長い間、この剣術で訓練、もしくは戦ってきたことが分かる。
「っていっても、スキル外の装備で熟練度が低いから」
「じゃあなんで？」
「うーん・・・慣れてるっていうのもあるし、手数がこっちの方が圧倒的に多いからダメージもこっちの方が多く与えられると思うから」

俺は別に異論はない。
こんな場面で格好をつけても仕方ないし、双剣の方がダメージがいいというのだから別に戻してもらう必要はない。それに結構似合っている。
レイスはニコニコと笑っている。心を読まれたかもしれない・・・。
俺は気恥ずかしくなってレイスから視線を外す。
「フイク、お前は見てろ！！」
未だに出入り口の方にいたフイクに叫ぶと背中に手を回し長剣を取り出した。
今の叫び声でトロールはこちらに気付いたようだ。男達に気を配りつつこっちを見ている。見た目の割には、知能も高いらしい。
「あなたも見ててもいいわよ」
すでに震えの止まったレイスはいつもの調子に戻っている。
「馬鹿言え、女に一人に戦わせてどうする」
「なんで「レイスも見てろ」って言ってくれないのよ」
プリプリと怒っている。冗談と分かっているので俺は苦笑する。
「だって、レイスの方が俺より強いしな」
「私は女の子なの」
そう言ってウィンクする。この人のこういう仕草は素直に可愛いと思う。
この人何歳なのだろう・・・という疑問が浮かんだ瞬間睨まれた。
「そういえば、あいつの何が怖いんだ？確かに迫力はあるが」
何故かキョトンとされる。
「あれが怖くないという方がおかしいわよ」
筋肉というより、ぜい肉で覆われた巨体に禿げ頭が載っている。
装備は手に持った棍棒と腰に巻いてある布だけだ。しかし、その眼には人間を殺したいという狂気が入り混じっている様に見える。
最初だったら恐怖したかもしれないが、今となってはそれほどでもない。

トロールは「グルル」と唸りながら、ずっとこっちを睨んでいるだけだ。まるで俺達が話し終わるのを待っているのかのようである。
「レイスの方がよっぽど怖いよ」
ポツリと口にする。
そんなに真剣に言ったつもりはないのだが、レイスにジト目を向けられる。
なんか罪悪感が出てきたんですけど・・・。
「カルラって鈍いよね」
そう言って走り出す姿勢を作る。俺も習うように構える。
「カルラ・・・・」
「ん？」
「えっとね」
なにか躊躇っているようだ。
「なんだ、早く言えよ。トロールが突っ込んでくるぞ」
「うん、カルラ、あなたを主として契約します」
そう言っていきなり軽いキスしてきた。本当に一瞬。気付いたのはキスが終わってレイスがつま先立ちを終えた後だ。
は、はい・・・？ファーストキスを奪われました・・・・。俺の純粋な唇が・・・・。等と考えている内にレイスは走り出していた。
「待てヤー！！」
俺も走り出す。
元から短かった間合いが一気に縮む。レイスはすでにトロールの懐に入って攻撃を開始している。
ビビっていたくせに随分と危ない戦い方だ。懐は一応安全ではあるが、そこから少しでも出れば敵の格好の的である。
トロールの腰が、レイスの頭というスケールの違いである。近づいてみると、そのデカさに息を呑んでしまう。
俺は棍棒の攻撃を避けつつ、レイスと被らないように攻撃を加えていく。
動きが鈍いと言っても、棍棒を振り回すスピードは結構速く、モ

ロに食らえば致命傷間違いない。
俺は無理に攻勢に出ずに、一定の距離を開けながら戦う。
ダメージはレイスが与えてくれる。焦る必要はない。視界に映るレイスはトロールの足の裏側に回り込んで、数えきれないほどの斬撃を放っている。剣先は全く見えない。
まるで舞を踊っているようだ・・・。戦闘中にもかかわらず、見とれてしまう。それくらい洗礼され、無駄のない動きだった。
「っく・・」
危うく、直撃を食らうところだった。ギリギリ、左腕に少し当たっただけである。頭上を見るとHPのゲージはグンと減っている。想像以上に一発一発の攻撃力は高いようだ。
「集中切らさないで」
レイスの声が飛ぶ。
「分かってる」
俺は答えながら後ろに跳んで距離を取る。ポケットに入れておいた回復ポーションを一息にあおる。一応三本入れておいたが、足りないかもしれない。
少しずつ、少しずつ、HPバーが伸びていく。全回復まで、数分はかかりそうである。
めちゃくちゃまずっと思いつつ、また敵の方へ向かう。レイス一人に任せるわけにはいかない。
グランゼルに売っている中で、一番高いポーションでもこの回復スピードである。正直イライラしてくる。
「レイス、危なくなったら早めに抜けろよ」
「大丈夫」
そう答えるレイスだが徐々にレイスのHPバーは減っている。攻撃を受けているわけではない、この巨体が地面を震わせるたびに、HPが減っていくのだ。俺は言うほどダメージを受けないが、レイスはほとんどゼロ距離で、その影響を受けている。
もう少しメンバーがほしいところだと思う。しかし、フイクに戦

わせるには、少しキツそうだし、あっちで固まっている男達は使い物になるとは思えない。
正直、こいつは六人のフルパーティー二組以上で、入れ替わりながら相手にするモンスターだと思う。少人数で挑むには相性が悪い。タフな割に徐々にこちらはダメージを受ける。しかも回復薬は頼りなさすぎる。
レイスのＨＰは半分を切って黄色になった。思わず舌打ちしてしまう。
気持ちだけが焦る。徐々に、気付かないうちに攻勢に出ていた。しかし、棍棒の攻撃は当たらない。練習の時にグリズリーと戦った時のように周りの光景が遅く見える。
数発の棍棒の薙ぎ払い攻撃を避け、振り下ろしをギリギリのタイミングと最小の移動で避ける。
行ける！！
俺は確信して、右下から剣を大きく振り上げる。棍棒を地面に打ち付けたトロールの太い左腕に大きく食い込む。
大ダメージなのは分かるが、剣が抜けない。予想外にトロールの腕は硬かった。
トロールは激しい雄叫びを上げ、怒りと痛みを隠すことなくぶちまける。
俺は必死に剣を引くが全く動かない。トロールがついに手を上げようとした。しかし、絶好のタイミングでトロールの体勢が崩れる。
「今だ！！」と内心で叫び、今度は逆に上向きに力を加える。肩に担ぐように剣を持ち、全力で振り上げる。トロールの腕が下に下がり、俺の剣が上に上がる。
剣はさらにさらにトロールの腕を切り裂いていく。そして斬り込んだ逆側から剣が抜ける。
トロールの腕は千切れ、血のように赤いライトエフェクトが出た。トロールは呻き声を上げ、地面を転がる。
俺は咄嗟に体を引いてトロールの体が当たらない場所まで下がる。

レイスも無事らしい。笑っているところを見ると、さっきトロールが体勢を崩したのはレイスがやったのだと分かった。
「さんきゅー」
「いえいえ、それにしてもさっきの集中力はすごかっ――」
と、そこで会話が途切れる。
トロールが立ち上がって「フーフー」と荒い息を上げている。トロールの左腕からは常時少量のライトエフェクトが出ている。切り離された方はすでに消えている。残っていたらさぞかし不気味だろう。
「どんだけタフなんだよ」
俺はトロールに突っ込んでいく。左腕に持っていた棍棒は、地面に転がっている。今なら叩き込める。同じことを思ったのか、レイスも攻撃を開始しようとしている。
右腕を払ってくる。棍棒を持っていない分スピードは速いもののリーチは短い。
俺は隙の出来たトロールの足に一撃加える。トロールはグラッとよろけて倒れそうになる。踏ん張って、倒れるのは防いだようだがもう少しのはずである。
俺は気を抜かないように剣をさらに強く握る。
トロールは腕を思いっきり地面に叩きつける。最初から外れていた攻撃で避ける必要はなく、すぐに攻撃に移ろうとしたのだが、地面が揺れて、思うように動けない。
どんな馬鹿力だよ！！
バランスを取るのに気を取られる。
トロールの次の行動に気付いた時には、俺の頭の上にトロールの腕が振り下ろされるところだった。
俺は咄嗟に剣でガードしようとするが、確実に間に合わないタイミングである。
トロールの腕はゆっくりとしている。俺の集中力が極限まで高められているのだろう。いや、死ぬ前に人は風景がゆっくりに見える

らしい。それかも知れない。
俺は目をつむって、その瞬間を待った。
「ああ、俺の人生もこれまでか」と驚くほど、落ち着いていた。
開き直ったと言った方がいいかもしれない。

しかし、いくら待ってもその瞬間は訪れなかった。
恐る恐る目を開けると、目の前にレイスがいた。しかも、目をつむってキスしようとしているではないか。
俺は頭をひょいっと後ろに下げてキスを躱し、
「何してんだ」
レイスの額にデコピンをお見舞いしてやる。
「いたっ！！」
額を抑えてうずくまるレイス。そんなに強くやったつもりはないのだが、
「大丈夫か？」
一応声をかけてやる。耳がかすかに赤いような気が・・・しないでもない・・・。
「ふん、私が助けてあげたのに」
そう言ってフンとそっぽを向いてしまった。こんな一面もあるのか、と思う。
周りを見るとトロールの姿はなかった。
本当にレイスに助けてもらったらしい。感謝せねばなるまい。
「ありがとう」
素直に頭を下げる。
「礼なんていいから、あれしてよ」
俺は首をかしげる。あれとはなんだろうか？
「ハアァァ・・・」と盛大にため息をつくレイス。
「ホント鈍すぎ、カルラ」
鈍すぎを強調して言われる。
いやいや、普通分から無いっしょ、と自分の非は認めない。

「さっき言おうとしたけどさ、カルラって集中すると、相当強くなるね。目が特にすごい、もうびゅんびゅんってすごいスピードで動いてるもん」
気分を入れ替えたレイスが、目をキラキラさせて聞いてくる。
「ったく、何を見て――」
「私、強い人好きなのよー」
と俺の言葉は遮られる。お嬢様のような振る舞いである。
「ヘイヘイ」
俺は素っ気なく返す。
別に恥ずかしがったりしない。
・・・だってこれ冗談だろ？
俺は目の前の美人から視線を外して広間の奥を見る。しかし、そこに男達はいない。逃げたのかと思って、振り返る。
そこに男達はいた。妙にニヤニヤとしている。気味が悪い。
それにしてもと思う、フイクがいないのだ。広間を見渡すが、見当たらない。レイスもどうやら異変に気が付いて首を回している。
と、そこで気が付く。男達が三人隙間なく並んで、ニヤニヤと笑っていたことに・・・。
俺はキッと男達、主に中央にいるレグロを睨む。最初見た時には気が付かなかったが、その手にはナイフを持っていた。武器としては、実に頼りない。
それにこいつは曲刀を持っていたはずである。
「おい！！俺の連れをどうした！！」
俺は敵対心丸出しの声を出す。
「おいおい、そんなに威張ってられるのかぁ、お前のお仲間が死んでも知らねーぞぉ」
粘っこい声で脇の一人が言ってきた。
その後にレグロは一歩大きく後ろに下がる。他の奴らも後ろに下がった。
男達の前に倒れたフイクがいた。

レイスの実力と最初のボス戦（後書き）

一昨日まで間違いで二次創作の方に出していました。
本当に申し訳ありません。

それと教えてくれた方本当にありがとうございました。
これからも、至らぬ点があれば教えてください。

ストックは基本的ないので、更新は不定期です。
この前も言ったように一週間に二回はしたいと思っています。

応援よろしく！！

本質

フイクは縛られている様には見えないが、動けないでいる。
その目は見開かれていて、何かを必死に伝えようとしているように見えた。
しかし、その意図は伝わらない。
「何が目的だ？」
俺は出来るだけ、必死に、冷静になって声を出す。今すぐにフイクを助けに行きたいが、男達の三人の内一番背の小さい男が、フイクの首筋に長剣を当てている。その男の目はトロールと同じような狂気の目だった。
いや、それよりも濁った眼である。人間の欲が、人間の汚いところが、その目にははっきりと映し出されていた。
「なんだ？俺たちが悪いっていうのか・・・？」
男達は不気味な笑みを浮かべる。
「お前たちが俺らの獲物を奪ったんだろうが！！
だからと言っちゃあなんだが、報酬を俺たちに譲ってもらおうか」
レグロはそう言ってさらに高笑いしている。
「報酬は村に戻らないともらえない！！」
「はあ・・・？寝ぼけてんのか、討伐系のクエストはその場で報酬がもらえる仕組みなんだよ！！」
男はフイクの首に剣を擦り付けながら叫ぶ。徐々にフイクのＨＰバーが短くなる。
俺は舌打ちして、剣を構えようとした所で、
「いいわよ！！交渉に応じるわ」
レイスがそう言って、歩いていく。
「ま、まて、俺が行く」
「あら、私の方が強いんじゃなかったのかしら」
思わず絶句する。

そんなこと言ってる場合じゃないだろう。それに相手がこの交渉に正しく対応するとは限らない、どちらかというと応じない可能性の方が高い気がする。
レイスに何かあったら俺のせいだ・・・。
「武器はそこに置け」
「はい、これでどうかしら」
レイスは双剣と小型のダガーを地面に置く。
「いいだろう、交渉は俺が出よう」
レグロはナイフを持ったままレイスの方に歩いていく。
正面から当たればレグロがレイスに攻撃を加えることはまず不可能だろう。しかし、レグロは何か飛び道具のようなものを持っているかもしれない。冷や汗がダラダラと流れる。嫌な緊張感が、広間いっぱいに広がっている。
「報酬はどういう風に渡せばいいのかしら」
「ポルの交換窓で全てこちらに渡せ」
レイスはポルを取り出す。
そこで、レグロが行動に出た。
手に持ったナイフをレイスに突き出したのだ。しかし、その動きは実に緩慢で、避けるのは実に簡単なスピードだった。
しかし、レイスはその攻撃を受けてしまったのだ。
なぜ!!??
俺はそれしか考えられなかった。
「馬鹿な女だな!!
おい、こいつをそのガキの横に寝かせておけ」
一人の男が、レイスを運んでいく。というよりも引きずっていく。
レイスの目は驚きと、恐怖でいっぱいのように見える。
俺は内心でかなり焦っていた。
レグロも男達の方に戻って行った。倒れたレイスの髪を持って無理やり顔を持ち上げる。
「いい女だよなー・・・」

レグロはレイスの頬をペロリと舐める。粘々の唾液がレイスの顎から垂れた。
レイスは気丈に振る舞っているが、いつまで持つか分からない。
それよりも俺の怒りが抑えられそうにないが。
「おい！！交渉はどうしたんだよ！！」
俺は叫ぶ。その声には誰も反応しない。
レグロは、レイスの服を脱がそうとした。他の男達もそれをジロジロと見ている。
その奥のフイクは涙を流していた。
怒りに、恐怖に、悲しみに、自分の不甲斐なさに・・・。

俺の心臓がとてつもない速さで動いていた。強く、強く。俺の瞳からも涙が溢れてきた。
何を俺が泣いているんだ・・・。
レイスは、未だに気丈に耐えている。
フイクのＨＰバーは三割を切って、赤く点滅している。レイスのＨＰもボス戦で消耗した分で黄色である。一瞬で三人の男達を倒す技量は今の俺にはない。
レイスのＨＰバーの点滅が速くなっていく。男はニヤニヤと笑いながら剣をさらに強く擦っていく。
畜生が！！と心の中で叫ぶ。
遂に俺は我慢が出来ずに走り出そうとした。
しかし、
「こっちに来るなよ、こいつらがどうなっても知らないぞ！！」
そう言ってレグロはナイフをチラつかせる。
あのナイフだ・・・。
あのナイフが、フイクとレイスの体の自由を奪っているんだ。
俺は唇を食いしばる。血の味がした。ＨＰが減っているかもしれない。
目を背けたい、逃げ出したい、帰りたい、心の弱いところが露わ

になっていく。
・・・・あぁ、俺の器はこんなものなのか・・・。
俺は、もう何も考えられなかった。レイスの顔を見る。
笑っている・・・・？
そう思ったのは一瞬だった。
次の瞬間レイスは、動き出した。体が動かないはずなのに。
「・・・なっ」
男達の体が崩れていく。
俺は悟った、レイスはナイフを避けていたのだと、わざと敵につかまり、フイクを助けるための演技だったのだと。
ならば、もっと早く動いてほしかった。俺はレイスの演技に騙されたことに対して恥ずかしくなってきた。涙まで流してしまったのだ、後でなんと言い訳を言えばいいのだろう。
俺は袖で涙を拭う。
レイスは両手でフイクをこっちに投げる。すごい筋力数値だ。そして、今のは痛そうである。フイクのＨＰバーはもう数センチしかない。いくらなんでも危険すぎるだろ。
転がっているフイクから視線を外してレイスの方を見る。
「・・・？？」
俺の思考は再び停止する。レイスの体が硬直して、倒れて行った。
レグロが立ち上がる。その手にはあのナイフが握られている。
「脅かしやがってこのアマ！！」
レイスの腹に蹴りを入れる。顔を真っ赤にして怒りを露わにしている。他の二人も立ち上がり、レイスに殴りかかる。
なぜこいつ等を再起不能にするまでやらなかったんだ？こんな奴ら殺されてもいいのに・・・。レイスは何を考えているんだ？
砂埃が立ってレイスの姿は見えない。
「やめろ・・・やめくれ・・・・」
掠れた声が聞こえた。誰の声だ・・・？、俺の声だ・・・。
弱い、誰よりも弱い俺の声。

「死ねー！！」
レグロが曲刀を振り下ろす。その動きはしっかりと見える。こんな場面これ以上見たくないのに・・・レイスが殺される場面なんて見たくないのに。

砂埃が晴れる。
レイスはまた笑っていた。屈託のない笑みだ。
（カルラは悪くないよ。私の方が弱い、怖くて、人に嫌われるのが怖くて。それに自分が苦しみたくないから）
そう言ったのが、聞こえた気がした。
レイスのやわらかい、優しい声で。
・・・なんだよそれ。意味わからないし、そんなの理由になってないじゃないか。人に嫌われるのが怖い？今お前を殺そうとしている人間だぞ？そんな奴らにも嫌われたくないというのか？それに苦しんでいるのはお前だろ？
思わず呆れてしまう。
レグロの曲刀が、ゆっくりと、ゆっくりとレイスの首を切り離していく。

俺は、目をつぶってしまった。怖くて、何もできない無力な自分をレイスに嫌われてしまう瞬間を見るのが怖くて・・・。

「愛してる」
ハッと目を開ける。
またレイスの声が聞こえた気がした。
しかし、目の前には赤いライトエフェクトと三人の男達だけ・・・。
俺はやってはいけないことをしてしまった。人の死から顔をそむけるなんて、絶対にしてはいけないことだ。本当に嫌われることをしてしまった。

「ごめん、ごめん、ごめん・・・・」
口が勝手に動く、心の言葉が溢れてくる。謝っても謝りきれない。
それは分かっている。それなのに止められない。
「うひゃひゃひゃ！！ざまーみろ」
耳に不快な音が入ってくる。
なんだろう、なんで、こんなに胸の奥が熱いんだろう。なんで俺は走っているんだろう？

俺は、斬った。
全てを
何もかもを
自分の感じるままに。思考を抑え、感情だけを表に出す。剣が、体が、勝手に動く。なんの感触もしない、斬っているのに・・・。何度も、何度も斬っているのに、何も伝わってこない。心の中に虚無が広がっていく。
「全てを受け入れろ」
心の中でそんな声が聞こえた。誰の声か分からない。決して優しい声ではない。しかし、俺を責めているようには聞こえない。
俺は目を開ける。
そこにはナイフが落ちていた。俺はそれを拾う。また怒りが溢れてきた。俺はそれを、男が使っていた曲刀で叩く。斬るのではない。ただ乱暴に刀を振り下ろすだけ。
自分の剣でこんな穢れたものに振れるわけにはいかない。
手が痛い。疲れた。刀の刃がボロボロだ。意識が朦朧とする。息がつらい。止めたい。なんで、なんでこんな事をしているんだ？
「全てを受け入れろ」
またあの声が聞こえた。
なにを？なにを受け入れるの？
俺は手を動かし続ける。ついに、刀の耐久値がなくなり刀が崩れ

る。俺はそのまま地面に突っ伏す。そこにナイフは無い。どうやら既に壊れていたようだ。
俺ははっきりしない意識の中考える。
なぜこんな事をしているんだっけ？
俺は立ち上がる。顔を上げると、その先には倒れたフイクがいた。

ぼんやりと思い出した。レイスは死んだんだ。俺の不甲斐なさのせいで・・・。
そうか、受け入れろとはこのことか・・・。ああ、分かりたくない、理解したくない、考えたくない。それでも受け入れなければいけない事なのだろうか。
涙があふれてくる。
「・・・・レイス」
年上の気ままな女の事を思い出す。今日の出来事を思い出す。
「少しだけ、勇気を分けてくれレイス」
ポッと心が温まるのを感じた。ただの錯覚だと理解はしているが、その感覚が本物であるような気がした。
「フイクだけでも・・・」
そう言って俺は自分の長剣を鞘に戻しフイクに近づいていく。
気絶している。しかし、目からは涙が溢れていた。目が腫れてせっかくの整った顔が台無しである。
「・・・しょうがない」
俺はフイクを背負った。顔に剣の柄が当たらないようにしてやる。
俺とフイクのほかには誰もいない広間を歩いた。
一人だけの足音が響く。自分のやってしまったことを理解し、一歩一歩しっかりと歩く。途中で、レイスの双剣を拾ってそれをポルでしまった。
流石に階段はきつくて時間がかかった。
外に出るとすでに日が落ちていた。ポルで時間を見たところ、夜の九時である。思っていたより、時間が経っていた。

夜になるとモンスターの活動が頻繁になる。
俺はフイクを一旦地面に寝ころばせた。背中から剣を出し、またフイクを背負う。ずり落ちないようにロープで縛った。
ロープは昨日道具屋で買ったものである。
「・・・よし」
しっかりとロープを結び、長剣を持つ。
最大限まで集中力を高めた。いつまで持つか分からない。来るときに三時間はかかったから、それ以上はかかることは覚悟していなくてはならない。
索敵スキルと自分の感覚だけを頼りにモンスターの気配を探る。
暗視のスキルはろくに上がっていないので足元は全く見えない。俺は何度もこけながら進んだ。モンスターには何度も遭遇した。
俺はダメージを受ける。しかし、回復ポーションはたくさん買ってある。俺は目の見えない中、気配だけを頼りに戦う。
ＨＰゲージだけはしっかりと見える。また、半分を切った。もう何度目か分からない。
飛びついてくる敵に剣先を合わせて突きを繰り出す。綺麗に決まったようで明るいポリゴンとなって四散する。
ポケットを探ってポーションを探す。しかし、ポケットはカラである。仕方なく、ポルを取り出して、回復ポーションを取り出す。
最後の三本だ。
俺はそれをポケットに入れようとした、だがそこへモンスターが飛びついて来た。俺は慌てて、剣でガードする。ポーションを二本落としてしまった。
小さな小瓶が割れて、中の液体が地面にしみ込んでいく。
悲観する間もなく、モンスターが次の攻撃を仕掛けてきた。俺は右手一本で剣を振り回す。運よく当たったようで、モンスターの呻き声が聞こえた。
すでに剣の切れ味はなくなって、斬るというより、潰したり、叩いている感じである。

一撃で仕留めきれなかったようで、モンスターはどこかへ行ってしまう。カーソル位出てほしいものだ。
俺はポーションをポケットにしまい、切れていた集中力を再び高めていく。精神力も限界で、頭痛までしてきていた。
「流石にきつい・・・」
俺は呟くと、中段に剣を構える。
モンスターは気配を消していて、どこから現れるか分からない。
徐々に集中力が高まっていく。時間が遅れていくのが分かる。自分以外が止まっている感覚。
俺は振り向きながら、両手で持った剣で回し斬りを繰り出す。
その斬撃はモンスターにクリーンヒットする。モンスターの勢いと剣のスピードでかなりのダメージを与えたようで、モンスターはポリゴンとなって四散した。
俺はすぐにポケットからポーションを取り出し飲み干す。もうこの味にも慣れてしまった。
最後のポーションを使ったが、ＨＰは八割ほどまでしか回復しなかった。回復し終わるのを確認すると、また歩き出す。

さらに数回モンスターとエンカウントして、もうＨＰバーは黄色である。
徐々に辺りが明るくなってきていた。朝である。
視界が確保できて安心した。ポルの地図で確認すると、村までもあと少しである。少し気分が高まった。しかし、そこにモンスターが現れた。二十を超える大群である。
あと少しの距離だからと言って逃げ切れる距離でも無い。しかし、ＨＰも半分を切っている。
俺は思わず舌打ちをした。
それが合図だったようにモンスターが同時に突っ込んでくる。半分はアリ型のモンスター、もう半分は大きなネズミのようなモンスター。

俺は、必死に攻撃を捌きつつカウンターを入れていく。頭痛が激しくなる。吐き気もしてくる。
しかし、俺は負けられない。フイクまで死なせてはいけない・・・。
HPが三割を切り、赤色となった。
俺は最後の力を振り絞って突きを放つ。最後のアリ型モンスターがポリゴンとなって弾けた。
へたり込みそうになる足を踏ん張って堪える。まだ、終わっていない。俺は重たい足を引きずるように進む。
頭痛と吐き気はよりひどくなり、瞼も重い。
背中のフイクはずっと気絶したままである。剣を引きずって、村を目指す、と森が開けた。遂に村に着いたのである。
『酒場の村　パレンド』という看板が目に入る。表の物よりも、随分と汚い。
セーフティーゾーンに入った事を知らせる薄い抵抗の膜を通る。俺は集中力こそ切らせたが、足は動かす。とりあえず宿屋を目指すのだ。
と、そこで女の子の姿が目に入った。歳はフイクと一緒ぐらいだろうか。
「姉を知りませんかー！！」
一心に叫んでいる。こんな朝早くからご苦労なことだ。
四人組の男達がその少女に近づいていって、少女を囲んでなにか話している。女の子は嫌がっているようだ。しかし、周りの人は見て見ぬふり。
俺はその集団に近づいていく。
俺がこの子を助けたとしてもそんなのただの偽善だろう。それでも、やらないよりはましだ。
「おい、嫌がっているぞ」
俺は男の一人の肩を掴んで、振り向かせる。
「あぁ！？うるせーんだよ」

邪魔すんなと言わんばかりに殴ってくる。
何をしたっていうだ・・・。
俺は疲れた腕をどうにか持ち上げ、相手の手首を掴んで攻撃を止める。その腕を払って、威嚇のつもりで剣を持ち上げる。
全然、弱い。
他の男達も俺を囲む。
「なんだお前、ボロボロじゃねーか、それにそのでっかい赤ちゃんは誰だ??」
男達はフイクを指さしてへらへらと笑っている。
少女はこちらを心配そうに見ている。未だに通行人は知らんふりを突き通していた。
こっちの世界でもあっちの世界でも一緒だな・・・、ふとそんなことを考える。
「・・・関係ない」
俺はボソッと答える。声を出すのも億劫だ。
「いちいち癇に障るやろーだなー、やっちまうか」
後ろに立った男がそう言ってジャリンとわざとらしく剣を抜く音を立てる。
「かかれ!!」
言うが早いか、一斉に斬りかかってくる。
こっちのHPが見えないのかよ・・・。
憂鬱になる。俺は軽々とその攻撃をかわして、一人の喉元に剣を突き出す。男は「ヒィッ!!」と言って尻餅をつく。
・・・弱すぎる。
「まだやる・・・?」
他の奴らを睨むと、捨て台詞を吐きながらどこかへ走って行った。逃げ足の速い奴らである。
「大丈夫ですか?」
後ろから声をかけられる。
さっきの少女だ。

「ああ、大丈夫だ」
言うほど大丈夫でもないが軽く答える。
「宿屋、案内します？」
俺が担いでるフイクを意識したのか、俺の方を意識したのか、両方を意識したのか、そんなことを聞いてきた。
「頼む」
俺は短く答える。
「あ、は、はい」
なぜか、ビックリされてこっちが困ってしまう。
「こっちです」と少女は歩いていく。
俺は少し間を開けてその後についていった。

とりあえずフイクをベッドに寝かせる。
目の腫れはすでに治ったようだ。
「あ、私の名前はレイナです」
フイクに布団をかけてやっていると突然自己紹介をして頭を下げられた。
「さっきはありがとうございました。なんとお礼を言ったらいいか・・・」
「いや、いいよ。こちらこそ宿屋案内してくれてありがとう。
それよりもお姉さんを探してたみたいだけど、大丈夫？」
こっちも感謝してレイナと名乗った少女の緊張をほぐしてやる。
お姉さんの方はただの話題転換だ。
「い、いえ。昨日朝起きたらいなくなっていて・・・。すぐに戻ってポルにメッセージがあったんですけど、夜になっても帰ってこなかったので、怖くなってここまで来たんですけど、結局見つからないんです」
シュンとなるレイナ。それは心配である。
「おねぇさんの名前は？」

とりあえず訊ねてみる。
「はい、レイスです」
「・・っ！！」
俺は何も返せない。
ただ目を見開き、驚きを隠せないでいた。レイナは訝しげな表情で首をかしげている。俺は決心して、事情を話してやることにする。
この子に恨まれるのは構わない。いや、死ねと言われたらここで死んでも構わないかとさえ思った。

事情を話すと、レイナは涙を俯いた。
「フイクは、こいつは悪くないんだ。全部おれが悪い」
俺は、深く深く謝る。謝って済む問題ではないが。
「い、いえ、そんな気はしてました・・・・ポルの反応が消えた時点で、ほとんど確信していたと思います・・・」
思ったより冷静であった。本当に妹なのかと疑いたくなるくらいに。
「私たちは忍びですから」
そう言って微笑んだ。
・・・間違いない、妹だ。
俺は確信する。
顔はあまり似ていないが、笑った時の雰囲気が似ていた。それに心の中を読まれたのだ。よく考えれば、さっき夜にこの村まで来たと言っていた。そんなことが簡単にできるのは、この一族ぐらいかもしれない。
「疑って悪い・・・」
謝ってばっかりだ。
「いえ、いいんです。よく似てないって言われますし、それにあなたがカルラさんでしたか・・・」
レイナはそう言って少し考え込む。
俺は意味が分からず、首をかしげた。

「姉は、意外と面食いでしたね」
「ウフフ」と笑っている。何がそんなにおかしいのだろうか・・・・。
「えーっと・・・？」
「あ、すいません。不謹慎でしたね。
姉は、姉さまは主がどうとか、契約がどうとか言っていませんでしたか？」
・・・主、・・・契約、確かに言っていたような気がする。
「ああ、言っていたよ。・・・それがどうしたの？」
「私たちの一族は、殺す為ではなく、守る為に忍びをやっているのです」
いきなり、話が変わった。いや・・・なんとなく分かってきた。
「先代が、大切な人を守れなかったことを悔やんで、せめて自分の大切な人位は守れるようにと・・・忍びという道を選びました。
他にもやり方はあると思うんですけどね、不器用ですよね」
レイナは自嘲気味に笑う。
俺は悟った。
「主とは、契約とは、そう言う事です。
自分の大切な人の命を何よりも優先して行動します。それが自分の命でも。本望とまでは行きませんけど姉さまのやったことに、姉さまは後悔はしていないはずです。
それにあなたは分かっていると思います」
何をだろうか？
俺は何を分かっているのだろうか？
「姉は、あなたと最初に会った時から何か感じるものがあったらしいです。
書置きにもあなたに会いに行くと書いてありましたからね。
意外と一途だったんですねあの人は、いつもふざけているように見えて、しっかりと考えて行動している。
私の憧れの人です」

レイナの瞳に涙が溢れてくる。
この子はレイスの事が本当に好きだということが伝わってきた。
本当にすまないと思う。
「もう、謝らないでください。
お姉さまもそう言っていると思います」
涙をぬぐって笑うレイナ。気丈に振る舞う姿もよく似ていると思う。
「そうかもしれないね・・・」
「・・・」
変なことを言っただろうか、いきなりレイナは俺の事をジロジロと見てくる。さっきのが失言だとしたら、すぐに言い直さなくてわ。
しかしその機会はレイナの次の言葉によって奪われた。
「それにしても、カルラさんは本当に恋愛に疎いですね。お姉さまにも鈍いと言われたに違いありませんわ。このような方を好きになるとはお姉さまは相当な苦労者ですね」
レイナは微笑を浮かべる。
確かに言われたが、自分は周りの人間が言うほど鈍いとは思っていないつもり・・・のはず・・・なのだが。自信がなくなってくる。
「自分でも分かっていないのですか。もうダメかもしれませんね」
今度は声を出してレイナは笑う。
流石に、笑いすぎではないだろうか・・・。
「ごめんなさい・・・。
カルラさん、あなたは自分が思っている以上に魅力的な人です。容姿もそうですが、心の持ち方が行動が素敵な方だと思います」
心の持ち方・・・それは俺は最低の人間ではないだろうか？
「・・・」
思わず考え込んでしまう。
「あまり、自分の事を責めるのはよくないです。
自身を過小評価しすぎるのは、好きではありません」
そう言って真剣な表情になるレイナ。

「分かった。ありがとう・・・でも、君のお姉さんを死なせてしまったのは本当に俺のせいで、俺の弱い心のせいなんだ。それに彼女が消える瞬間を、死ぬ瞬間を・・・俺は、俺は目を逸らせてしまったんだ。怖くて見ていられなかった。

君が思っているよりも俺はひどい人間だ。君に嫌われてもおかしくない。

レイス、君のお姉さんは実際俺の事を恨んでいると思う」

俺は正直な気持ちを述べる。

嘘はつかない。それよりもこの子には自分の事を理解してほしいと思う、理解した上で許してくれるなら、それでもいいかもしれない。

「本当にしょうがない人ですね。お姉さまとそっくりです。自分だけを責めるところなんて本当に一緒です。とにかく今日は、寝てください。全然寝ていないですよね？

目の下に大きなクマが出来てますよ」

そう言ってレイナは部屋を出て行ってしまった。

俺は自分が疲れ切っていたことを今更思い出す。話し込んでいて、全然気にならなかった。

俺はフイクの部屋を出て、すぐ目の前の部屋に入った。

鞘に締まった長剣が立て掛けてある。これはもう使い物にならないから、買い替えなければならない。

ある一定の耐久度を超えてしまった武器はいくら砥いでも元の攻撃力には戻らない。

逆に超えなければ、何度でも砥ぐことが出来る。ただし、武器を研ぐことが出来るのは研磨スキルを上げていないとできない。

そんなスキルを取っていない俺は武器を買い替えるか、そのスキルを上げた人に頼むしかないのだが、そんな宛は今の俺にはない。

つまり、買い替えしかないということだ。

たった一日で耐久度が落ちてしまったのは、激しい戦闘というより硬い地面に何度も打ち付けていたのが、原因である。

もっと大切に使わなければ。
そんな事を考えながらシャワールームに入る。
別に体は汚れないのでお風呂やシャワーは不要だが、だからと言ってそのままベッドに入るのは躊躇われる。
顔にシャワーを浴びる。本物の水と同じ感覚。シャワーを浴びていると、ＨＰが全然ないことに気が付いた。
寝れば体力も回復するらしいので気にしない事にする。
シャワールームから出て体を拭いた。一拭きですぐに水気が無くなる。髪さえも一瞬で乾いた。
カゴに用意されていた寝間着に着替えて、ベッドにゆっくり入る。
今日はいろんなことがあった。
そんな事を思っている内に意識が途切れた。
体の疲労はピークだったが、なぜか寝れないような気がしていたので、すぐに寝れたことは俺にとってたぶんよかったことだったのだろう。

本質（後書き）

今回はちょっとつらい話になりました。

・・・・レイスさん（涙）

ちょっと急展開かもしれないですね。

評価、コメントよろしく

夢と苦悩

「・・・・・・ルラ」

「・・・・・・カルラ・・・」

誰かに呼ばれた気がした。

俺はゆっくりと目を開ける。目の前は真っ白で何もない世界。どこか見覚えのある場所だと感じた。

この世界に初めて来たときの世界だ。

なぜこんなところにいるのだろう？

もしかして俺はもう死んでしまったのだろうか？

全く定まらない思考。

「・・・・カルラ」

また名前を呼ばれた。

誰だろう？この声の主は誰だろう？

俺はこの声を知っているような気がする。この優しい音を聞いたことがある気がする。

思い出せ、思い出さなくてはいけないんだ。

俺ははっきりしない意思の中で言い聞かせる。

思い出せなくなったら、俺は自分を許せない。俺の命よりも大切な何か・・・俺の命をを守ってくれた誰か・・・。

黒髪で肌の色は透き通るような白色。目は二重で、細い眉毛は凛としている。鼻は高く、柔らかい唇。そう、俺はあの人にキスされたんだった。大丈夫覚えている。

だけど・・・・これは、ありえない。

自分の事を恨んでいるはず、でもあの声の音はすごく優しかった。

ここは俺の妄想の世界だ。自分の都合のいいように書き換えられ

て、自分のいいようにしかならない世界。なんの痛みも、なんの悲しみも、なんの怒りも、なんの憎しみも、なんの恐怖もない世界・・・・。

吐き気がする。

自分がこんな世界を作り出したことに、自分がこんな世界を望んでいたことに。

醜く、情けなく、そして、弱い。

そんな自分が嫌で吐き気がする。

あまりにも弱く、逃げてばかりいる。ついには現実逃避か・・・・。

「・・・あなたは弱くないわ」

また声がした。さっきよりも近くで。

なんて優しい声だろう。なんて暖かい声だろう。

甘えたい、泣きたい、自分の本性が晒されていく。

妄想の世界でも強くいられないとは、本当に呆れる。

「・・・大丈夫」

甘い香りがする。暖かい感触がある。とてつもなく大きな何かに包まれている気がする。

周りには誰もいないのに・・・・。

「・・・・俺は、何も守れなかった」

なんて怯えた声だろう。こんな妄想早く終わってしまえばいい。

なんで終わってくれないんだろう。

「いいえ」

「俺は守れなかった・・・・・俺は守られたのに・・・・・助けられたのに・・・・・俺があの時死ねばよかったのに・・・・」

あの人は自分の命を犠牲にして、俺たちを、俺を助けてくれた。

「いいえ、私が守ったのは私自身よ」

「・・・・」

全く意味が分からない。妄想の中なのに分からない。遂に頭も壊れてしまったのか・・・・。

「私は、あなたを守ることによって自分が救われようとしたの、そ

の後にあなた、カルラがどんな苦しみを負うかもわかっていて。
私は、自分の心が救われるために、ああしたの。私の方が弱かったから」
違う。君は自分が守ろうと決めたものを守った。それはすごいことで、俺には出来ない事で、他人の事を考えた行動じゃないのか？
声に出そうとしたが、全くどんな音も出なかった。口を塞がれているわけではない、心がふさがれている。そんな感覚だ。
「私はあの時、誓ったわ。あなたの命を守ると。
でもあのちびっこも守りたかった。私のわがままね」
笑っている。姿は見えないが分かった。
声が出せない・・・・。
ダメだ。このままじゃダメなんだ！！
「わがままなんかじゃない！！だってあなたは守れたじゃないか、俺もフイクも！！」
俺は叫ぶ。近くにいるのに声が届かないような気がした。
ふわりと優しい風が吹いた。
「そうね、自分の命を捨ててね。
それは残る人たちの意思を捻じ曲げたものよ」
そこで一息置いてさらに続ける。
「死んだ人間は何も考えなくていい。
でも残った人間は後悔する。私はそれも怖かったのかもしれない。
人に嫌われて、後悔するのが嫌だった。
だからあの選択をした。心の弱いところがそうしたいと言っていたから。
カルラ。あなたは強い人間よ。私より、全ての人間より、目を見ればすぐに分かったわ。だから、自分を責めてほしくない。全ての責任は私にあるのだから」
そんな訳がない。
俺より強い人間なんて、たくさんいる。
どんな人が強いのかもわからない。

そう考えた瞬間気温が引くなった。
自分は本当に弱く、周りの人は自分を置いて行ってしまうような感覚である。
「今はまだ弱いかもしれない、でもあなたは今よりももっと大きくなれる。あなたにはそれだけの器があるのだから。
それにあの子、フイク君もそれなりにいい男になりそうね。私の妹と仲良くなれそう・・・。
カルラ・・・」
名前を呼ばれた瞬間悪寒が去った。
柔らかい感覚が体を抱く。徐々に力が加わっていった。不快な強さじゃない。素直に心地いい包容力だ。
「もうすこし、がんばってみるよ」
言い終わってから自分が何を言ったのか分かった。
俺は目を閉じる。暖かな感触を出来るだけ感じれるように・・・。

真っ白な世界。誰かがいる。目を開けなくても分かる。いや、目を開けたら消えるような気がする。
俺は抱くように腕で円を作った。たしかな感触が感じられる。
「がんばれ」
励ましの言葉の次に唇に柔らかい感触があった。ちょんと、触れるぐらいに短いキス。
・・・・ありがとう、レイス。
心の中でそう呟くと俺の意識は途切れた。

俺はベッドから起き上がった。
夢を見ていた気がする、とても大事な夢を。でも思い出せない、記憶がすっぽりと抜けているようだ。
気持ちが清々しい。いい夢を見たのかもしれない。
俺は部屋を出る。時間は朝の九時。寝ていたのはほんの三時間程

度なんので、本当はもう少し寝ていたい。階段を下りて、パンと牛乳を買う。半日は何も食べていなかったので、腹がすいていた。
三つの長テーブルに座ってパンをかじる。すると、横から声をかけられた。
「前の席いい？」
別に断る理由がないので俺は軽く頷く。
ほかにも席が空いていたと思うが、俺に用だろうか・・・。
「もう行くの？」
前を見ると、レイナがいた。
口調が少し崩れていたから、全然気付かなかった。普通声で気づくはずだが、そこは忍術を使われたのかもしれない・・・。
と、そんな事を考えていると、
「そんなんじゃないですよ。カルラさんがぼーっとしていただけ」
レイナはニッコリと笑みを作る。レイスとそっくりな笑い方だ。昨日は気にしなかったが、この子もかなりの美少女だろう。
レイスは美しいという形容がよく合うが、レイナは可愛いという形容がよく合う。
「もう、ここには用はないしな」
俺はパンを口に詰め込み、牛乳で流すと立ち上がった。
「あの子はどうするの？」
「フイクはお前が面倒を見てくれないか？
メッセージも残しておいたから」
素っ気なく答えると俺は歩き出す。
「ま、待ってよ。
面倒ってどういうことよ」
がしっと腕を掴まれて足が止まってしまう。別に無理に行こうと思えば行けると思うが、そんなことをするほど情がないわけでもない。
「レイナがレイスの妹なら、剣も少しは出来るだろ？」
真剣なまなざしでコクコクと頷くレイナ。そんなに興味津々に聞

くような話ではないと思うが。
「それであいつに剣を教えてやってほしい。危なっかしくて敵わない」
俺はそう言ってひらひらと手を振った。言ったことは事実で、嘘なんか一つもついていない。それなのにレイナの顔は真っ赤だ。そんなに嫌だったのだろうか？
「フ、フイク君の面倒を私が・・・・・。
わ、分かった・・・。
でもカルラさんも無理しないでよ」
意外とＯＫが出た。
「ああ、それとカルラでいい。
何かあったらすぐ呼んでくれ」
そう言うと今度こそ出口に向かって歩く。
「無茶しないでねー！！」
後ろから声が聞こえたので、俺は片手をあげて答えた。

俺一旦グランゼルに戻ることにした。
ポルを開いてスキル画面に進む。
祠からパレンドに戻る途中でレベルが上がっていたことを、思い出したのだ。
スキルポイント全てを暗視に振る。夜、ろくに動けないのは厳しい。それに一晩歩き回っても暗視のスキルポイントは二しか伸びていなかったので、自然上昇は宛にならないと思ったのだ。
次にクエストの画面に進む。
クエスト報酬を受け取る、というメッセージをクリックすると、大量のベルと装備が二つもらえた。
一つの装備はクエスト自体の報酬。今装備しているものよりも数段はグレードの高いグローブ。手の甲の所には金属製の板が入っていて、攻守ともに使えるそうだ。

もう一つは、全プレイヤーの中で一番最初にクエストをクリアしたという事でもらえたブレスレッドだ。
ポルを使って実体化する。銀色のアンティークなそれは、ギラギラと輝いていた。
装備は自分のポルから出すと、自分に合う大きさになる。武器は基本的に対象外だが。
腕にフィットするブレスレッド。能力もすごくいいものだった。敏捷値が自分の敏捷値の十分の一上がるという効果だ。
もともとの敏捷値が高くないとあまり意味ないが、俺はスピード型だったので、すごく相性のいいアイテムである。
フイクとレイスにも同じものが渡ったのだろうか？
そう思っていると、メールが届いた。
誰からだ？と受信ボックスを開く。そこには十通近くのメールがあった。ほとんどがこの世界の説明のようなものである。どうやら、今まで通信不良のようなものが起きていたらしい。最後から二番目のメールが謝罪メールだった。正直どうでもいいが。
しかし最後の一件はレイスからのものであった。本文は「これあげる」だけである。その下にはプレゼントボックスのアイコン。
なんだろうと思って、そのアイコンをタッチする。
ぱっと、箱が開くアニメーションが流れて中に入っていたものが表示される。そこにはレイスの分のクエストの報酬があった。
いつ、どうやってやったのか全然わからなかった。それをこれから知るすべもない。
レイスへの罪悪感はあった。あおの気持ちだけだったら、受け取れなかっただろう。でも、今は感謝の気持ちが罪悪感に勝るぐらいあった。寝る前の自分とは全く違うことに自分でも驚くが、ここで立ち止まっていてはいけないのも確かだ。
俺はその報酬を素直に受け取る。
ベルとブレスレッドは同じだったが、装備が違っていた。レイスのはグローブではなくて、靴であった。今俺が履いている靴とほと

んど一緒なデザイン。
しかし、非常に軽く、それでいて、防御力も高い。靴底にはもちろん金属の板が、着けられていた。今までの靴は銀色の金属板だったが、この靴は、黒光りした見たこともないような金属だった。なにか特殊な素材なのだろうか？それともこの世界にある、俺の知らない種類の金属なのだろうか？
俺は装備を入れ替えて、早々に村を出た。急ぎの理由は別にないが、早めに剣を買い替えたかったのだ。

森を抜けて、草原に出る。
何組かのパーティーが森に向かって進んでいた。ほぼすべてのプレイヤーが集団で動いている。ソロの俺はさぞ珍しいことだろう。
びくびくと必要以上に周りを警戒しているプレイヤーたち。この草原にはモンスターはほんの少ししかわかない。こんな調子ではこれから先どれだけの人間が生き残れるだろう・・・。
俺はぶんぶんと頭を振ってネガティブな思考を振り払う。
そんなことは俺が気にすることじゃない。少しでも早く、このゲームをクリアすればいいだけの話だ。
俺は密かに決心して、また走り出した。

数分もすれば、グランゼルの門の前まで来た。最初にパレンドに向かって森に走ったときよりも二倍ぐらい早い。
俊敏値が上がったのと、この世界での動きにもだんだんと慣れてきたせいだろう。現実の世界よりも体が軽いので、跳ぶように走ったほうが速い。
こういった経験もこれから必要になってくるはずである。
俺は門をくぐってすぐに武器屋に行く。

ＮＰＣの武器屋は、何度買っても商品が無くならない。その代り、

プレイヤーメイドの品よりも能力で劣る。しかし、現時点でそこまでのスキルを持ったプレイヤーがいるはずもない。
俺は背中の剣と同じもの二本買った。ついでにボロボロの剣は処分する。処分にも手数料がかかるとは初耳だったので、騙されているのかと思ってＮＰＣを睨みつけてしまったほどだ。まあ、すぐに嘘ではないと気づいたので、ＮＰＣに嫌われるようなことはなかったが。
俺はすぐに武器屋から出て、道具屋へ向かう。
道具屋へ入ると、薬品の匂いと、骨董品のような古臭い匂いのまじった匂いがした。別にくさいわけではないが、独特の匂いだ。慣れるまで少しきついかもしれない。
俺は回復薬をたくさん買い込み、ポルに詰め込んでいく。麻痺ポーションや毒消しポーションも少し買った。
麻痺も毒も時間が経てば消えるが、即効性のあるポーションを持っていると絶対に役に立つはずだ。実際、ソロで麻痺にかかったりしてポーションがなかったら命取りだ。
レベルの高い麻痺を長時間受けると一切動けないらしいが、そんな状態になっている時点でもうアウトだろう。
それに、またあんなことがいつ起きるか分からない。
俺は他にも、ロープ他数点の非常用の道具を買った。お金の心配はない。まだ何万ベルもある。
俺は道具屋を出ると、お腹がすいていることに気付いた。朝食は少なかったし、時間も三時間ほどたっている。もうすぐお昼だし、いい頃合いだろう。
俺はポルを出して、レストランを探した。

見つけたのはおしゃれなファミレスのような店だった。
結構な賑わいを見せている。
こんなにたくさんのプレイヤーを見たのはいつ以来だろう。
俺は店に入って案内役のＮＰＣについていく。料理のメニューは

数種類しかなかった。ミートソーススパゲッティ、グラタン、ハンバーグ、カレーだけだ。
いくらなんでも少なすぎると思う。
俺はミートソーススパゲッティを頼んで、ぼーっとしながら料理を待った。
数分もすれば、パスタを持ったＮＰＣが現れた。俺はついでにＮＰＣにコーヒーも注文した。「かしこまりました」とにっこり笑って歩いていく。
本当に人間のようだ。
そんなことを思いながらミートソーススパスタを食べた。味は悪くない。だけど、どこか物足りないような気がする。割と安い店だからと納得しておくが、全ての店がこんな料理だったら、数日で飽きてしまいそうだ。
腹はすいていたので、綺麗に残さず食べきった。俺はコーヒーを口に含みながら、店の中を見渡す。
ほとんどの客が一人である。その目には不安が見え隠れしている。未だに、割り切れずにオロオロとしているのだろう。数人のグループで食べている連中は防具を装備して、これからの事を話し合っているようだ。
「ふー」と息をつきながら、立ち上がった。
ウエイトレス役のＮＰＣにポルを出す。ＮＰＣはポルに手をかざして、一瞬動きが止まった。チャリンという効果音がして、お金を払ったことを確認する。
「ごちそうさま」
一応礼を言って店を出た。ＮＰＣも一礼して、仕事に戻っていった。
俺は途中の市場で、腐りにくい食べ物と水を買った。腐りにくいとは、耐久値が高い食べ物である。

今から行くところへは歩いて六時間以上かかる筈だ。念には念をである。
市場には、いろいろな食材が売られていて、活気がある。活気があると言っても、プレイヤーはほとんどいない。ＮＰＣの定員が「いらっしゃい」等と声を上げているのが、聞こえるだけだ。
他に必要なものはないなと確認して、市場を出た。市場と北門は近く、開いていないと知りながらも一度寄ってみた。
南門と同じような大きさで、完全に閉まりきっているそれはすごい威圧感を持っている。
俺は数秒間は絶句して、見上げ続けていた。
本当にすごい世界である。
「本当になんなんだろう」
この世界で死ぬと、現実の世界でも死ぬ。そして、ゲームをクリアすれば出られる。俺たちはデータを取るためにこの世界に集められたのだという。
理屈は分かる。
それ故に謎だった。
何が謎かは自分でも分からない。なにか腑に落ちないことがあった。
・・・・それにレイスも・・・・。
いや、誰かのせいにするのは辞めよう。結局同じことだから。
「・・・・行こう」
俺は呟くと、身をひるがえして南門へ向かった。

三つ目の街とギルド

「はぁ・・・はぁ・・・」

剣をだらりと下げて力を入れずに構える。構えに力を使えるほど体力がないというのが本音だが。

俺は今、パレンドよりさらに南西に位置している≪フイゼル≫という町に向かっている。既にパレンドのある森は越えた。パレンドには気まずいという理由で寄らなかったのだが、それは失敗だったと今更悔やんでいる。

「シュルー・・・」

蛇型のモンスターが舌を震わせながら、威嚇をしている。

今いるのは特に遮蔽物の無い草原なのだが、現在の時間は夜の十一時なのだ。暗視のスキルが少し上がったと言って、いきなり鮮明に見えたりはしない。

しかも、今対峙しているモンスターは細く、動きが速いモンスターで攻撃が当てずらい。すでにグランゼルを出てから、九時間が経っている。

実際はもう少し早く着く予定だったのだが、モンスターの強さがこれまでとは格段に強くなっている。

一撃で仕留められないのはもちらんだが、攻撃とそのタイミングが嫌なところをついてくるのだ。流石に無暗には突っ込めない。

俺はひたすら集中力を高めて、相手の動きを覗う。地面をスルスルと移動していき、一瞬でトップスピードになり、口を大きく開けて飛びついてくる。

その牙には毒性の液体が付着しており、掠るだけで結構なダメージを受けてしまう。もろに噛みつかれたりしない限り毒を受けないが、十分に脅威だ。

俺はその攻撃を体をそらせて躱し、両手で剣を振り上げる。長剣

は蛇の腹に当たり、蛇を大きく飛ばす。これで、三セット目だ。約四セットで今のモンスターは倒せる。しかし、その四セットは正直きつい。

これまで、何種類というモンスターと戦ってきたが、ボス系のモンスター以外で、この蛇型モンスターが一番手強い。

「シャー！！」

蛇は怒りの声を上げて、さらにスピードの乗った攻撃を繰り出してくる。ただその攻撃は単純だった。俺は余裕をもってその攻撃を躱して、体重を乗せた一撃をお見舞いしてやる。

蛇は呻き声をあげながらポリゴンとなった。

俺は周りを見回して敵がいないことを確認してその場に座り込んだ。普通はフィードで休憩するのはよくないが、今はそんなこと言っていられないぐらい疲れていた。

ポルを取り出して残りの距離を確かめる。

九時間歩いて約五分の四ほど進んだ。

「はぁ・・・」

ため息が出るくらいゆっくりなペースだ。グランゼルの南の草原や、パレンドのある森は比較的進みやすかったということだろうか。平地なのに、全く進まないとはどうしたものだろう。

俺は市場で買っておいた、乾燥した果物とチョコレートを取り出した。すでにほとんどの食料は消費してしまった。水も残り一リットルもない。

重量制限最大近くまで詰め込んだが、それでも少し足りない。

荷物の限界重量を決めるのは、筋力値と限界重量増加スキルというスキルだ。限界と言ってもそれ以上持てない訳ではない。ただし、限界重量以上のものをポルに入れた場合、それなりのウェイトを背負うこととなる。それもはみ出した分の重量ということではない。その何倍かの重さがペナルティとなる。

重さは動きに大きく影響してくるので基本的に、限界重量内に抑える。限界重量内なら多くても少なくても言うほど変わらない。

限界重量以外にも限界装備重量というのもあるが、軽装の俺にはほとんど関係ない。とは言えないのだ。限界装備重量が空いている場合、限界重量が増えるのだ。ただし逆の場合はなんの変化もない。ちなみに限界装備重量を決めるのは筋力値だけだ。

結局アイテムは極力ポルにしまっておいたほうがよいのだが、装備や非常事態用のポーション、投擲スキル用の飛び道具などは表に出しておいた方がいい。

ただし、身に着けないアイテム。今の場合なら、水や食料は表に出していても、装備重量には計算されない。まぁ当然と言えば当然だが。

俺はあまり筋力値が低いわけではないが、遠征にはパーティーの方が随分と楽になる。パーティーの場合、荷物の分担ができるので攻撃部隊と補給部隊に分けることが出来るのだ。

今更ソロになったことに後悔するが、これからもグループで行動すること基本的にはないだろう。

ふとそんなことを考えなら、空を見上げた。

周りに明りが全くと言っていいほどないので、星がきれいに見える。地球から見えるような星空ではない。今この世界は四月の終盤なので、地球ならしし座やおとめ座が見えるはずだが、全く見当たらないのだ。

どこから空を見上げたのかで、星の位置も変わるが、この星空は地球から見たのでは見えないだろう。それくらいに綺麗だった。

―――周りの警戒を失うほどに。

気付いた時にはすでに噛みつかれていた。毒が体に侵入してくる。体が自分のものじゃないように感じる。体感的には二倍以上の体重だ。

毒の種類は様々だが、この蛇の毒の効果はどうやら体の動きを鈍くするものだろう。システム的に言うと、筋力と俊敏値が大幅に減

少しているといった感じだろうか。
俺は背中の鞘から長剣を取り出し、左手一本で構える。右手はポケットから解毒ポーションを取り出してふたを外し、口に傾けた。
ありえないくらいまずいその味は、強烈に苦い牛乳のような味だ。一度飲んだら二度と忘れられないぐらいのまずさだ。
今はそのまずさが体の疲労を忘れさせてくれた。
重力が一気に半減したような感覚と同時に集中力も一気に高まる。
敵は二体いるようだ。
今まで一匹ずつしか現れなかったので、単体での行動しかしないと思っていたのは誤算だったようだ。
「チッ」と舌打ちして、敵から間合いを取る。はさまれたら厄介だ。
一匹が誘われたようにスルスルと滑って来た。俺は一匹に牽制の意で腰に差してあるナイフを投げつけた。スキルはろくに上がっていないので命中率、攻撃力共に皆無だ。
狙いはダメージじゃないので今は構わない。
負ってきている方じゃない蛇は、ナイフを避け大回りしながら俺の背後を取るために移動を開始した。こっちの投擲を警戒している。今の投擲は十分に役目を果たしてくれたようだ。
俺は急停止して、追ってきている蛇に向かってダッシュもとい跳んだ。一気に距離が縮み、蛇が牙を剥き出しにして襲い掛かってくる。剣先を蛇の口に合わせて突きを放つ。
あまりのスピードに狙いがずれたが、かなりのダメージを受けた様子である。突きの衝撃で、横に逸れた蛇は奇妙に動き回っている。
俺はその隙を逃さず、剣を振り下ろした。
たった二発で最初の蛇を撃破する。余裕で最速撃破タイムを更新しただろう。
俺は背後から迫ってきている、蛇に視線を向けた。しかし、そこにそいつはいなかった。
ッ見失った！！

辺りを見渡すが、真っ暗で分かりずらい。流石に二匹同時に気を使うような真似はできなかった。俺は索敵スキルと自分の感覚をフルで使って、敵を探す。

数秒の沈黙が破られて、先に動いたのは蛇だった。

すでに攻撃射程距離まで接近していた蛇は、いきなり突撃してきた。だが、俺はすでに蛇の居場所が分かっていたので、冷静に対応した。

俺は今まで通り、ギリギリのタイミングと距離で攻撃を躱す。そしてカウンターの一撃。

蛇は体勢を立て直すために後方に引いていく。俺は無暗に突撃はせずにじっと相手を見る。蛇は大きく一回転し、また攻撃を仕掛けてきた。

ただし今度の攻撃は飛びついてくるのではなく、足元への低い攻撃だ。こちらの攻撃が当てずらいと思ったのだろう。しかし、それは勘違いである。

俺はジャンプしてその攻撃を躱して、がら空きの脳天描けて、剣を突き刺した。地面まで届いたその剣は、蛇の頭を二つに割っていた。

蛇はポリゴンとなって消滅し、俺は安堵の息をついた。

あまりじっとしてはいられない。そう考えてすぐに歩き出した。

投擲で使ったナイフは、ポルを操作すれば手元に戻ってくる。そんなに簡単なら多用すればいいと思うだろうが、飛び道具を手元に戻すにはベルが必要なのである。

なので、自分で拾えるものは自分で拾う。

ただし今は、暗く、動かない小さいものを見つけるのは至難の業である。もはや運便りだ。

なので、俺はポルを使ったわけだが、予想以上にベルの消費が激しかった。

ちょっとした脱力感を味わいながらも足を動かし続けた。

二匹同時に蛇が現れた後にはモンスターの出現率が減って、あれから一時間程度もすれば目的地に着いた。
港町≪フイゼル≫。
どうやら町の南西は海が広がっているらしい。そしてここには教会という施設がある。
協会ではギルドを作ることが出来る。
ギルドのメリットは、ギルドメンバーが活躍する――具体的にはレベルアップしたり、クエストをクリアしたりなどだ――とギルドマネーが増える。ギルドマネーはベルに両替することが可能。逆もしかり。
また、ギルドマネーには一ヶ月に一回利子をもらえることが出来る。まあ、銀行のようなものだ。両替は教会でのみ実行可能というのが決まり。
他にも、ギルドマネーでギルドハウスや、ギルドコスチュームなどのギルド運営に関する、買い物も可能だ。
デメリットは特にない。強いて言うならば、ブランドのようなものがつくことだ。
ギルドの評価が高いと、そこに入っている人の評価も高くなる。逆に、有名ギルドに入っていないと、その人物の評価は低くなる。
一般社会でも同じことが言える。有名企業に入社すれば、その人物の評価は高い。中小企業では才能のある人でも評価は思うように上がらないのだ。
全く、不条理である。
まあ、俺はソロなのだから、そこまで深く考えなくてもいいのだが、ギルドを作っておいて損はないだろう。
と、

一人でいろいろと考えながら歩いていたら、自然と教会の前まで来ていた。
この町の大きさはグランゼルまでの規模はないが、それなりに大きい。港町なので、漁業が盛んで魚料理がおいしいらしい。
これは途中で売っていたこの町のパンフレットようなものの情報だ。それなりに自信があるのだろう。暇があれば食べてみたいところだ。
今は真夜中なのでお店はやっていないが、教会は開いているとの事だ。
俺は重々しい扉を開けて教会に入った。
中は蝋燭の光だけで照らされていて、神秘的な空間を演出している。窓全てにきれいな装飾が施されている。
俺は唖然とその光景を目に焼き付けながらも、歩を進めた。
何脚もの長椅子が横に並んでおり、軽く三十メートルは椅子だけで埋まっている。さらにその五メートルほど奥には幅三メールはある祭壇があった。
祭壇と言っても、割と簡単な作りで、木でできたそれを白く塗って少し彫ってある程度のものだ。彫刻も結構見事なものだが。
その向こうにはＮＰＣと思しき人物がったっていた。
教会の神父さんをとはこういう人の事を言うのだろう。
温厚そうな優しい顔立ちに、真っ黒なローブを着て、首からはペンダントを下げている。十字架ではない。宗教的な縛りはないのだろうか？
よく分からないところだ。
祭壇の前まで来たところで、神父さんが口を開いた。
「こんにちは」
軽く微笑まれる。
「どうも」
「何のご用でしょう」
積極的なＮＰＣである。

「ギルドを作りたいんですけど」
俺が言うと同時に祭壇の表面にパネルが出てきた。もはや教会とは言えない。
神父が喋らなくなったところを見るとこれで操作しろということだろう。
いろいろな注意事項が表示してあるが、もともと知っているものばかりだ。軽く流しておくことにする。
まず一個目の設定で躓いた。ギルド名である。
全く考えていなかった。
その手のネーミングセンスに自信のない俺は散々頭を悩ませたが、全くと言っていいほど案は浮かばない。
フイクかレイナにメールを送ろうか考えたほどだ。
教会の中を歩き回りながら考える。
ふと、レイスの名前が浮かんだ。まあ、人の名前をギルド名にしてもかまわないだろう。ただ、少し気恥ずかしい。
俺はちょっと頭をひねり『ゼロス』という名前にした。
フイクやレイナにはたぶん気が付かれるだろう。ほかの人はレイスを知らないと思うから。どうでもいいが。
他の設定も終えるころには、もう明け方になっていた。
どうやらギルドを作ったのも初めてのようだ。というより、この町に来たのが俺が最初かもしれない。
苦笑して教会を出た。
約二日間で三時間しか寝ていないから、かなり眠い。
俺はふらつく足をどうにか動かして、宿屋に向かう。
プレイヤーは誰もいない。明け方なのだから人通りは少ないと思ったが、本当に最初に来たのかもしれない。なにかと最初ばかりだ。
宿屋に着くころには完全に日は出ていた。
俺は倒れ込むように部屋に入る。今日はもうシャワーを浴びる元気も残っていない。俺はそのままベットに突っ伏した。

歩くため

フイゼルを出てから二時間。今俺はクエスト達成のためにとあるダンジョンに向かっている。

フイゼルの東、グランゼルの南にある湖。その湖の少し南に山がある。山と言ってもいうほど高いものではなく、歩いて越えられるレベルだ。その山の山頂付近にそのダンジョンはある。

未だに山のふもとにすらついていない。改めてこのマップの広さに驚愕する。

山頂に着くのはいつになることやら。

すでに何度もモンスターとエンカウントして、それなりに戦闘を行ったがまだ疲労はない。フイゼルの宿屋で丸一日以上眠ってしまったのだ。

遠征の準備を整えている間に数人のプレイヤーにも出会った。

中にはパレンドで出会ったおっさん三人組もいてギルドに誘われたが、やんわりと断った。おっさんたちもいろいろ聞こうとはせずにいてくれた。ほっとかれる優しさというのも温かいものだと思った。

そんなわけで今もソロなのだが、一人の以上自分の強さを把握しつつ、向上を目指さなければならない。

誰かを守れるぐらいの強さ。

今目指しているのはそんな曖昧な目標だ。

とりあえず強さにはいろいろとあるものの、この世界での単純な強さ、ステータスの高さは今のところ最優先事項である。ということで今俺は武器取得クエストを受けている。

決められたモンスターを一定の時間以内に一定以上の数倒す。最初は簡単なクエストだと思ったが、まず最初にこれはきついと思ったのが、その指定されたモンスターがさっきいったダンジョンでしか出ないイベントモンスターであるということだった。

次に驚かされたのがそのノルマの高さ。
三十分以内に三十体。
まだモンスターの強さが分からない。とは言えるもののはっきり言って一分に一匹のモンスターを倒すというのは無理ではないかと思う。
ノルマ的にうじゃうじゃとモンスターが沸いてくれないと困るのだが、しかしそれは自分の命が危険にさらされるということだ。
今回はそんな命がけの戦闘を望んだというのもあるが、危険だと感じたら逃げると最初から決めている。
こんなところで命を落とすのは自暴自棄になっているだけだ。
ということで今回のクエストは半分あきらめてる感がある。

やっと山のふもとに着いた俺は絶句している。
遠くから見た時は分からなかったが、思った以上に山登りは困難を極めるらしい。
まず、傾斜が急だ。全体的に急なのではなく、平らな部分と急な部分がしっかりと分かれている。これはプレイヤーにとって有利なのか不利なのかはいまいち分からない。
次に足場が悪い。ゴロゴロした石が一面に広がっていて、ものすごく歩きにくい。走ることは不可能に近意と思われる。
最後に霧がかかっていて前が見えない。まあ見えないと言っても、先十メートルほどは見える。だからと言って周りが見にくいことに変わりはない。夜よりはましだろが。
「登ろう」
呟くとなんとも虚しいものが心に広がった。

夜になった。暗視スキルはかなり上がっているので割と見えるようになっている。レベルアップ時のスキルポイントをほとんど暗視

に振っているので、これぐらいの進歩がないとやっていられない。
モンスターの数は思ったより多くなく、いいペースで進んでいるように思っていたのだが、頂上はまだまだ遠い。傾斜になっていることで思っているよりも進んでいないのだろう。
徐々に疲労も溜まってきていて内心焦っていた。なんせここら辺には村や町と言った場所がないのだ。
焦りはさらなる疲労を生み、その疲労はさらなる焦りを生む。こんな悪循環が出来ていた。
引き返そうと内心思っていたところで、進むことに軽い抵抗を覚えた。
ポルを見ると自分がセーフティーゾーンに入っていることが分かった。フィールドにランダムに配置されている安置だろう。
ポルを使って安置の場所を登録しておいた。今日のところはここで休もうと思い、ポルから一つの寝袋を取り出した。
テント系のアイテムも買えないことはなかったのだが、容量が大きすぎて邪魔になったので軽い寝袋にした。一応一番高いものを選んだので軽いながらものすごく中は暖かかった。
ポルからパンとベーコン、卵を取り出して、それを火であぶる。火はそこら辺にあった枝にマッチで火をつけたもので、体を温めるには心許ないが食べ物を温めるには十分だった。
フライパンとは名ばかりの鉄板にちいさな取っ手の付いた板に、薄く切ったベーコンを乗せる。ジューという音とおいしそうな匂いが空腹をさらに刺激する。
ベーコンが軽く焼けるとその上に卵を落とす。卵が半熟になったらそれをフランスパンのような硬めのパンを三センチほどに切ったものに乗せる。
俺はそれにかぶりついてもしゃもしゃと咀嚼した。
空腹がひどかったので、今なら何を食べてもおいしいと感じると思うが、このベーコンエッグのせフランスパンは素晴らしくおいしかった。

食べ終わるとふーと息をついて、水を飲んだ。喉も潤い食欲は満たされた。
音のない世界で、たった一人だけ。寂しいという気持ちはなかった。なぜか心地よい感じさえしていた。元の世界にいたころから割と一人で好きだったことは認めるが、一匹狼のような性格でもなかったと思っていたので、少し驚いた。
俺は体半分だけ入っていた寝袋に全身を入れる。空に映る星空はとてもきれいに見えた。上空には霧が出ていないらしい。
「・・・・」
この世界の星は本当にきれいだと思う。
一個一個の星が自己主張するようにいろいろな色で輝いている。特に目を引かれたのが小さいながら特に強い光で輝いている一つの青い星だった。
力強く、優しく輝くその星の光は俺の体を抱いてくれているような気がした。
そして俺は、意識することなく深い眠りについた。

翌朝、六時に俺は目覚めた。
俺はそこらへんに散らかっていたアイテムをすべてポルに仕舞ってから、大きく伸びをした。疲労はきれいに抜けて、体が軽くなった。
昨日は気付かなかったが、ここは空気もきれいなようだ。
大きく深呼吸して、空気の味を存分に堪能する。
この世界はすごく澄んでいる。それが今の感想。空気も、水も、食べ物も、全てがきれいで何もかもが愛しく感じる。
自分は自然がこんなに好きだったのかと不思議な気持ちがした。元の世界ではこんな事感じたことは無かった。純粋にこの世界が好きなのかもしれないなと自嘲気味に笑った。
嫌いなのか、好きなのか分からない世界。

俺は装備を整えつつ、そんな事を考えていた。

安置から出ると、自然に緊張感が出てきた。霧は昨日以上に濃いように見える。

今はちょうど、山の中腹あたり。がんばれば昼過ぎには山頂に着くと思う。

俺は背中に収まっている長剣を意識しつつ、歩き始めた。

意識は、周りの状況と足元に注意しつつ、目だけはずっと前に向けていた。意識はしていなかったが、この山を登り始めて一度も後ろに振り返ったことはなかった。

モンスターもほとんどが前か横から現れたし、別に背後を気にするようなことは何もなかったのだが、今思うと何故後ろを見ていなかいのだろうということを疑問に思った。今も別に後ろを向いていいのだが、なぜか振り向きたくないと心から思った。

妙な威圧感というか、気にするほどのものではないのだが、そんな感じのものが背後から感じられた。殺気のような感じではないのでモンスターではないと思うが、居心地が悪いというのに変わりはない。今まで気が付かなかったのも不自然だ。

俺は少し歩くスピードを速めつつ、山頂を目指した。

途中で何度かモンスターと接触して、背後からの威圧感の事も忘れたころ、ついに山頂にたどり着いた。予定より少し遅れたが、山を登りきったという達成感が半端じゃなかった。

山頂には小屋のようなものがあり、その周りは安置となっていた。

俺は軽い休憩がてらその小屋に入った。

季節は春だが、標高が高い分だけ気温が低く割と寒かったので、風をしのげるこの小屋は随分とうれしいものだった。

俺は昼食と休憩を取って小屋を出る。

装備の耐久度はかなり消耗していた。防具はダメージをあまり受けていないので言うほどでもないが、武器、持ってきていていた長

剣二振りはそろそろ限界が近づいていた。攻撃力も切れ味も落ちている。自分で軽く砥いではみたものの、研磨スキルなど上げていないので、刃が削れて耐久度はより一層低くなってしまった。まあ、少し切れ味が戻ったのでプラスマイナスゼロといった感じだ。

俺は耐久値が低い方を装備して、ダンジョンに向かった。

背後からの威圧感はなくなっており、あれ？と訝しげな気持ちになったが、あるよりないほうがいいと思い、気にすることなくダンジョンに入った。

山頂にある洞窟から徐々に下に降りるタイプのダンジョンで、なかなか入り組んでいた。

モンスターの出現頻度も山道とは比べ物にならないほど多く、ＨＰ消耗も激しかった。その分経験値の増加も早いので、気付けばレベルは八になっていた。全てを暗視に振ったので、暗視のスキルポイントはすでに五十を超えていた。

洞窟内部はかなり薄暗いので、暗視スキルは予想以上に役に立った。

ダンジョンは行ったことの無い道はマップに出ることはなく、自分の足でマッピングするしかない。

マップが無いというのはなかなか手強く、ダンジョンの攻略は難しいと分かった。

クエストの指定のモンスターはかなり、下のフロアにいるらしく、いまだに姿を現さない。俺は下に行くことより、各フロアを完全にマッピングしながら進んだ。フロアの大きさはそれほどないとしも、入り組んだ道なので距離は長くなり、その分モンスターと遭遇する頻度は増えたが、自分の無駄なところに几帳面な性格が、未踏破のマップを残して下の層に行くことを許さなかった。

時間と労力はかかるものの、それに見合った十分な報酬はあった。ありがちな設定だが、宝箱だ。中にはいろいろと貴重なアイテム、ＮＰＣショップでは売っていないようなアイテムがいろいろとあった。

特にうれしかったのが、ＨＰ回復アイテムだ。
かなりの数の回復ポーションを持ってきていたが、それも半分以上なくなっていたので、本当にありがたかった。
しかも、ただのＨＰ回復ポーションではなく、体の疲労も回復するポーションや、回復量と回復スピードが多いポーションなど、どれも今売っているポーションよりもグレードが高いと分かるものだった。
まあ、そういうアイテムはもったいなくて使いたくないという思考が働いてしまって結局あまり役に立たないのだが、非常時にはためらうことなく使おうと苦笑しながら、ポルに仕舞った。
たまに宝箱でもトラップが仕掛けてあり、不用意にそれを開けるとモンスターが出現したりした。しかもそういう宝箱は開けてもまた閉まって、トラップとしてその場にとどまり続けるのだ。
間違えないようにポルでトラップの位置を分かるようにすることが出来るのだが、非常に厄介な仕掛けである。ちなみにアイテムが入っていた宝箱は一度開くと開いたままでその場に残る。ただ、その場に放置されるだけではなく、時間が経つと勝手に閉まり、また宝箱としての役目を果たす。その際出るアイテムは、最初に出したアイテムよりもグレードが落ちる仕様になっているので、一度あけられた宝箱はそれほど価値がない。
単純に早い者勝ちだ。クエストもそうだが、この世界は走り出した時間、それだけで、その時間の差だけですでに強さの差が出来ている。
ただし、前を走る者がなんの対価もなしに甘い蜜を吸っているわけではない。
他よりも先というのは、他よりも危険が多いと言うことだ。情報が回ったあとには準備もそれに合わせられるし、なによりも気持ちの持ち方が全然違う。
だれもやったことないこと、行ったことの無いところには、自然と恐怖が芽生える。その恐怖が大きな差を生むのだ。

先へ行くものはそれを覚悟しなければならないということだ。
しかし、俺が今考えていたことは少し違うことだった。その対価をもらった以上、出遅れたものには十分な情報を与えなければならない。
マッピングされた情報は他の人に与えることが出来る。その情報だけで商売ができるほどその情報の価値は高いだろう。
今マッピングした分だけでも、かなりの値になるはずである。なんせ命がかかっているのだから。だから俺はその情報を無料で提供していこうと心に誓った。
自己満足、罪滅ぼし、偽善者、どれにも当てはまるようで自己嫌悪さえしたが、これは義務だと自分に言い聞かせた。
権利ではなく、義務だと。

歩くため（後書き）

すいません、今テスト期間中で更新が遅れてしまいました。
テスト勉強を必死にやっていたら、小説のことをすっかり、忘れていて・・・。
まだ、テスト期間なんですけど、出来るだけ頑張りたいです。

新たな決意（前書き）

今日は二本更新します！！
がんばりましたｗｗ

新たな決意

七回目のチャレンジも失敗。

ダンジョンの最下層まで来て、お目当てのモンスターが一番多く湧くフロアに来た。

三十分モンスター三十体討伐の目標は思った通り厳しく。こちらの装備も万全でないので、さらに困難を極めた。

コウモリのような指定されたモンスターの名前はメフィー。戦闘能力は高くないが、初めての飛行型のモンスターで効率よくダメージを与えられないでいた。

今のところ、五回目のチャレンジの二十五匹が最高で、徐々に上がっていた討伐数も六回目、七回目と今度は徐々に落ち込んできた。理由は疲労と、武器の消耗。既に一本目の剣は耐久値が無くなり、消滅までしてしまった。二本目の剣も危ない状態である。

三十分で一セットなので、単純計算で三時間三十分以上の時間が経っている。

ダンジョン内部には安置がなく、休みたくても休めない状況だ。ダンジョンに入って、十数時間は経っている。その間一回も長い休憩がない。たまに地面に座り込んで休む時もあったが、そういう時に限ってモンスターが近づいてくる。そういうプログラミングでもされているのだろうか。

メフィーがしてくる突撃攻撃を躱して回復ポーションを飲んだ。

ポーションは気にするほど減ってはいないが、帰りの道も考えるとチャレンジは後二回程度。しかし、今気にしているのは武器だ。武器の事を考えると、もうチャンスが一回だろう。

俺はポケットからポルを取り出して、三十秒のカウントダウンを開始させる。

直径十メートルほどのドーム状の部屋にはメフィーが五匹ほど湧

いている。この部屋では五匹のメフィーをすべて倒すと、また次のメフィー五匹が湧くという仕様になっている。
俺は神経を研ぎ澄ませ、時間が遅れるような感覚になるのを待った。この世界に初めて来たときよりもすぐにその感覚になることが出来るようになって、さらに自分と世界との時間のずれを多く感じるようになった。
俺は、五匹すべてのメフィーに意識を集中させつつ、開始のアラームが鳴るのを待った。

「プー！！」という大き目の音が鳴るとほぼ同時に俺は動き出した。
一番近くにいたメフィーに長剣を横薙ぎに一閃する。右手で振ったその一撃は、スピードこそあったが、狙いは結構適当だった。予想道理その一撃は避けられて、メフィーは上空に逃げようとする。
俺は左から右へ振った斬撃の勢いを利用して、今度は両手で回し斬りをメフィーに叩きこんだ。
このコウモリ型のモンスターは直線のスピードは速く、上下の動きは得意だが、左右、前後ろの移動は得意ではない。
メフィーの移動速度を計算して、繰り出されたその回し斬りは吸い込まれるようにメフィーの頭部へと当たった。
切れ味の失われた長剣だが、斬撃のスピードのおかげで、メフィーは真っ二つになった。
俺はすぐに次の標的を定めると、さっきと同じような戦法で二匹目を倒した。
二匹目を倒した瞬間に繰り出された突撃攻撃を紙一重で避け、その背中に投擲用のナイフを投げつけた。きれいに刺さったナイフはメフィーの動きを一瞬止めた。俺はその隙をついて三匹目のメフィーを討伐。
落ちてきたナイフをキャッチし、素早く太腿の横に仕舞う。
ここまでの時間は一分程度、今までで一番速いペースだと、自分

でも分かった。といっても、このクエストは何かと運の要素が強い。なぜならメフィーが攻撃を仕掛けて来るか、地上近くまで低空飛行しない限り、攻撃を与えることが出来ないのだ。

このドームはきれいな半円を描いたような作りで、天井の高いところでは五メートル程度ある。そんな高いところまで攻撃が届くはずもなく、天井付近に飛んでいるメフィーにはナイフを投げることしかできない。

投げたナイフも隙がなければ、そうそう当たるものでもなく、かといって勢いをつけて投げたナイフは天井に刺さって後で苦労することになる。投擲物を手元に召喚するのもお金がかかるのであまりやりたくはない。

俺はイライラとしながらメフィーの動きを見ていた。

さらに時間が過ぎて、二十分現在で討伐数二十二とすごい高ペースで進んでいた。というのも、メフィーのある行動パターンを掴んだからだ。

ナイフをメフィー本体めがけて投げるのではなくて、その進行方向に投げる。もちろんそのナイフは当たらないのだが、目の前に飛んできたナイフにメフィーは驚き、絶対に右に曲がる。その瞬間に合わせて、また本体ではなくメフィーの目の前に行くようにナイフを投げる。

そうするとメフィーは体勢を崩しつつ、急降下を始めるのだ。俺はその落ちてくるポイントに走って、後は剣を振るだけ。

オロオロとしたメフィーに攻撃を当てることは容易く、溜めの大きい攻撃もおもしろいように当たった。

それをずっと繰り返せば、一分に一匹のペースなど簡単にクリアできた。

二十五分に達する前にノルマを果たして、クエストクリアを知らせるファンファーレが鳴った。

大いに喜びたいところではあったが、疲労がそれ以上に勝ってい

て、その場にへたり込んでしまう。
もう歩けないと思った俺は、疲労も回復するというポーションを一個だけ使ってみた。ＨＰ回復のスピードと量は市販のポーションと変わらないが、本当に疲労も回復した。
体がポカポカとあたたかくなり、筋肉の緊張がほぐれる。徐々に体が軽くなっていって、気力まで回復したような気になってくる。
あまりの効果に心底驚いた。たしかに全快までとはいかないが、十分このダンジョンを抜けるのに必要な体力まで回復した。
俺はさっきまで重かった腰を浮かせて、出口の方へと足を進めた。
そういえばと、歩きながらポルを開いたら、レベルが十に上がったことを知らせるファンファーレが鳴った。
今までのレベルアップの時のファンファーレと違う音色で、思わず足を止めてしまった。
どうやら十レベルというきりのいい数字だかららしい。スキルスロットが一つ増えて、習得可能なスキルもいくつか増えたようだった。
俺はちょっとした小道に入って、敵を警戒しつつポルを操作した。
新しく覚えれるスキルの中に状態異常耐性というものがあって、俺はそれを選んだ。ほかにも魅力的なスキルはあったが、迷うことなく選ぶことが出来た。
そのスキルにさっきもらったばかりのスキルポイントをすべて振る。暗視スキルについてはもう自然上昇だけに任せればいいと思ったのだ。
スキルについていろいろと思考を働かせた後、クエストのページへと進んだ。
クエスト報酬の長剣とベルを受け取る。
長剣をすぐに実体化させて、背中の鞘に仕舞う。元あった長剣は破棄した。持っていても使い物にならないのならば、アイテム欄を開けておいた方がいいと思ったからだ。
長剣の攻撃力、耐久値、重さは、今まで使っていた剣とは比べ物

にならないほど高性能だった。早くモンスターと戦ってみたいとさえ思ったほどだ。
剣を変えてから最初に出会ったモンスターには感謝さえ感じた。俺は嬉々としてモンスターに向かうと長剣を両手で振った。
重さがかなり変わったので、片手で振るには少し重いが、その分剣を振るスピードが速くなり、攻撃が重くなり、一撃でこのダンジョンの一番手強い敵の熊型モンスターを倒した。
すごいと感嘆しながら、もっと強い敵と戦いたいと思った。
わざと遠回りしながらダンジョンを出たが、モンスターは一発か二発で倒せてしまい、全く手ごたえがなかった。
ダンジョンを出るころにはすでに翌朝になっていて驚いた。朝日を見れば、自然と疲労感と空腹感、睡魔が襲ってきた。
俺は山頂の小屋まで走って、少しの食べ物を胃に詰め込んで寝袋の中に入った。

起きたのはちょうど正午で、空腹感がまた襲ってきた。
小屋には台所があったのでそれを拝借して、少し豪勢な昼食をとった。一旦フイゼルに戻ると決め、山を下り初めて二時間というところで山を登る大パーティーと出会った。
軽装で武器も持たずにいるプレイヤーが何人もいる。たぶん荷物運搬係だろう。
「早く戻ったほうがいい」
俺は気がついたらそんなことを口にしていた。
理由は、背後から感じていた威圧感のようなものを山頂辺りから激しく感じていたからだ。一旦フイゼルに戻ると決めたのも、その威圧感のせいである。
もちろんそんなことは聞いてもらえるはずもない。
「はぁ？・・・何言ってるの？」
一歩前に出たフル装備の男性に半ば呆れられるように言われた。

どうやらその人がリーダー格のような人で、身長も高く装備も他の人よりグレードが高いように見える。
「上に行くと、何か起りそうな気がする」
「君、もしかして自分よりも先に進ませたくないだけじゃない？」
まあそうなるだろう。他の奴らなんかは半分キレかかっている。このリーダー格の人が温厚そうな人物でよかったと心底思った。
「そう思われても構いません。それでも今回はこの先に進む事をやめてもらえませんか？」
俺がそう言うと、大パーティーからは怒声が聞こえた。
「ここで引き返すとのもかなりの損害になるんだ。君の忠告は聞けない」
大パーティーでの移動は相当お金がかかるということだろう。
ソロだと、モンスターを倒していれば基本的に黒字になるので考えてもいなかったことだ。
「じゃあ、俺もついていく」
半分無意識にそう言っていた。
「・・・・まあ、構わないけど」
渋々ながらという感じで、受け入れられた。さっき喧嘩を売るような事をしたのに了承してくれたことに驚いてしまった。
「君が真剣だったからね、僕の名前はチャールだ」
慌ててポーカーフェイスに直して「カルラだ」と名乗った。よろしくと手を差し出されたので、俺は無言でその手を握った。
どうやらこのパーティーはこの山を抜けた先にある街。≪ゼレス≫を目指しているらしい。
俺の事を警戒しながらも、そのことだけは教えてくれた。
三十分も登ったところでチャールは口を開いた。
「君はずっと一人？」
俺は大パーティーのことよりも、徐々に強くなりなっていく威圧感に気を取られていて、チャールに質問されていることに気が付かなかった。

いきなり顔をのぞかれ、ビックリして危うく鞘から剣を出すところだった。
ふーと息を吐いて「なんだ？」と問えばチャールは少し震えていた。
「そんなあからさまな殺気を向けないでくれ」
「すまない」
居心地の悪さを感じつつそう答えた。
「君は何に怯えているの？」
「・・・・」
チャールに問われて、俺は応えることが出来なかった。
何かに怯えているように見えるのだろうか？
最近他の人に心を読まれたり、表情を読まれたりすることが多い。自分でも思っていなかったことを言われたりもする。今、何に怯えているのと言われて、自分がひどく怯えていることにやっと気が付いた。
何に対する怯えなのかは自分でも分からないが、はっきりと何かに恐怖していることが分かる。
そんなことを考えていたら背後から悲鳴が聞こえた。
「なんだ！？」
チャールがそう言いながら後ろを向いて剣を構えた。
俺はチャールが構え終わる前に、誰かが悲鳴を上げた理由が分かった。
「な、なんだあれは・・・・」
チャールの震えた声が聞こえる。
目の前にいたのは真っ黒で巨大なドラゴン。その体から出ている威圧感は肌をビリビリと震わせる。痛みを感じるほどだ。
チャールの質問に焦ったとはいえ、こんな巨大なドラゴンの接近に気が付かないとはどういうことだ。
そんな事を考えている内に、大パーティーの人数が減っていく。
ドラゴンが雄叫びを上げれば、その雄叫びで山が震えた。

チャールはすでに逃げ出していた。パーティーもほぼ全滅。プレイヤーも風船が割れるように赤いポリゴンとなって消滅していた。
俺はその光景をただ茫然と見ることしかできなかった。
本当の世界でこんな風に人が殺されれば、血も飛び散って地獄絵図のようになっていたかもしれない。
しかし、この世界では何も残らないのだ。ただ、赤いライトエフェクトとなって消えていく。そんなゲームの世界ではありふれたような光景をただ、茫然と見ていた。
ドラゴンは翼を広げていきなり飛び上がった。
ものすごい風圧で、地面に体を押し付けられる。立っていることが出来ずにその場に倒れ込んでしまった。
ドラゴンはどこに行くかと思えば、逃げているチャールの所だった。ドラゴンは息を吸って、その口からいきなり火を吐いた。
ものすごい量の火炎は、百メートルは離れたここまで熱を飛ばしてくる。
「ゴー！！」という荒々しい音とともに、再び山が揺れた。
ドラゴンは火を吐くのをやめてこちらに飛んでくる。さっきドラゴンのブレスが当たったところを見てもそこにはチャールはいなかった。
大パーティーは一人残らず全滅。
そこらじゅうにアイテムが落ちている。プレイヤーの持ち物がドロップしたのだろう。俺はそれを一通り見渡してから、ドラゴンを見た。
巨大な体から感じるのは恐怖ではなく、それを通り越した畏怖だった。
「俺も殺すのか・・・」
ドラゴンは真っ直ぐにこちらを見ている。山を登っている時から感じていた威圧感は絶対にこいつの仕業だろう。
ドラゴンは俺を、小さな人間を品定めするような目でただひたすら見ている。

俺は逃げることも、立ち向かうことも出来ずにその場から動けずにいた。
ドラゴンが再び雄叫びを上げると、翼を広げてどこかへ飛んで行った。途中で俺を睨んだ瞳にはいろいろな感情が見て取れた。数十秒もすれば、ドラゴンの姿は点のように小さくなり、やがて見えなくなった。
ただ一人取り残された俺は笑うしかなかった。
正直、ドラゴンに対する怒りはなかった。人々が死んだという悲しみはあった。でも、ただそれだけだった。レイスが死んだ時のような後悔はない。それぐらい、自分の力ではどうすることも出来ない現実だった。
ドラゴンに憧れさえ抱いた。あの瞳にはいつか自分に挑んで来いというメッセージのようなものを感じたのだ。
その時俺は決心した。誰かを守れる強さなんてそんな曖昧なものはいらないと。
「誰にも負けない強さがほしい」
目からは涙があふれていた。哀しくないのに、なぜか涙が流れる。分からなかった、あのドラゴンがしたかったことも、なぜ自分だけがここに生き残ったのかも、なぜ泣いているのかも。
俺は再び笑い出すのを堪える。
何故笑いたいのかはすぐに分かった。今の俺の姿がひどく滑稽だったから。自分で意識してまた笑いそうになる。俺はふっと苦笑するだけにとどめて俺は涙を拭った。
歩き出す、一歩一歩。
俺はフイゼルに戻るのではなく、次の街を目指した。

新たな決意（後書き）

ここでこの章は終わりです。
次の話からはいきなり時間が飛びます。
これからも応援よろしくお願いします。

三年後（前書き）

第二章です。
ここからはカルラ以外の人の心情も入れたいので、カルラ視点ではなく、第三者視点で行きたいと思います。
これからも応援よろしくお願いします。

三年後

この世界に来て三度目の春が来た。
すでに島は六つ目の島である。
最初にいた十万の人間もすでに六万人という人数まで減った。その四万の犠牲者の内のだいたい半分の二万弱の人間は、最初のたった三か月で死んだ。単純計算で一日二百人だ。
そんな中でも約六か月かかって最初の島を制覇した。不安や、焦りが少しだけでも解消され、希望の光が見えたことによって、プレイヤーたちは歓喜に沸いた。
今、プレイヤーたちの中でもクリアを目指そうと必死に踏ん張っている人間が四万人。怯えて、グランゼルという安全な箱から出られない人間が二万人いる。
その二万人を誰も臆病だとは罵らない。それも一つの意思だから。
この世界、アナザーワールドからの解放を目指す四万のプレイヤーの中でも、高レベルの人間は本物の勇者のように扱われている。
ブレイブ――勇敢な人々と名付けられ、六万の人間の未来を握っていると言われている。あまりにも重いその責任に押しつぶされてしまう人間もいる。
そんなブレイブの中に、ほとんどのプレイヤーが名前も知らない、影の勇者がいた。

□■□■□■□■□■□■□■□■

正直言ってこの三年はとても短かったと思っている。
この世界に来ていろいろな事を見て、体験して、そして学んだ。
全部が全部役に立ったとは言い難いが、この世界での時間は貴重なものだと感じられるようになってきていた。
少年、カルラは天気のいい日に日向ぼっこをしながらそんなこと

を考えていた。
この世界ではいくら時間が経っても、体は成長したり、老いたりはしない。だから、まだ成長期である十七歳の少年が三年間この世界にいても、容姿の変化は全く見られない。敢えて言うならば、表情が凛々しくなったというところか。
ポルに届いたメッセージを読み終わって、大きなあくびをして立ち上がった。
「第六の島セイ、ドレイヤ！！」
と一声かければ、カルラの体は青白い光に包まれ、その場から消え去った。

「ターン！！」という音と青白い光と共に、カルラは第六の島であるセイの中心の街≪ドレイヤ≫に現れた。
転移スキルの最上位スキルの通称、島渡（しまわたり）だ。
転移スキルはその名の通り、一瞬で自分の立っている場所を変えるスキルで、ほとんどのプレイヤーが習得している。
カルラはすでにスキルポイントをＭＡＸまで上げているのでフィールドからでも飛べるのだが、普通ならば、セーフティーゾーンからセーフティーゾーンにしか飛べない。
しかも島と島を飛び越えるのには相当な精神力を使う。
「慣れればなんてことはない」というカルラだが、周囲のプレイヤーは呆れてしまう。一般のプレイヤーは一回島渡をすれば、その場に倒れ込んでしまうのだ。
ブレイブの人間たちでさえ、島渡をした直後は頭痛と倦怠感に悩まさせられる。
カルラはドレイヤに着くなりすぐに酒場へ向かう。
今日の用事はいつもと違い、ものすごい深刻なものだった。
酒場に入って大きな団体を見つけるなり、カルラは表情を歪めた。

大人数の人たちに注目されるのは好きではない。
「何の用だ？」
カルラはこの三年間で磨き上げたポーカーフェイスで訊ねた。否、自分では磨き上げたと思っているが、傍から見たら三年前と言うほど変わっていない。
それでも、飄々と言うカルラにここに集まっている人間の大半は唖然としていた。
「連絡が言ったと思うけどね、今回のエリアボスを倒せないから君に援軍を頼んだんだよ」
答えたのはギルド『ウルクド』のリーダーであるドージだ。
ウルクドはたった五人のギルドだが、アナザーワールドで一番有名なクエストギルドだ。
ちなみにその中の、ドージ、ウル、クリスの三人は初期メンバーでありウルクドの名前の由来は三人のの名前から取ったそうだ。その三人はカルラの古くからの友人である。といっても三年間だけの付き合いなのだが、パレンドで出会ってからその後に何度も会うことになった。
そのたびにギルドに誘われて、断るのが少しも鬱陶しくなかったというのは嘘になるだろう。
ついに我慢できなくなった一年前のあるカルラの発言によって、ギルドに誘われることはなくなったが、クエストに手伝ってくれという連絡は後を絶たない。
いろいろとお世話になったこともあるので、断ることは少なかったが、最近の誘いはすべて断っている。新しいギルドメンバーが増えたからだ。
そんなわけで約三か月ぶりに会って、気まずさもあるのだが、今本当に気になるのはウルクドの連中ではなく、隣にいる、左胸に三日月のエンブレムを着けた数十人のプレイヤーだ。
ギルド『月光』。いわずと知れた最強のギルド。そんな月光のメンバーが勢揃いしているのだ。

ギルド長のベイル。
副長のルナ、フイク、グリフト。
その他の大勢。その中には諜報部の部長を務めているというレイナの姿も見えた。
「こんなメンバーが勢揃いして倒せないボスなのか？」
これだけのメンバーが揃えばこれまでのボスモンスターよりもちょっと強いからと言って倒せない訳はないのだ。
「月光のメンバーは今回のボス戦に参加できなくてね」
月光の長のベイルが口を開く。左胸のエンブレムは三日月ではなく、満月だ。
身長はカルラよりも少し高いぐらいで、体格だけで見れば隣に立つ身長二メートルはあろうかというグリフトの方が屈強そうに見える。
しかし、その体から発せられるオーラというか、覇気のようなものが全く他の人間と違うのだ。
二十歳ぐらいの若い青年の微笑みは優しいように見えるが、眼は全く笑っていない。邪眼という二つ名をもつベイルのその瞳にはギラギラとした炎が見えるようである。目の前にいるのがカルラでは無かったら誰も動けないような強さの威圧感であった。
「理由は？」
飄々と答えたカルラにグリフトは睨みを利かせる。
ベイルからただ見られるよりも、グリフトの睨みの方が心底可愛いと思う。
カルラは肩を竦めて、どうした？とでも言いたげな表情を作った。
「ベイルさん、本当にこんな奴に頼むんですか！？」
我慢ならないようにグリフトが声を上げた。
しかし、ベイルがさっと手を上げればすぐにグリフトは静かになる。どんな教育を受けているのだろうかとカルラは真剣に考えてしまった。
「今月光のメンバーは大きな動きをすることが出来ない。ここに居

るメンバーを見てくれれば察してくれると思ったのだがね」
見た目の割に老いた言葉遣いのベイルにカルラは苦笑した。
「ああ、分かっているよ」
ここに居るメンバーは、全て月光のメンバーもしくは月光に友好的なギルドのメンバーだけだ。本来ならばもっと他のギルドのメンバーも集まる筈であるのに。
例えば月光に次ぐ勢力のあると言われる大規模ギルド『ジアス』。
月光のメンバーはたったの三十人と、最強と呼ばれるにはとても少ない人数である。少数精鋭とはこういう集団を言うのだと物語っているようなギルドだ。
対してジアスは、傘下のギルドもあり、ジアスだけの人数でも二百人は超えている大人数のギルド。
大人数と言っても、全てのギルドの人数を平均すると少し少ないほうであるが、ただ、それだけの人数の高レベルプレイヤーを集めているのは、ジアスというギルドだけだ。
最近、そのジアスが傘下のギルドといくつかのギルドを合わせて、連合を組むという噂が流れている。
その噂が真実だったということだろう。
別に月光には関係ないことのように思われるが、これほどの大規模な高レベル連合が出来ると、狩場の独占や、村や町などのセーフティーエリアの封鎖が起こると考えられているのだ。
ジアスというギルドは約二年前に出来て、当時から効率のいい狩場の独占、装備の素材の買い占めなどの行為はざらにあった。
理由は月光を超えるギルドになるため。
ジアスのギルド長は最強のギルドを目指しているのだ。
今以上に大きな集団になると、他のギルドや少数のソロプレイヤー達は動きがとりづらくなる。特に月光は、多大な被害を受けることになるのだろう。
そこで今、月光はジアスへの説得を試みているのだ。
月光がボス戦へ出ると、ジアスは簡単に動くことが出来る。今こ

こに勢揃いしているのも相当危ないんではないかと思う。
「月光のてっぺん直々の頼みだしな」
「じゃあいいんですかカルラさん！？」
カルラの言葉にフイクが嬉々として声を上げた。
三年で随分とたくましい顔つきになった。実力主義の月光の副長になったのも当然と言えば当然なのかもしれない。
「そう、焦るなフイク」
カルラがそう抑えると、フイクは途端に険しい表情になる。
あの時置いて行かれた時にフイクは随分と悩んだ。
自分の実力がないのは確かで、そんな自分がカルラに迷惑をかけることになると思って、追いかけないと決めた。それでもあの時追いかけたほうがよかったのではないかと、今は思っている。
カルラはあれからさらに、自分自身を追い込み、自分自身の強さを磨いていった。今こうして会えているからいいものの、そのカルラの行動の無謀さにフイクは何度も自分を責めたのだ。
そんなフイクの心配を知らないカルラは、そのフイクの様子に苦笑するしかない。
こうして普通に話し合えるようになったのも、フイクが月光の副長になった時からで、カルラの隣に立てるぐらいに自分の強さに自信の持てるようになったからである。ちなみにフイクが月光の副長になったのは半年前と結構最近の事だ。
「なにが望みなの？」
「別に望みはない」
カルラに問いかけたのは全員で三人いる月光の副長の一人のルナ。
月姫（つきひめ）という二つ名を持っており、その可憐な容姿はアナザーワールドの男性プレイヤーの憧れの的である。
歳はカルラと同年代であるが、月光の副長を名乗ることに誰も異議を唱える者はいない。それほどの実力の持ち主なのだ。
カルラ自身何度かルナの戦闘を見たことがあるが、そのスピードと技のキレには驚かされた。華奢な体からは想像できない攻撃的な

剣技は「姫というよりは女王だな」などとカルラは考えている。
「ベイルさんが頼むんだから相当な実力だとは思うけど、あなたは月光抜きで今回のボスを倒せると思っているの？」
ルナはカルラが戦っているところを見たことがない。いや、見たことにはあるが、それは相当前のことで、正直今のカルラの実力を疑っているのだ。
「望み以前に勝てるかどうかも分からないのに随分と余裕そうに見えるのは私だけかしら？」
「カルラさんを馬鹿にするのはルナさんでも許さないよ！！」
「・・・・やめろ。フイク」
ルナの物言いにフイクは反論したが、それを抑えたのは意外な人物でウルだった。
ウルはとても無口な人間で、滅多に口を開くことはないのだ。
カルラとウルクドのメンバーとベイルだけが驚いていない中、ウルはしゃべりだした。
「ルナさん、あなたがカルラの実力を知らないのは無知だからじゃない。カルラがみんなに知られないようにしているからだ」
「お、おいウル！！」
予想外のウルの言葉に慌ててカルラは止めに入った。最早ポーカーフェイスなどに構っていられない。
しかし、ウルが喋るのをやめたら次はクリスが口を開いた。
「たぶんここにいるほとんどがカルラ君の実力を知らないと思う。カルラ君は目立つのが嫌いだからね、まあそれ以上にもっと大きな理由があるみたいだけど」
そう言ってクリスはカルラにウィンクをする。
クリスの歳は二十代後半らしいが、もっと若く見え、アイドルのようにイケメンなのだ。そんな人のウィンクを見たら、ほとんどの女の人はメロメロになってしまうだろうが、カルラは苦々しげな表情を浮かべつつ、クリスを睨んでいた。
ウルクドの二人は、まだだめか？とでも言いたげな顔をしていて、

カルラは依頼を無償で受けるほかなった。
目立つことを嫌うカルラは今回の依頼を断りつつ、出来れば一人での討伐に向かいたかったのだ。
この大人数の前でこの依頼を受ければ、ボスを倒したのがカルラだと言っているようなものなのだ。そんな目立つような真似はしたくない。
しかし、逆にここで断ればもっと目立つようなことになりかねないのだ。
ウルクドの初期メンバーのドージ、クリス、ウルと月光のレイナ、フイクしか知らないある事実を言われてしまう。
ドージはおしゃべりだが、口は堅いので、今回そんな脅しをされるとは思っていなかった。
しかし、まさかのウルとクリスというダークホースの裏切りで、危うい立場になってしまったのだ。
「ありがとうカルラ君」
ベイルが嫌らしい笑みを作っているのを見て、こいつも俺の秘密を知っているのかもしれないなとカルラは心底ここに来たことを後悔した。

三年後（後書き）

誤字脱字があったら連絡お願いします。

脳天気

カルラの依頼了承が決まると、月光のメンバーは早々に解散した。残された、月光以外のメンバーはこれからの事を話し合おうと提案する。ボス討伐会議だ。

しかし、カルラがそんなの必要ないと言えば、ほとんどのメンバーが憤慨した。初めて見たカルラと呼ばれる実力も知らない人間に自分たちの意見をいきなり反対されたのだ。

「じゃあどうしようというんだ！？」

月光と一番親しい間柄のギルドである『ディズ』の長のデイジーがカルラに近づく。

今は月光がいないからか、随分と態度がでかくなったもんだとカルラは感じた。自分の態度のでかさは棚に置いて。

「俺一人で十分だ」

カルラが言うと周りから笑いが起こった。笑っていないのは、ウルクドのメンバーと数人のプレイヤーだけ、カルラの実力を知っている彼らは呆れている。

「お前ひとりで何ができるというんだ、今回のボスはドラゴン系のモンスターだぞ！？」

どこからかそんな声が上がった。

カルラはその声に反応したようにニコッと笑うと、一気にその場の温度が下がった。いや、実際には気温は下がっていないが、そのように感じたのだ。彼から感じる圧倒的な畏れのせいで。

「じゃあな」

いうなりカルラはボスモンスターのいる場所へと飛んだのだった。緊張がほぐれ「待て！！」という声を上げる野郎たちを置いて。

目的地に着くや否やカルラは背中の剣に手をかけた。

「誰だ！？」
「あ、怪しいものじゃないです！！」
カルラが一気に高めた殺気に気付いた二人が出てきた。
一人はひどく慌てている様子の女の子、カルラよりも年齢が低いように見える。もう一人は初老のおじさんだった。
「私たちはウルクドのメンバーです」
そういう初老のおじさんは、どこか見覚えがあった。しかし、ウルクドの新メンバーを一回も見たことのない筈のカルラは首をかしげた。
「カルラ君覚えてないかい？」
ニカっと笑う初老のおじさん。
その笑顔にカルラは「あああああ！！」と言いながら大きなリアクションを取った。
「久しぶり」
「・・・久しぶりです。すいません・・・、全然わからなくて」
挨拶を交わしつつ謝るカルラにおじさんはもういいからと止めに入った。
「もう三年になるからね。私の名前を覚えているかい？」
おじさんの質問にカルラは現実世界での記憶を引っ張り出した。
このおじさんは現実世界で、剣道場に常連出来ていた人だったのだ。
何度も呼んでいた名前のはずなのに、記憶がすっぽりと抜けたように思い出せなかった。たった三年で忘れるような記憶ではない。
「もういいよ。私もカルラ君の名前を思い出せないしね」
カルラはかなりの時間考え込んでいたようだ。おじさんは苦笑している。
「この世界での名前はデイジス。この子はルシアーナ」
自分の名前を言った後に、デイジスは隣にいる女の子の紹介もした。
「デイジスさんはウルクドに入ったんですね」

「うん、あのギルドはとても楽しそうだったし、この子のためにもね」
二人は現実世界からの知り合いなのだろうか、かなり親しい仲であるようにカルラの目には映った。
「ああ、ルシアーナは私の娘だよ」
「よ、よろしく」
ルシアーナと呼ばれた少女は右手をおずおずと差し出してきた。
「よろしく」
カルラはその手に応えながら、先ほど殺気を向けたことを詫びるように微笑んだ。
なぜかルシアーナは顔を赤くして、そそくさとデイジスの背後に隠れた。
何かいけないことをしたかなとカルラが自分の行動を反省していたところで、デイジスに声をかけられる。
「カルラ君は悪くないよ。この子は恥ずかしがり屋でね」
「ちょ、ちょっとお父さん」
デイジスの服を引っ張りながらルシアーナは泣きそうになっている。何がそんなに恥ずかしかったのだろうとまたカルラは思考を巡らせた。
「カルラ君はこれからボス戦をするらしいね」
「え、あ、たぶんそうです」
突然声をかけられて曖昧な答え方になってしまった。
「あれ？違ったのかな、ドージからそのためにここに来るはずだと連絡をもらったのだが・・・」
「そうです、今からボスを倒しに行くんです！！」
慌てて訂正する。
その様子にデイジスは苦笑するが、ルシアーナは訝しげな表情を浮かべている。
「あ、あなた一人で行くつもりだったの？」
「え、うん。そうだよ」

ニコッとカルラが微笑めば、またルシアーナは真っ赤になった。
「カルラ君、あんまりルシアーナを苛めないでくれ」
「え？」
苦笑を続けながらデイジスがいえば、カルラは首をかしげる。
「とにかく、ボス戦へ行こうか」
「え！？デイジスさん達も行くんですか！？」
さらっと告げられてカルラは目を見開いて驚く。
「邪魔だったかい？」
「いえそういう訳ではないんですけど」
カルラがちらりとルシアーナを見ればルシアーナは必死にカルラを見つめ返した。
実力はあるのかもしれないとカルラが感じていたら「いきますか」とデイジスが言って歩き出した。終始ペースを握られっぱなしであったカルラであったが、無言でデイジスに続いた。

□■□■□■□■□■□■□■□■

カルラとデイジスとルシアーナがボスのいる神殿を進んでいる頃。
月光の主要メンバーはギルドタウンである≪ロージア≫にいた。
詳しく言うと、そのロージアのギルド本部である建物の中の会議室に来ていた。
「ベイルさん、本当に大丈夫ですか？」
冷めた表情でルナが言えば、フイクがルナを睨みつけた。
この二人は仲が悪いわけではないが、カルラのこととなると途端に意見が合わなくなるのだ。
「まあまあ二人とも・・・」
いつも通りそれをレイナが鎮める。
「ルナ。君の言いたいことも分かるが、あの男の強さは本物だ」
まだ反論したげな顔だったが、ベイルがそういえば、ルナは「はい」と言って大人しくなった。

内心では何故カルラの評価がそこまで高いのか全く分からないとルナは考えていた。
「本題に戻る。ジアスは今メンバーの選抜を行っている」
ベイルの言葉でさらに会議室の緊張感は増す。
「そこで、月光はどうするべきかとみんなに意見を求めたい」
「「・・・」」
シーンと沈黙が訪れた。
「完全敵対をしましょう！！」
「ダメですよ！！」
沈黙を破ったグリフトの意見を間髪入れずにレイナが反対した。
「これ以上ジアスを興奮させるようなことをしては逆効果です。月光以外のギルドも被害を受けているのに、それを放っておくわけには行けません！！」
「で、では、どうしろというのだ！？」
狼狽するグリフトに他のメンバーは呆れている。戦闘力はあるが、頭の回転がグリフトは遅いのだ。
「結局あっちが月光より強いと証明できればいいんですよね？」
「月光は最強でなければいけないのだ！！」
フイクがぽろっと呟けばグリフトは大いに憤慨した。
「別に月光は最強を目指しているわけではないはず、ただ出来るだけ早くこのゲームをクリアするために実力のある人が集まっただけです」
「確かにフイクの言うとおりだ。グリフトは少し黙ってくれ」
フイクとベイルの二人が睨みつければ、グリフトは目に見えて縮こまった。
しかし、グリフトはこの二人と考えに納得したわけではない。
グリフトが月光に入ったのは一年前で、月光内では割と新入りの部類だ。
なら何故副長という役職についているかというと、ベイルがグリフトを月光に誘った際にグリフトが、「入ってやるから、ギルドの

副マスターにしろ」と言ったからだ。ベイルはそれに軽く答えたが、単純な強さを見るだけならグリフトよりも強いメンバーは他にもいる。

そんな環境だがグリフトはその鈍さから、自分の強さはベイルにも劣っていないと考えていて、月光というギルドは自分がいるのだから、最強でないとだめだという意見の持ち主だった。ベイルに従っているのは、その方が楽だからという理由だ。

しかし、実際に月光が最強でならなくてはいけない理由もある。それはグリフト以外の人間は薄々感じていた。

ジアスに最強の座を譲るのは最後の手段なのだ。

「やっぱりこっちも連合を組むべきです」

「どこと？」

「友好な関係にあるギルドとです！！」

口を挟まれたことにイラッとしたルナは、フイクに向かって大声でそう言った。

「確かにこっちの勢力が大きくなれば、向こうも多少行動を自重するかもしれません。しかし、こっちについているギルドをすべて連合に入れてもそれほどの威嚇になるとは思えません」

冷静にフイクがそういえばルナは「うっ」と言葉を詰まらせた。しかし、ルナは意見を曲げるつもりはなく、フイクが今一番言ってほしかったセリフを吐いた。

「ゼロスを味方に入れればいいのよ！！」

と。

「正体が分からないんでは、味方にする以前の問題ですね」

フイクがニヤニヤとしながらそういえば、ルナはこの少年は何か知っているはずだと感じた。

しかし、この場面でその正体を言わないのだから、聞いても答えてくれるはずもの無いと思い、素直に負けを認めてプイっと顔を逸らした。他から見たら素直なようには見えなかったが。

その様子を見ながらレイナはやれやれと首を振っていた。

しかし、そんな一同を固まらせたのは次のベイルの一言だった。
「そうだな、ゼロスに頼もう」
無表情にそう言ったベイルを見て、フイクとレイナはやっぱりこの人をごまかすことは出来ないなと苦笑してしまった。
そして今ここに居ない、ある人の苦労に同情したのだった。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■

すでにマッピングされた神殿を真っ直ぐにボスの所へ進んでいる、カルラとルシアーナとデイジスの一行は、神殿の最後の層まで来ていた。
「くしゅんっ！！」
大きなくしゃみをしたカルラは誰かに噂をされているなと敏感に感じ取っていた。
「風邪？」
最初のころより随分とカルラに慣れたルシアーナが問いかける。
「いや、違うよ」
カルラが微笑めば、ルシアーナは顔を赤くしてデイジスの向こう側に回った。
確かに男の人に慣れていないルシアーナであったが、この人の笑い顔にはいつも以上に恥ずかしくなり、なぜか胸が苦しくなるのを感じずにはいられなかった。
「カルラ君、女の子を使って遊ぶもんじゃないよ」
デイジスがそういえば、カルラは何を言っているんだ？と言わんばかりの表情を作った。
デイジスは思わず噴出してしまい。「ごめんごめん」と謝る羽目になった。
このカルラという男は自分の事をしっかり評価していないなと思いながら。

何度かモンスターと遭遇したが、デイジスとルシアーナが手を出す前にカルラが疾風の速さで倒していった。
その戦闘のすごさにルシアーナは絶句したが、デイジスは「おお！！」と感嘆の声を上げていた。
「流石はカルラ君だね」
デイジスは自分の腕を過小評価してるわけではないが、カルラには絶対に勝てないと改めて考えさせられた。
現実の世界ではカルラが高校生になるまで一度も負けなかったデイジスではあったが、高校生になってからの急激な成長で、ついにカルラとの立場が逆になり、高校二年生になるころには何度試合をしても一本を取るどころか、竹刀をカルラの体に当てることさえ叶わないようになっていた。
そして、さらにこの世界に来てからもその成長は止まらなかったようで、最初に会った時から強くなったとは感じてはいたが、予想以上の成長であったのだ。
「いえ、デイジスさんには高校生になるまで勝てませんでしたし・・・」
そして、そのカルラの負けず嫌いさにも苦笑してしまった。そんなに細かく自分の事を覚えてくれているとは思っていなかったのだ。

徐々に装飾が豪華になっていく道を堪能しながら進む、ルシアーナとデイジスの二人だったが、カルラはそんなもの見飽きたというような表情をしていた。
デイジスも何度もダンジョンに来たことがあったのだが、この神殿の装飾は他のダンジョンよりもさらに壮大なものだと思っていた。
ボスの強さは、そのダンジョンの装飾の豪華さと比例している傾向がある。
つまり、ここのボスであるドラゴンは相当強いということだ。
カルラの余裕な表情を見ていて深く考えてはいなかったが、本当にこの人数で倒せるのだろうかという危惧が浮かんできた。

思えば、最初はカルラ一人でボスを倒しに行こうとしていたのだ。
デイジスはこの少年の実力はもっとすごいのかもしれないという好奇心と、これから戦うボスへの恐怖心が入り混じった何とも言えない心境であった。

最後の一本道を歩き終え、扉の前まで来たルシアーナとデイジスは歩みを止めた。
「やっと着いた」
そう言ってふーと息をつくルシアーナ。
「じゃあ行くよ」
しかし、少し遅れてきたカルラは休む間など作らずそのままの勢いで、ボスのいる部屋の扉に手をかけた。
「ちょ、ちょっとまってよ」
狼狽したルシアーナだったが、「どうしたの？」と、本当に何を言いたいのか分からないというような表情をしたカルラに深いため息をついた。
この人を見ているともうどうでもいいや、と投げやりな気持ちになってしまう。
デイジスも面白いものを見るような目でカルラのことを見ていた。
「じゃあ本当に行くよ」
そう言ってカルラは三メートルはあろうかという大きな石の扉を軽く押す。
その時、誰もカルラの背負った剣の種類が変わっていることにも気付かなかった。

脳天気（後書き）

やっと少しだけ女の子キャラが出てきてくれました！！
レイスさんのようにはならないように
これからはカルラ君が守ってくれるはずですｗｗ

ドラゴン

カルラが押した扉は自然に音もなく開いていった。
扉の間から、すごい量の光が溢れてくる。今まで、薄暗い道を進んできたので、あまりのまぶしさにカルラ以外の二人は目を細めた。
カルラはそんな二人に構うことなく、扉の奥へと進んだ。
かなり広い部屋の天井は吹き抜けになっていて、地上の光が地下五階であるここまで届いている。
真っ白な大理石の彫刻のようなものがいくつも作られており、ドラゴンの姿は見当たらなかった。
人間の彫刻に目を奪われていたころ、いきなり、夜になった！！とルシアーナは錯覚した。
「なに！？」
「上だ！！」
焦るルシアーナにカルラが声をかける。
デイジスとルシアーナは同時に空を見上げた。青空が広がっているはずの空を。
しかし、見上げたそこには赤色の何かが飛んでいた。
「ドラゴン！？」
思わず叫んだルシアーナは、腰を抜かしそうになる。
さっきまでは数メールほどの大きさに見えていたドラゴンは、ものすごい勢いで降下してきており、その大きさは二十メートルを超える巨体だと分かった。
一直線に自分目掛けて突進するドラゴンの迫力にルシアーナは動けなくなっていた。
もうだめだ！！と目をつぶると同時に激しい風を感じた。
ドラゴンがすぐそこまで迫っているんだと思ったが、風は徐々に弱まっていった。
恐る恐る目を開けると、自分の状況が分かった。

あまりにも恥ずかしくなって暴れようとしたが、「暴れないで」というカルラの声で押し黙ってしまった。
恥ずかしいという気持ちより、申し訳ないという気持ちと感謝の気持ちが勝ったのだ。
なぜなら今自分は、カルラに救ってもらって、なおかつ足手まといになっているのだから。

カルラはルシアーナをお姫様抱っこしてドラゴンの攻撃を避けつつ、どうしようかと考えを巡らせていた。
避けるだけなら容易いが、両手がふさがっていては攻撃を与えることは出来ない。
ルシアーナを放すにしても、焦った状態のままでは危険である。
うーんとカルラが唸っていると下から声が聞こえた。
「わ、私はもう大丈夫です」
顔を真っ赤にして言うルシアーナに不安を感じつつ、カルラは一つ頷いた。
ドラゴンのブレス攻撃を避けると、ルシアーナを出来るだけドラゴンから遠い位置に下ろす。しっかりと立つルシアーナを確認してカルラはドラゴンの方へと走り出した。

走りながらデイジスを探す。
どうやら無傷のようで、こちらに笑顔で手を振っていた。
カルラは苦笑しつつ、ドラゴンの尻尾攻撃を避けた。随分と前に戦ったドラゴンの事を思い出す。
あの時の攻撃は今の攻撃よりも数段速い。実際のスピードは今の攻撃の方が速いはずだが、やっぱりそう感じた。
カルラは背中の愛剣をドラゴンの尻尾目掛けて抜打ちする。今まで使わなかった、属性攻撃もフルに使って。
しかし、流石に防御力は硬く、鱗を三枚ほど弾き飛ばすことしかできない。

すぐに剣を引くと、同じ場所へ寸分たがわずもう一度斬撃を放った。ブシャッ！！という音とともに血のようなライトエフェクトが出る。

ドラゴンは雄叫びを上げて、怒りを表した。

カルラの一連の動きを見て、デイジスとルシアーナは二人そろって、驚愕していた。

動きの速さもすごいが、今驚いているのはたった二発の斬撃の威力だ。

カルラは浅いと思った一発目の斬撃も、ドラゴンの硬い鱗を弾き飛ばし、二発目の斬撃なんて、全く同じ場所にピンポイントで当てるほど正確で、一撃目の斬撃よりさらに迅い一撃だった。

ドラゴンが受けたダメージは、見た目よりもさらに大きいように感じる。

その理由はたぶん、カルラの持つ真っ黒な長剣の纏う剣の色と同じ真っ黒なオーラのせいだろう。

驚くことが多すぎて何が何だか分からなくなっていたデイジスは、自分が何をすればいいのかなんて考えることは出来なかった。

ルシアーナと言えば、ひたすらにカルラの動きに集中していた。

そのスピードのせいで、ほとんど残像しか見えず、カルラとドラゴンの戦いはもう別次元の戦いのように感じていた。

ドラゴンがブレス攻撃をすれば、カルラはそれを避けようとはせずに真っ直ぐに突っ込む。ブレスはカルラに当たっているはずなのに、カルラのＨＰは全く減らない。

ありえない出来事にさらに混乱する二人はカルラがドラゴンを倒し終わるまでその場から動くことが出来なった。

巨体だが、割と細身のドラゴンは動きが速く、特に棘の付いた尻尾の攻撃は驚異だった。ブレスの攻撃も、ダメージを受けないとはいえ、視界が塞がれるのであまり受けたいものではない。

ドラゴンの長い前足の攻撃を避けつつ、反撃をしながら戦法を考

えていた。
　こいつも馬鹿ではなく、さっきのような溜めの大きい攻撃はして来ない。それならば懐に入ろうとするのだが、ドラゴンはすぐに飛び上がってしまうので、なかなかダメージを与えることが出来ない。
　ジャンプすればそれなりに高く跳べる筈だが、空中では体の自由が訊かないので、それも避けたい。
　つまり、今やることは一つ。
　腰から投擲用のナイフを取り出して、それをドラゴンに投げつけた。ナイフはきれいにドラゴンの翼に当たり、「ビリビリ！！」という音とすさまじい量の閃光を放った。
　使い捨てのナイフは砕け散り、右翼の自由が利かなくなったドラゴンは、地面に叩きつけられた。
　カルラはダッシュでドラゴンとの間合いを詰め、攻撃を開始する。
　流石に、地面に落ちた程度では、ダメージを受けていないらしく、ドラゴンはすぐに体勢を立て直して反撃し始めた。
　カルラの計算では、ドラゴンの右翼は五分ほど自由がきかないと考えた。その間に、どちらかの翼を落として、飛べなくするのが狙いだ。
　ドラゴンのブレスを避けつつ、一気に右翼の根元へ走る。そのダッシュの勢いを乗せて、右上から長剣を振り下ろした。
「ブゥウン！！」という風を切る音とほぼ同時に、ドラゴンが怒りの雄叫びを上げた。
　一発で、ドラゴンの右翼の根元に数十センチの傷跡を作ったカルラは、ドラゴンの体を蹴って距離を取った。
　ドラゴンの口からは常時、火が溢れだしており、これ以上とないほどの怒りを表している。
　カルラはちらりと左右を確認して、ルシアーナとデイジスの様子を確認した。ぼけーとしている二人に危機感を覚えつつも、カルラはその二人を放置する。
　ドラゴンが二本の前脚を勢いよく地面に叩きつけると、強い揺れ

が起こった。
カルラはそれを踏ん張って耐え、隙の出来たドラゴンに一直線に突撃した。ドラゴンもすぐに体勢を立て直し、左翼で体を包んで防御する。
相当焦っているドラゴンに、カルラは猛攻を仕掛けた。
右手で持った剣を思いっきり翼に突き刺し、次は剣を両手で担ぐように持つ、ドラゴンに背を向けたカルラは思いっきり地面を蹴ってジャンプする。同時に右肩に担ぐように持った剣を前方に振り下ろす。
ドラゴンの翼は切り裂かれた。
肌が震えるような咆哮を上げつつ、ドラゴンは右前脚を払った。
ちょうど着地する直前だったカルラは、その攻撃を避けることが出来ず、長剣の腹で防御する。勢いよく吹っ飛ばされるが、きれいに受け身を取って着地する。
剣をクッション代わりに使って、攻撃の威力を弱めたが、流石の攻撃力でＨＰが一気に三割減った。
カルラは当初の目的であった、翼の部位破壊を終えたので、少しペースを落として、攻撃よりも回避を意識した戦闘スタイルに替えた。
回避を優先に回したカルラに、ドラゴンは攻撃を当てることが出来ず、徐々に攻撃は単調になっていく。
カルラはそれでも反撃を少しに留め、すぐに距離を取る。
ドラゴンは距離を取ったカルラに最大級の威力のブレスを放った。
今度は避けることなく、そのブレスニ真正面から突っ込んでいくカルラ。
ドラゴンはカルラにブレスが効かないことを忘れており、目の前にカルラが現れるまでブレスを止めようとはしなかった。
ドラゴンの瞳には、ふてぶてしい笑みを浮かべたカルラが映っていた。カルラはそれを意識しつつ、ドラゴンの頭部に最後の一撃を放った。

ドラゴンとの壮絶な戦いを終えたカルラはその場にあぐらを掻いた。
ドラゴンの体は、まだ全て消滅はしておらず、ドラゴンの目の前で堂々としているカルラに、ルシアーナとデイジスの二人は呆れていた。
「疲れたー」
そう言いながらポーションを飲むカルラ。
そのポーションも見たことがないもので、この男は本当に何者だろうとルシアーナは疑わずにはいられい。
たった、十数分でドラゴンを倒し終わったカルラは、ＨＰの半分もダメージを受けておらず、その減ったＨＰも一瞬で回復してしまう。
さっき目の前で繰り広げられていた戦闘は、ボス戦には大人数の遠征隊で討伐に向かうという、これまでの常識を覆す荒行だった。
「なんで今までボス戦に参加しなかったの？」
これほどの実力があれば、ボス戦での死人を出さずに済んだし、今までよりも数倍のスピードでボスの攻略が出来たはずだ。
それどころか、今までのボス全てこの男一人で討伐出来たかもしれない。
それなのに、この男をボス戦で見たことがない。
そう考えたら、無意識に出ていた問いだ。
しかし、こんな事訊かなければよかったと後悔した。カルラが、ひどく寂しそうな表情をしたのだ。何を思ったのかは分からないが、その瞳から滲み出る悲しみは、ルシアーナの心を沈ませるには十分な威力を持っていた。
「カルラ君帰ろうか」
気を利かせたデイジスがそう言うと、カルラは微笑みながら頷いた。

ただ、その微笑みもどこか自嘲気味のもので、瞳にはより一層の悲しみが感じられた。

この人は今までどんな事を感じて、どんな風に生きてきたのだろう・・・。

カルラの後姿を見ながら、ずっとルシアーナは考えていた。

カルラ以外はフィールドから直接、セーフティーエリアに飛ぶことが出来ないので、こうして歩いて近場の町を目指している。

ちなみに、カルラのように転移スキルがＭＡＸでもダンジョン内部に飛ぶことは出来ない。

町なんかもほとんど一緒で、転移できる場所は、その町の転移ポイントにだけだ。

この設定は宿屋の不法侵入などを防いでる訳だが、少し不便だと感じているのはルシアーナだけではないだろう。

三人は近場のセーフティーポイントに着くなり、月光のギルドタウンであるロージアに飛んぶ。ボスを倒した直後に、ベイルから連絡が来たのだ。

あまりのタイミングの良さに、三人とも顔を見合わせて驚いた。

青い光が視界から消え、妙な浮遊感が消える。

ロージアは第二の島にあり、島渡となったのでデイジスとルシアーナはひどい疲労感を感じていた。

一番疲れているはずのカルラはケロッとしており、全く疲れた様子は見てとれない。そんなカルラに二人は感心を通り越して呆れ果てている。

すでに夜になったロージアの広場には人っ子一人いない。

昼間には月光のホームタウンとして有名なロージアなので大変賑わっているのだが、夜は打って変わって沈黙の世界に変わるのだ。

それは月光の長、ベイルが決めたものである。

理由は分からないが、夜に静かにしていてくれたら、税金なしで昼間に露店を出す許可をもらえるのだ。
基本的に露店は、どこにでも出せるのだが、露店を出すと税金を支払わなければならない。
基本的には、その税率は町によって決まっているのだが、ギルドタウンで露店を出すと、その税金はホームギルドが決めることが出来る。その税金をゼロにしているのはこの月光と他数個のギルドだけで、特にロージアの露店街は賑わっている。
そんなわけルシアーナとデイジスは見慣れた光景だったのだが、カルラは黙ってただ一点を見ていた。

ドラゴン（後書き）

戦闘シーンを書くのって本当に疲れます・・・。

覇気

「そこで何してる！！」
カルラが叫ぶと、横にいたルシアーナとデイジスはびくっと体を反応させた。
彼から冷たく鋭い、それでいて激しい殺気が放たれたのだ。
ルシアーナは彼の視線を追ってみたが、だれも見当たらなかった。
彼女の索敵スキル、遠視スキル、暗視スキルは全てＭＡＸである百まで上げられているので、彼女はカルラが何か見間違いをしたのかと疑った。
しかし、数秒間その状態でいると、驚くことに物陰から一人の男が現れた。
その屈強そうな男は一目見ればグリフトだと分かった。
ニタニタと嫌な笑みを浮かべている。
「ドラゴンから逃げてきたのかぁ？」
嫌味っぽい言い方に、ルシアーナは背筋がぞくっとするのを感じずにはいられなかった。
ルシアーナはこれまで、優しい男性にしかあったことがほとんどなかった。
というのも、小学校からお嬢様学校に入れられ、男の人と言えば、父親しかいなかったのである。
この世界に来てはウルクドの三人のお兄さんたち。父より歳が下なので、ルシアーナ視点ではウルクドのメンバーはお兄さんなのだが。
そんな、男性から恐怖というものは感じなかった。
カルラから感じられる殺気に対する怖いという気持ちは、それとはまた一段違うのだが、今のルシアーナはそんなことに気付いていなかった。

ふと、右の手のひらを掴まれてルシアーナの体はさらに固めたが、その掴んでいる手の持ち主がカルラだと分かった瞬間に、暖かいものが体に伝わった気がした。
「もう、ドラゴンは倒しちゃってねー」
おどけた調子でカルラは言って、ルシアーナの手を放した。ルシアーナは手を離されたことを残念に思っていたが、もちろん態度には出さずにいた。
「冗談きついぜ」
わっはっはと笑うグリフトを見るとカルラの言葉を信じていないのだと一発で分かった。
「本当よ！！」
「黙ってろお嬢ちゃん！！」
怒鳴られてルシアーナは咄嗟にカルラの影に隠れた。
「うちの娘を怒鳴らないでくれないか」
静かだが、怒りのこめられたデイジスの物言いに、グリフトは一歩後ずさる。
こんなに怒った父は珍しい。
「要件はなんだ？」
カルラがグリフトの方へ歩いていく。
ルシアーナはついていこうが迷ったが、父に止められたのでそれに従った。

「カルラさんよー、ちょっと手合せをお願いしたくてな」
カルラとグリフトは約二十メートル離れた位置で向かい合う。
「売られた喧嘩は買う主義だが、一つ聞いておく、目的はなんだ？」
「ベイルがお前に勝ったら月光のマスターを譲ってくれると言ったんだ」
「へぇ、それはまた俺も過大評価されたもんだ」
カルラはベイルの自分に対する評価には少なからず驚いた。
なんせ奴とは一度の戦いと、数回の会話しかしたことがない。そ

の一度の戦いも剣を交えたわけではない、ただ闘気を相手と比べただけだ。
この世界では気のようなものが元の世界より敏感に感じられる。
殺気もその一部だが、特に相手に畏怖を抱かせるような覇気、圧倒的なオーラを使えるのは、カルラの知るところでは自分とベイルを含め、あと一人の三人だけだ。それに近いところまで来ているのが、ルナとフィクとその他数名もしくは十数名だけなのだが、カルラはそれでも自分が特別だとかなんて思っていない。
「ああ、俺も不思議に思うぜ。で、カルラさんよ、改めて聞くが手合せお願いできるのか？」
グリフトは目の前でキョロキョロと周りを見渡すカルラを見ながらそう言った。
「ＯＫだ」
辺りを見渡すのを止め、どこか納得した様子のカルラに、グリフトはなんの感情も浮かばなかった。ただ、こいつを倒せば、名実共にこの世界でナンバーワンになれると、そのことだけを考えていた。
にへらと不気味な笑みを浮かべたグリフト。
「じゃあ、フィールドオープン！！」
グリフトが叫ぶと彼を中心に半径十五メートルほどの透けた赤色の円柱が出来た。
この人工のフィールドに入ればダメージを与えること、ダメージを受けることが出来る。
ただし、この人工フィールドに入っても、無制限にダメージを与えられるわけではない。相手もポルを使って了承しなければならない。その制限がないとセーフティーエリア内でも犯罪行為が行われてしまうからだ。なお、人工フィールドに入れるのは二人だけである。それ以上の人数がいる場合フィールドの効果を発揮しない。
決闘と呼ばれるプレイヤーバトルシステム。
どちらかが降参するか、了承したものがフィールドから出れば、人工フィールドは消える。

フィールドを出したものを中心にフィールドが出来るので、フィールドを出したものに場外負けはない。
要するにフィールドを出したものが有利なシステムなのだが、グリフトは今、有利、不利を考えていなく、早く闘いたいという単純な考えでやったことだ。
カルラは透けた赤色の膜を越えるとポルを操作した。
二人の目の前にはカウントダウンの数字が表れ、その数字が確実に減っていく。
グリフトは月光のリーダーになった後の事を考え、ほくそ笑んだ。

カウントダウンがゼロになり、同時にグリフトは地を蹴った。
一撃で決着を着けると意気込んでいたのだが、グリフトは呆気にとられた。
目の前でいきなりカルラが霞んで一瞬のうちに消えてしまったのだ。
周りを見渡してもどこにもいない。
カルラがフィールドから出たら、フィールドは自動的に消えるはずだが、その範囲を示す赤い膜は存在し続けている。
「ど、どこへいった！！」
グリフトは敵の居場所が分からず混乱し、これから何をされるかと思うと恐怖が出てきた。
愛剣である大剣をしっかりと構え、体の向きを変えて周囲を見渡す。
カルラは全く出てくる気配はなく、元から決闘は行われなかったのではないか？と考えた。
しかし、それはない。さっき目の前には、対戦者カルラという文字と、減っていく数字がしっかりと映っていたのだ。
冷や汗がにじみ出てくる。
何をされたわけでもないのに追い詰められていく。何故か呼吸が

苦しくなるのをグリフトは感じていた。
「出てこい！！正々堂々勝負しろ！！」
強がりを吐いていないと足が震えそうになる。
周りで見ている二人も何が起こっているのか分からないといった困惑した表情をしている。
くそっ！！と舌打ちして索敵スキルと自分の気を頼りにカルラを探してみた。
もともとそういう小手先の技が嫌いなグリフトは集中力も続かず、どこかにカルラがいるような感覚だけを味わっていた。
しかし、ふと思った。
場外負けにすればいい。
自分の頭の良さに、頬が緩むのを抑えられない。
グリフトはまた地を蹴って、全力疾走する。体は大きいが、俊敏値にもそれなりに自信があった。
しかし、フィールドは消えず、自分だけがぐるぐると広場を走っている。
焦りが冷や汗としてどっとでてくる。そんな時ふと耳元で声が聞こえた。
「・・・弱いな」
憐れむようなその口調に心底腹が立った。
声の聞こえたほうに大剣を思いっきり振る。否、振ろうとした。
腕を振る前に、手首に強い衝撃を受けそれを阻止されたのだ。
あまりの衝撃に剣を放してしまう。
痛みとはあまり縁のないこの世界ではありえないほどの痛みだった。
剣を拾おうとしたら、目の前を黒い影が通った。
影は大剣を攫っていくと、グリフトから十メートルほど離れた場所で止まる。
哀愁漂う表情で立っていたのは、やはりカルラだった。髪から靴まで全身真っ黒な格好なので、影のように見えた。

「返せ！！」
グリフトはそう言って走り出そうとしたが、足が竦んで立つことさえ出来なくなった。目の前の自分よりも小さな人間にこれまで味わったことの無いような感覚に陥った。
絶対に逆らえない人間。
本能でそう感じた。
カルラはだるそうに背中の剣を抜く。その黒剣の周りには、剣と同じ色のオーラが漂っている。属性攻撃特有のオーラだが、あんな色のオーラは見たことがなかった。
右手で持った黒い剣を左で持ったグリフトの大剣へと近づけていく。
なにをするのんだ？と思ったが、すぐに目的は分かった。
グリフトの剣が綺麗な銀色から茶色い変わり、さらにその剣は脆い砂の塊だったようにサラサラと風に乗って消えていく。
やがてグリフトの剣は消え、カルラがグリフトを見る。
グリフトはそのカルラの行動に驚き、自分の立場さえ忘れていた。呆けて、気力を無くし、座り込んで、カルラから目を離せないでいた。しかし、また目の前のカルラが消える。
グリフトは我に返り、立ち上がろうとする。しかし、それも叶わなかった。
首元に冷たい何かが当てられていた。同時にさっきの畏怖のオーラをさらに近くで感じる。ガタガタと体の震えが止まらず、歯と歯が当たってガチガチと音を立てていた。
負けを認める言葉も口にすることすら出来ない。
「弱い」
後ろから声が聞こえた瞬間、まだ震えは残っているものの、体の自由がきくようになっていた。
「こ、降参！！」
勝ちたいという気持ちよりも、グリフトは今すぐにここから逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

赤い膜が消え、ほっとする間もなく横腹に蹴りが入れられる。
あまりの威力に体は宙を舞い、十数メートルも飛んだ。
横腹の痛みと、嫌な浮遊感で吐き気を催す。
「出てこい月光」
小さいが響く声でカルラが言うと、近くから足音が聞こえる。
見るとベイル、ルナ、フイクが近づいていた。
グリフトは蹴られて吹っ飛ばされたことに憤慨するのでなく、カルラという人物から離れられたことに歓喜さえ湧いていた。
しかし、そんな気持ちはすぐにどこかへ飛んで行った。
「グリフト、ギルド追放だ」
ベイルの一言に頭が一瞬真っ白になり、次に確かにカルラに負けたらギルドを追放するという条件があったことを思い出した。
「・・・・」
もちろん納得できない気持ちもあったのだが、何を言えばいいか分からず、ただ三人を睨むことしかできなかった。
「随分とひどい扱いだな」
「君がもらってくれるかい？」
「嫌だ」
即答するカルラにベイルは苦笑する。
「やはり、君がゼロスか」
「そんなこと言ってねーよ。ただこんな野郎いらねーつってんの」
クックックと本格的に笑いだすベイルにカルラはイライラしてきた。
「こ、この男がゼロス！？」
隣にいるルナはありえない！！と言いながら、目を見開いている。
グリフトも同じ感想でただ茫然と寝転がっていた。
「そうそう、こんな俺みたいなやつがアナザーワールドで一番の働き者に見えるのかい？」
カルラがそう言ってぐるりと見渡すと、一人ニヤニヤとしているフイクが目に映った。

「カルラさんそれ自分を褒めてるんですか？」
「・・・フイク後で覚えてろよ」
カルラが舌打ちすると、ヒィイイイとわざとらしい声を上げるフイク。それを見てあまりの怒りゆえにカルラは引き攣った笑いをしてしまう。
「・・・ねぇ、カルラがゼロスって本当？」
「ん？」
後ろから声が聞こえて、ルシアーナとデイジスがいたことを思い出した。
「え、えーっと、俺は下っ端でな！！本当に活動しているのは他にいるんだよ！！」
「カルラさんもう無駄ですよ」
「えぇ！！しかも、ゼロスって一人なの！！」
カルラの言い訳をことごとく潰すフイクと、さっきから騒いでいるルナがうるさい。
本当に二人とも黙ってくれないだろうか・・・・。
「あぁ、もう！！ゼロスがどうしたって言うんだ！！」
カルラが叫べば、一同は沈黙した。その沈黙にはいろいろな意味が込められている。
張本人に呆れているが、ゼロスというギルドに対しては尊敬と憧れと感謝を持っていたのだから。

覇気（後書き）

登場人物の紹介的なのをやりたいけどテストで出来ない・・・。
がんばって更新はしたいと思います。

ゼロス

『ゼロス』。
そのギルドの名は、月光の次に、いや同等なくらいに有名だった。
理由は大きく二つ。

まず最初にクリアへの貢献度。
メインダンジョンのマッピング。その全体の約七割が、このギルドだけで行われているのだ。
ギルド通信によって配信されるその情報はありえないくらい早く、細かい。
ただマッピングするだけなら全てこのギルドだけで出来るのではないかと、言われているほどだ。
最初に公開される情報はマッピングの情報だけだが、ダンジョン全体の五割が終わっており、しかもその時には他のプレイヤーはまだダンジョンにたどり着いてすらいない。
そして次に送られてくる情報は、宝箱の位置と中身、トラップの情報だ。
その時にはすでにマッピングの約七割が終わっており、他のギルドがやっとダンジョンに到達するような頃である。
そして他のギルドがマッピングされている最下層に着く頃にはモンスターの情報が流されている。
ダンジョンにはゼロスの姿は見当たらず、それから先は他のギルドだけのマッピングとなる。
そんなありえないクオリティとスピードにプレイヤー達は感謝をしている。

次に、ゼロスというギルドにある謎だ。
まず、規模が分からない。

なぜなら、誰もゼロスのギルドメンバーを見たことがないのだから。
人数、レベル帯を客観的にみると、月光すら超えるギルドと言われているが、それほどの大人数の高レベルプレイヤーの集団を見たことがないのだ。
そして、なぜ隠れるかである。
ボス戦は不参加であるが、それを覆すほどの貢献度があるのだから、表へ出てきてもいいはずなのだ。
それこそ、胸を張っていいほどだ。
いろいろな噂が流れるほど、謎の英雄として有名である。

それがゼロスというギルド。
もともと有名にならないために名前を隠していたのだが、逆にそれで有名になってしまったのだ。
ゼロスのたった一人のメンバーが頭を抱えるほどに。

□■□■□■□■□■□■□■□■

「・・・・」
ムスッとした表情のカルラは一切何も話そうとしない。
困り果てたフイクが最後の手段をとる。
「ゼロスの情報をばらまきますよ」
満面の笑みで言われ、カルラはダラーっと机の上へ項垂れる。
今、月光の四人とウルクドの五人、そしてカルラは月光の本部の会議室にいた。
行われているのは交渉なのだが、カルラは完全に不利であった。
ちなみにグリフトはあの後、カルラが連合に入る事を匂わせたら、自分から月光を脱退してどこかへ逃げて行った。
ベイルはあそこで逃げなかったら月光に残しておくつもりだったらしいが、真実は分からない。

「どうするの？」
おっと、グリフトの心配をしている場合ではないのだ、今は自分の身が危ない。
「どうもしません！！」
ルナの問いに必死に抵抗する。抵抗というには情けないものだったが。
どうせ連合の件は誰が何と言おうとほぼ確定なのだ。ほとんどフイクのせいで・・・。
思い出して無性に腹が立ってきたが、ルシアーナの声で会議室に意識が戻ってきた。
「それにしても、あの戦いの時なんでグリフトはへんな行動をとっていたの？」
「え、何が？」
「だってカルラはずっとあの人の後ろに立っていただけじゃない」
傍から見たら確かにそうだろう。ただ、グリフトの背中に張り付いていただけ。
ああ、とカルラが言えば早く早くとルシアーナが急かす。
「一瞬で視界から消えて、気配を消していただけだよ」
「・・・・・はい？
えーと、それって隠蔽スキルの事？？」
「んー・・・合ってるけど、合ってないかな。
それに近いけど、隠蔽スキルって気配を消すわけじゃなくて、この世界から存在を消す、存在を薄くするスキルなんだ。
だから、目では見えないけど、気配では分かるっていうのかな・・・。
で、気配を消すっていうのは、スキルじゃなくて、本当に気配を消しているんだよ」
感心して聞いているルシアーナだが、その奥にいる忍者もといレイナは苦笑している。
もともとこの技術は彼女から教わったのだ。習ってすぐにコツを

掴んで、「カルラは忍びになれるわ」と絶賛を受けたのだが、まだまだ彼女と、彼女の姉には及ばないだろう。
グリフトとの戦闘を見ていなかったウルクドのおっさん三人は何のことだ？と首を捻っている。それにフイクが答えれば、クリスとドージが笑いだし「らしいなー」などと言っている。
多少の居心地の悪さを感じてフイクを睨めば、肩を竦められる。
あいつはいつからあんな性格になってしまったんだと、悲しくなる一方、その成長が少し嬉しくもあった。
横を見れば隣に座っているベイルと目が合った。にこっと青年らしい笑顔を浮かべられれば、フイクの育ち方がこの腹黒い男が犯人だと分かって少々苛立った。
「それにしてもドラゴンを倒したのって本当？」
「んー、まぁな」
レイナの質問に鼻の頭を掻きながら答える。目立つのは本当に嫌なのだ。
「多少慣れてたし、それに相性がいい相手だったからなぁ・・・・それにあんな戦い方してたらいつか死ぬ」
「慣れてたねぇ・・・」
訝しげな表情のレイナを見て少し焦る―――あれのことは誰にも教えていないのだが。
「他にも聞きたいことがたくさんあるわ！！」
がばっと立ち上がったルナは、顔を上気させてどこか気分がいいように見える。
こっちは朝から何も食べてないし、いろいろあって疲れてるのだが・・・。
困ったようにベイルを見れば、首を縦に振った。気が効く奴だ。
「明日に宴会を開くから、カルラ君ともそこでまた話をしよう！！」
「へ？」
しかし、告げられた言葉は予想外で、カルラは間抜けな声を上げてしまった。慌てて立て直して、疑問を口にする。

「宴会っていうのはどういう事をするんだ？」
「友好的なギルドのメンバーを集めて、交流を深めようということだよ」
「俺はいかない・・・」
言った直後、空気が明らかに重くなった。
取り繕うように微笑んで、会議室を出る。それこそ逃げるように。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■

翌朝一番にカルラは第三の島≪トレ≫の小さな町に来ていた。
カランコロンと来客を告げる鈴が鳴る。
「いるかー！？」
「・・・あぁ？」
まだ朝六時で、起きているか心配だったが、どうやら杞憂だったようだ。
目的の人物はカウンターの上にさまざまな素材を広げて、鑑定スキルを使っている。
「ほい」
ぽいっと背中の長剣を鞘ごと投げる。
ガターン！！と激しい音を立てて、カウンターが揺れ、素材アイテムは宙に舞った。
「ぶっ殺すぞ小僧！！」
「まじ、申し訳ないっ！」
カルラは右手を縦にして胸の前に持ってきてゴメン！！のポーズを取る。
「カルラてめぇわざとやってるだろ？」
あぁ！！とドスの効いた目で睨まれるが、カルラは「それお願い」と言って店の中を歩き始めた。
「ったくてめぇは・・・」
「さんきゅーガイヤ」

渋々と言った感じで男はカルラの長剣を持って店の奥にある工房へと歩いて行った。
あの男――ガイヤは元ヤクザで、商人兼鍛冶屋だ。戦闘用スキルではなく、いろいろな職人スキルを上げているプレイヤーはそう少なくはないのだが、ガイヤほど極めている人間は少ない。
カルラはカウンターの奥の椅子に座る。一応客だが、ガイヤとは付き合いが長いのでそんなこと気にしない。
後ろでは剣を砥ぐ音が響いている。
その音を聞いて、どこか安心しカルラはいつの間にか眠っていた。

ゼロス（後書き）

ちょっと短くなりました・・・。

ガイヤとの出会い

長剣取得クエストをクリアして数日、俺はずっとダンジョンに籠ってひたすら自分の強さを求め続けた。
あの時に会ったドラゴンの存在に魅せられ、自分もそれを目指した。
別に人を殺せる力がほしい訳ではない。
絶対の力がほしいんだ。
「・・・・」
何十ものモンスターが俺を囲んでいる。
ランダムに湧くモンスターはここまでの数になるまで集まらない。
なぜこんな集団になったかというと、もちろん自分で集めたからだ。
モンスターを見つけては、わざと視界に入って引き寄せる。そんな事を何回も繰り返し、ダンジョンの一層全てと言うほどのモンスターを集めた。
効率なんて悪いに決まっている。
べつにレベルだけが強さではない。それも一つだが、強い精神力。あの時はそれが必要な気がしていた。
回復アイテムは使わずにモンスターを倒していく。
ＨＰゲージが赤くなる。
自分を痛めつけ、追い込み、極限を目指す。
全てのモンスターを倒す頃にはＨＰゲージを見るために目を凝らさないといけないほど少なくなっていた。
勝った・・・・。
そんなギリギリの闘いが終わると、自分の命が存在していることを認識できて、自分の強さが証明できた気がして、安心できた。
もちろんそんなの詭弁だった。

久しぶりに拠点としている村に戻ると、プレイヤーたちはやけにソワソワしていた。
話によると、遠征隊がダンジョンに行ったきり、帰ってこなかいらしい。大人数で行って、帰ってこなかったのを聞いて、他のプレイヤーたちは確かに心配になっていた。
しかし、自分の命の危険を冒してまで、助けになんて行きたくないというのが本音だ。
「カルラさん、助けてください」
一人の男に懇願される。
俺は少なからず喜んでいた。
自分が認められて、うれしかった。
この事件を解決できれば、もっと自分は強さを証明できるかもしれない。
そんなことも考えた。

ダンジョンのモンスターは今までにないほど手強かった。
でもそれは、今までの雑魚モンスターと比べてだ。
俺の相手にはならない。
レベルが十でその当時の上位プレイヤーだった。しかし、俺のレベルは十五と、通常のプレイヤーとはかけ離れていた。
効率だけならソロの方がいい。
ずっとソロだった俺は、他のプレイヤーよりレベルアップが速いのは当たり前だった。絶対的な狩りの時間も質も俺の方がいい。
俺は驕っていた。

ダンジョンの最下層までたどり着いたが、そこには誰もいなかった。
すでにプレイヤーたちは死んでしまったのだろうかと考えた。
しかしそれは違った。

後ろから足音が聞こえたので俺は振り返る。そこには何十人ものプレイヤーが立っていた。
騙された！！
そう思う間もなく、プレイヤーたちは襲い掛かってきていた。
俺の名前は拠点としていた村の周辺のプレイヤーには割と知られていた。さまざまなクエストをクリアしている荒稼ぎしているソロプレイヤーだと。
そんな俺は騙し討ちするには格好の的だったのだろう。
そこまで考えても俺は動けなかった。足が震えている。こういうと時に動けるように強さを求めて、少しは成長できていると感じていたのに。
本当の醜さを見たのは二度目だった。忘れもしないレイスを殺した三人組の男達。あの時こういう奴は確かに存在しているとその時、分かったはずだった。そんな奴らは稀にしかいないと思っていた。
俺は愚かだった。
何のために絶対の力を求めていたんだ。
自分だけの力で全てを終わらせるためだろう・・・。
寒かった。
孤独だった。

やっぱり一人の方がいい。
ずっと一人なら孤独じゃないから。暖かさを知って落とされるほうがよっぽど辛いから。落とされるぐらいなら最初から一番底にいればいい。

俺は笑う。
その時にはすでにＨＰは真っ赤だった。流石にプレイヤーたちは俺を殺す気がなく、ただ脅してくるだけだ。
覚悟もない。
一緒だ。

彼らも下等なのだ。
醜い人間なんて、潰してしまえばいい。
あの時だってそうしたじゃないか。
立ち上がると同時に剣を背中から抜いて、そのあとは――
――斬る。
――突く。
――薙ぎ払う。
その三つの行動だけをした。その場から一歩も動かなかった。
「・・・・弱い」
俺は小さく呟やく。
その言葉を誰に言ったのかは自分でも分からなかった。
一人を大人数で囲んでおきながら、殺す覚悟もなく、逆に殺された醜い人間に言ったのか。
愚かで、本質は何も変わっていなかった自分自身に言ったのか。
「化け物！！」
部屋の隅に逃げていた男のプレイヤーが叫んだ。
いつの間に逃げ出したのだろう・・・・一人も逃がさないつもりだったのに。
「逃げたのはお前だけか・・・？」
近づきながら静かに言う。
男の体はいきなり震えだし、そのまま失神した。
なぜだろう。さっきもこうやって倒れる人間がたくさんいた。
索敵スキルを使うが、周辺に人の気配はない。
この男以外は逃げ出していないだろう。

そう考えた。というよりも、そうあってほしかった。
目の前の男を葬り、何の感慨もなく、村に戻った。

向けられる恐怖の目。
どうやら希望は叶っていなかったようだ。
「化け物！！」
叫び声がする。
誰の声か特定することは難しかった。
俺は声の聞こえたほうを一瞥する。
目を向けた先の人々は震えだし、その場に気絶する。泡を吹いている奴までいた。
「俺が悪いのか？」
俺の言葉は、自分で言ったのが疑わしくなるほど低かった。
この村にいる全員が共犯者だったのか？
・・・・面白い――――
その村を出たのは約二時間後だった。
セーフティーエリア内なので、ダメージは与えられなかった。それでも恐怖は与えられる。

村を出て、適当に歩いていた。
まっすぐ歩いて、気まぐれに曲がり、自分の心を落ち着かせる。
狂気の目だと言われた。
自分でもそう思った。狂っていたのだろう。それでも止められなかった。そこで止めたら、自分が壊れる気がして。
丸二日は歩いただろう。
流石に飲まず食わずで歩き続けるのはきつい。
そろそろ近場の街に行こうとポルを見てみた。どれだけの距離を歩いたのだろうと、少しだけワクワクした。
しかし、実際は村から言うほど離れていなかった。
丸二日歩いたのに、直線距離だと、四時間も歩けば着く距離じゃ

ないか。
他の街や村まではもっと時間がかかる。
今の状態で無暗に歩き回るのは危険だと冷静に判断して、あの村に戻った。
戻るのは嫌だった。
それでも命には代えられない。
いつ倒れてもおかしくないような状態になりながらも、やっと村にたどり着いた。村に入った瞬間に安堵して意識が遠のいていく。
ダメ。危険だ。脳ではいろいろな危険サインが出ていた。
倒れながら、最後に見たのはいかつい男だった。
俺は死んだ・・・・。
そう考えながら意識を失った。

起きたのはベッドの上。
徐々に覚醒していくが、そのスピードはいつもよりも遅い。
朝は強いはずなのに、クラクラする。
「起きたか・・・？」
ガチャリとドアが開くとそんな声が聞こえた。
定まらない思考だったが、俺は素早くベットから抜け出し、背中の剣の柄を握ろうとした。しかし、そこに長剣の柄はない。
やられた！！
ぼやける視界の中で相手を睨む。
分かるのは相手がかなりいい体格をしているという事だけ。周りに武器となるものがないか探す。もちろんそこら辺にあるオブジェクトに望むような攻撃力なんてない。
それでも自己防衛の反応なのか、何か武器がないと落ち着かなかった。
「剣ならここにあるぜ」
体格と、この低い声からして男だろう。そんな事を考えながら男

が指差した方を恐る恐る見た。
罠かもしれないと思ったからだ。
俺の剣は男の指さす方にちゃんと存在していた。
距離的には男よりも俺の方が近い。
そう考えた瞬間、俺は動き出した。
剣を鞘ごと掴むや否や剣を構える。鞘から刀を抜くよりも、先に防御の姿勢を取りたかった。
「助けた相手にする態度かおらぁ！？」
悪態をつく男。
やはり、なんらかの目的で俺をここまで連れてきたのだろう。
はっ！！と思って剣から鞘を取る。
しかし、そこにある刀身は、いつも目にしている自分のものだった。
「どういうつもりだ・・・？」
俺は立ち上がりながらそう言って、ギロリと睨む。未だに視界は晴れなず、イライラが高まる。
「どういうつもり？お前が倒れているのを見て助けてやったんだろうが。それが恩人にする態度か、ああ！？」
恩人？
そんな事誰が信じるか！！
「嘘だな！！
人間は、人間は――――ッ！！」
言葉が出ない、心が痛い。
「お前も人間だろうが！！
今まで出会ってきた人間の中で絶対に信用できる人間もいただろうが！？
それになんでお前は泣いてる？
お前にはそれが分かってるから泣いてるんじゃないのか！？」
――――苦しい。
俺が泣いてるだって？

そう思いながら、袖で目を拭ってみる。視界は晴れて、袖は濡れていた。
拭っても、拭っても涙が溢れてくる。
気付いていなかっただけで、男の言葉以前もずっと泣いていたんだろう。
「お前に何があったのかは知らん。
辛いことがあったんだろうとは目を見れば分かる。
ただ、それだけが全てじゃない。今の価値観だけで――」
男の言葉の途中でまた俺は気絶した。

「名前は？」
「・・・・カルラ」
思う存分食べ物を食べると、男は訊いてきた。
「俺はガイヤだ」
「ありがとう、ガイヤ」
素直に感謝の言葉を口にする。
「自暴自棄にはなるな。
お前がダメになって、悲しむ奴がいるはずだ。
俺が言えた義理じゃねえがな」
ガイヤはふっと微笑む。
どうやらこの男は見た目と違ってなかなかいい奴らしい。
「分かった、じゃあ俺はもう行く」
そう言って俺は立ち上がった。
いい奴でも、悪い奴でも、今は人間というものの近くには居たくなかった。
さっきは分かったと返事したが、もう俺はすでに自暴自棄になっていると思う。
「本当にありがとう」
出来るだけ明るい表情でそう言った。
心配を与えたくないと思ったのか、弱いところを見せたくないと

思ったのか、あるいはその両方だったのか。
俺は部屋を出る。
「カルラ、お前の眼はまだ死んでいない。
いつでも俺のとこに来い、相談位は乗ってやるから」
ガイヤの声が聞こえるが俺は振り返らない。
振り返ると、歩き出せない気がしたから。
「たまには立ち止まってもいいんだぞ」
俺の心を読んだようにそんな声が聞こえる。
また泣きそうになってしまったが堪えた。
今ここで泣いたら、かっこ悪すぎる。
そんな事を考えて、かっこ悪いとか思っている自分に呆れて思わず笑ってしまう。
今度もう一回ガイヤに会おう。
そう誓った。

嫌われ者？

「終わったぞ」
そのガイヤの言葉でカルラは起こされた。
「ああ、ありがと」
また嫌な夢を見たなと、心の中で呟く。

あの最初の出会いの後、ガイヤとは何度も会って、いろいろな話を聞かせてくれた。
ガイヤの家は父と母にガイヤが長男で、弟と妹のいる五人家族だった。
ガイヤが高校二年生だったある日、父が病で亡くなって、高校に行く金もなく、結局就職も出来なかった。
また、いろいろと騙されて、家には大きな借金が出来た。
バイトをしつつ、喧嘩に明け暮れる日々。たまたま喧嘩を見ていた男に腕っ節の強さを買われてヤクザになったという。
まだ、中学生だった弟と妹のために必死になって仕事をした。やがて彼らも高校を卒業していって、母もそれまでの苦労のせいか、四十五という若さで亡くなった。
ガイヤも二十六歳になって、目的もなく毎日がただ過ぎていくだけ。
そんな中でこの世界に来た。
彼は幼いころ、父に憧れて商売人になりたかった。
だからこの世界では、商売をしたいとこうやって店を開いたのだという。
彼にしてみれば、カルラはまだまだ甘いらしい。
人を裏切ったり、人に裏切られるなんてことはざらにあったとい

う。「そう言う業界だからしかたないんだけどな」と彼はその話をしたときに自嘲気味に笑っていた。
ガイヤはカルラのことを大変気に入ってるらしく、なんだかんだ言って結構面倒を見てくれた。
カルラはそんなガイヤに感謝しているのだが、そんなガラじゃねーといつも悪態をついてくる。まあそれも彼の優しさなのだろう。

「おい、訊いてんのか！！」
「え、ああ、訊いてなかった」
意識が別のところに行っていたカルラはガイヤに拳骨を入れられる。もちろん痛みはないが。
「ったくお前は・・・寝ぼけてんなよ。
それよりもだ。お前はどんな使い方をすればそんなに早く剣の耐久値が減るんだ？一瞬間で二回は来てぞ・・・。
この剣は相当な代物だろ」
そう言ってガイヤはカウンターの上に乗ったカルラの長剣を指差す。
「・・・ん、まぁ最近はいろいろあって」
確かに普通に使っていれば、この剣は一ヶ月に一回砥いでも細かいペースだろう。
「あんま無茶すんじゃねーぞ」
そう言ってまた工房の方へ行くガイヤ。
なんだかんだ言って、やっぱりあいつは優しい。
ニヤニヤするのを止められず、ガイヤに「気色割いぞ」と言われた。いつの間に戻ってきていたのだろうか。
「それにしてもカルラ」
「ん？」
またさっきと同じ位置に立つガイヤ。
「お前連合の件はどうするんだ？」
「ああ・・・」

カルラはガイヤの問いに曖昧に答える。
まだ決めていないのだ。これからそういうのも必要になってくると、カルラ自身分かっているのだが、強要はされたくない。
他人と接するのはまだどこか怖いのだ。
ガイヤ、フイク、レイナとウルクドの初期メンバーぐらいではないだろうか、ちゃんと向き合って話が出来るのは。
それ以外の人間には、表面的に冷静を装っているが、内面では怯えている。
信用してもいいと理解していても、拒否してしまう。
信用できる彼らは、そんなカルラのことを心配して、今回の連合の件を取り計らってくれたというのもあるとカルラは考えている。
それでも・・・・。
「焦んなよ」
ネガティブな思考になってしまっていたのをガイヤに止められる。
「分かってる」
「お前はいろいろと巻き込まれやすいんだろうな。
俺よりも苦労しそうだ」
ガイヤは苦笑している。
「うっせーな。
こっちにしてみたら、大問題なんだっつーの」
心が軽くなる。
やっぱり、ここは居心地がいい。
そんな事を考えていたら、カランコロンと誰かが店に入ってきた。
油断しきっていて、全然気付かなかった。強張る体の緊張をほぐしつつ、出入り口の方を見る。
ほぼ真正面のそこにはルナが立っている。
やけに怒った表情の彼女に、カルラは首を傾げる。
「いらっしゃい」
彼女に声をかけるガイヤ。
邪魔かな、と思ったカルラは席を立ち出入り口に向かう。すれ違

いざまに睨まれた気がしたが、気にしないことにしておく。嫌われることにはなれている。

店を出てすぐに転移する。

カルラしか知らないとっておきの場所へ――――

嫌われ者？（後書き）

今回は短いです、すいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8452w/

Chaos of Hell

2011年10月13日20時27分発行